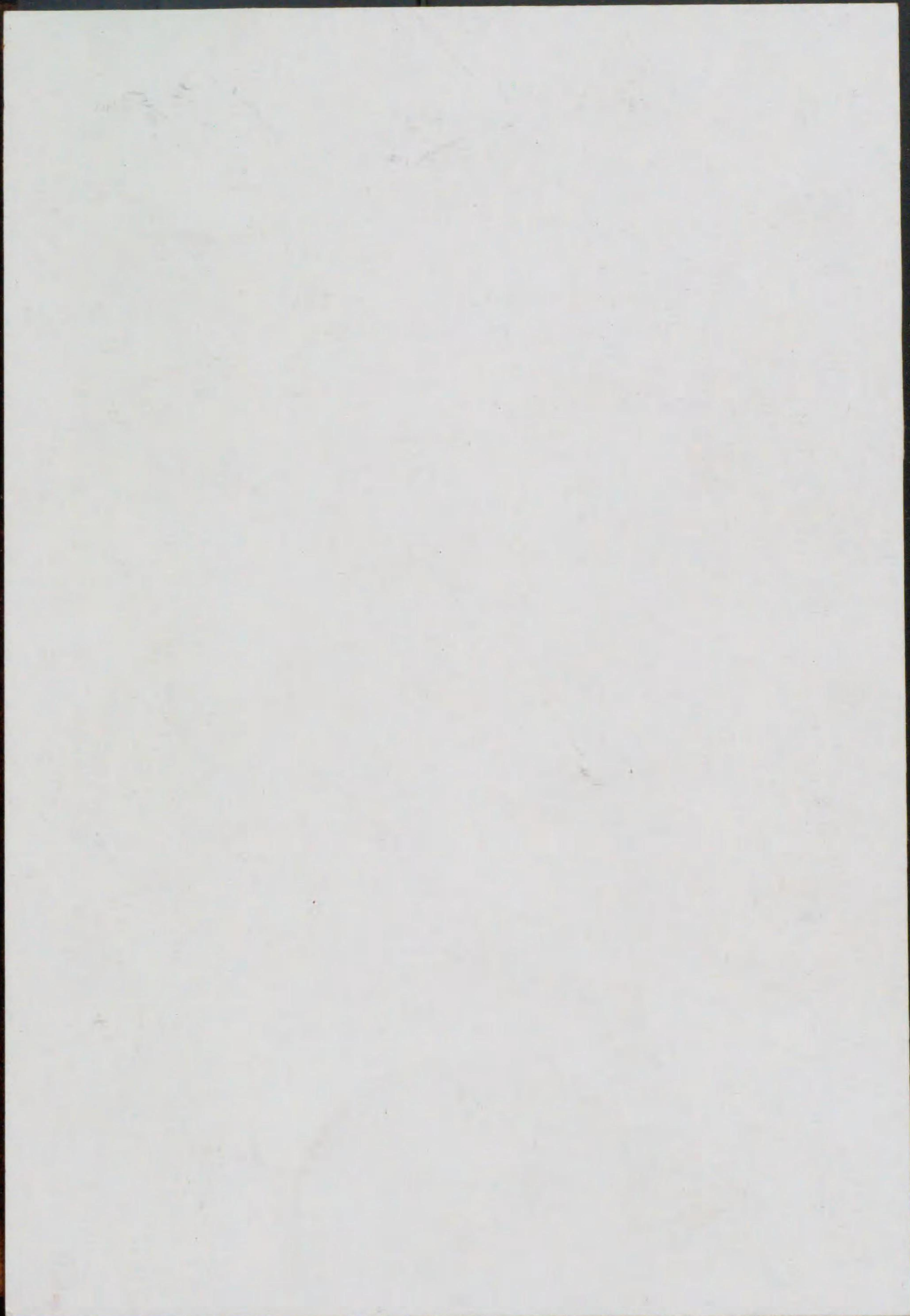


602
21





天甲王曰而令尹志井了制
日孟西巽南所制我成特好制
我下管三方雲我日德德也
得上沛中曾一白口行市
自南台於由萬沙中扣蜀三
我至十匣不卷入子又九夫
心王又三白不爾年又辛夫
又王曰孟也下南台備真
王休用占孟也下南台備真
王休用占孟也下南台備真

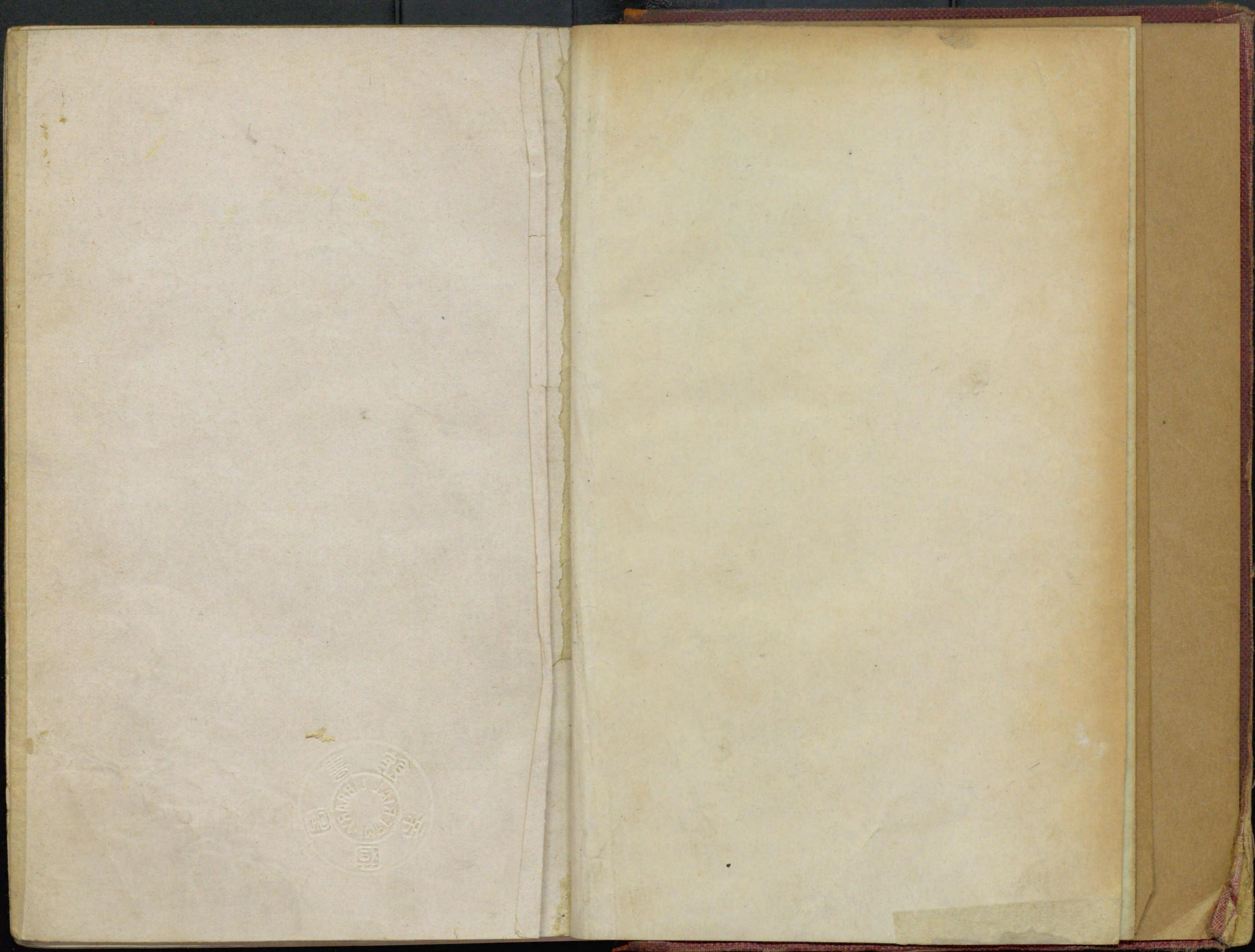


大支那大系

512

第八卷





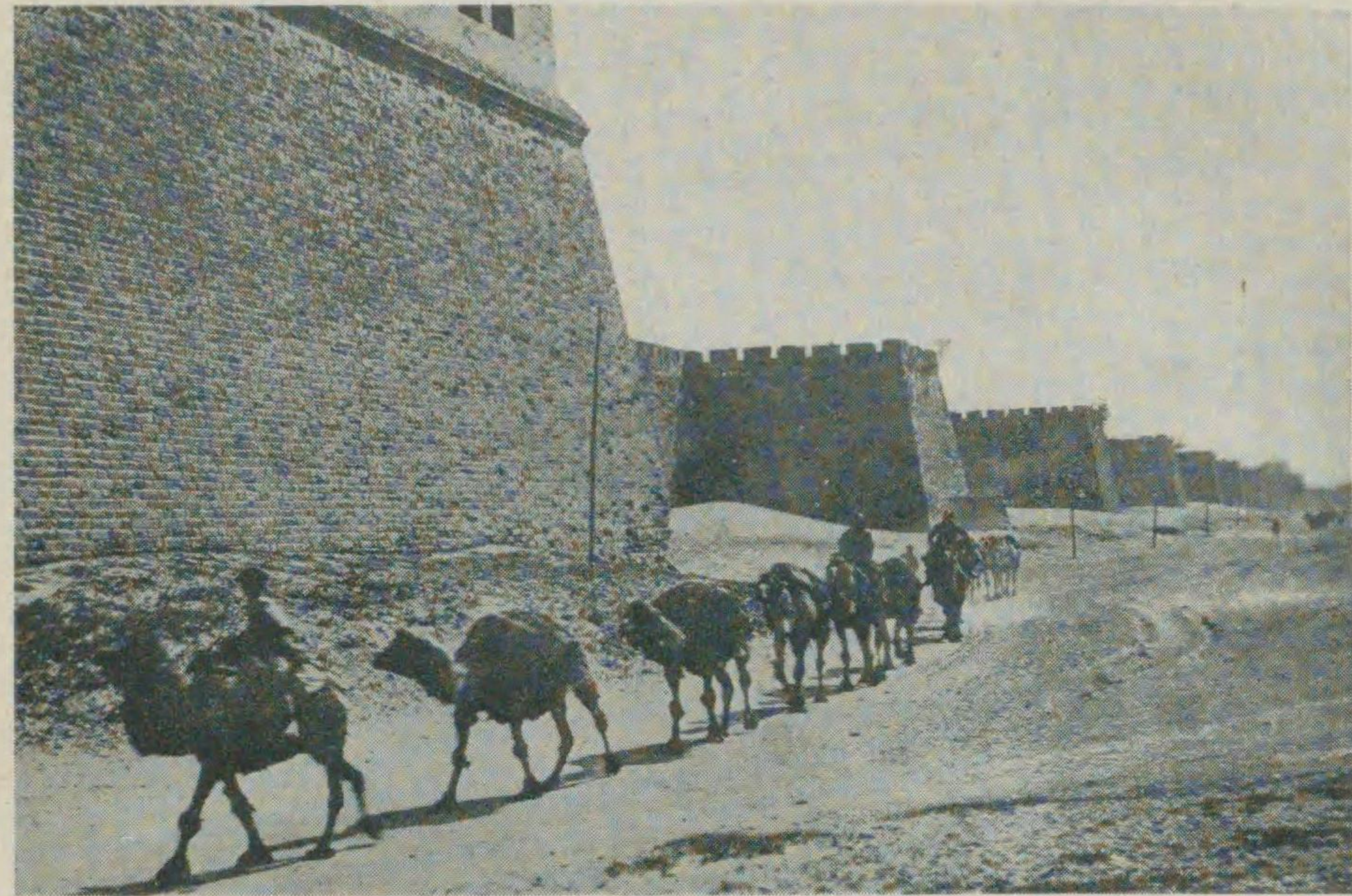


藏氏祥祐氏禿 (のもの頃隆乾) 圖の人美 畫版那支

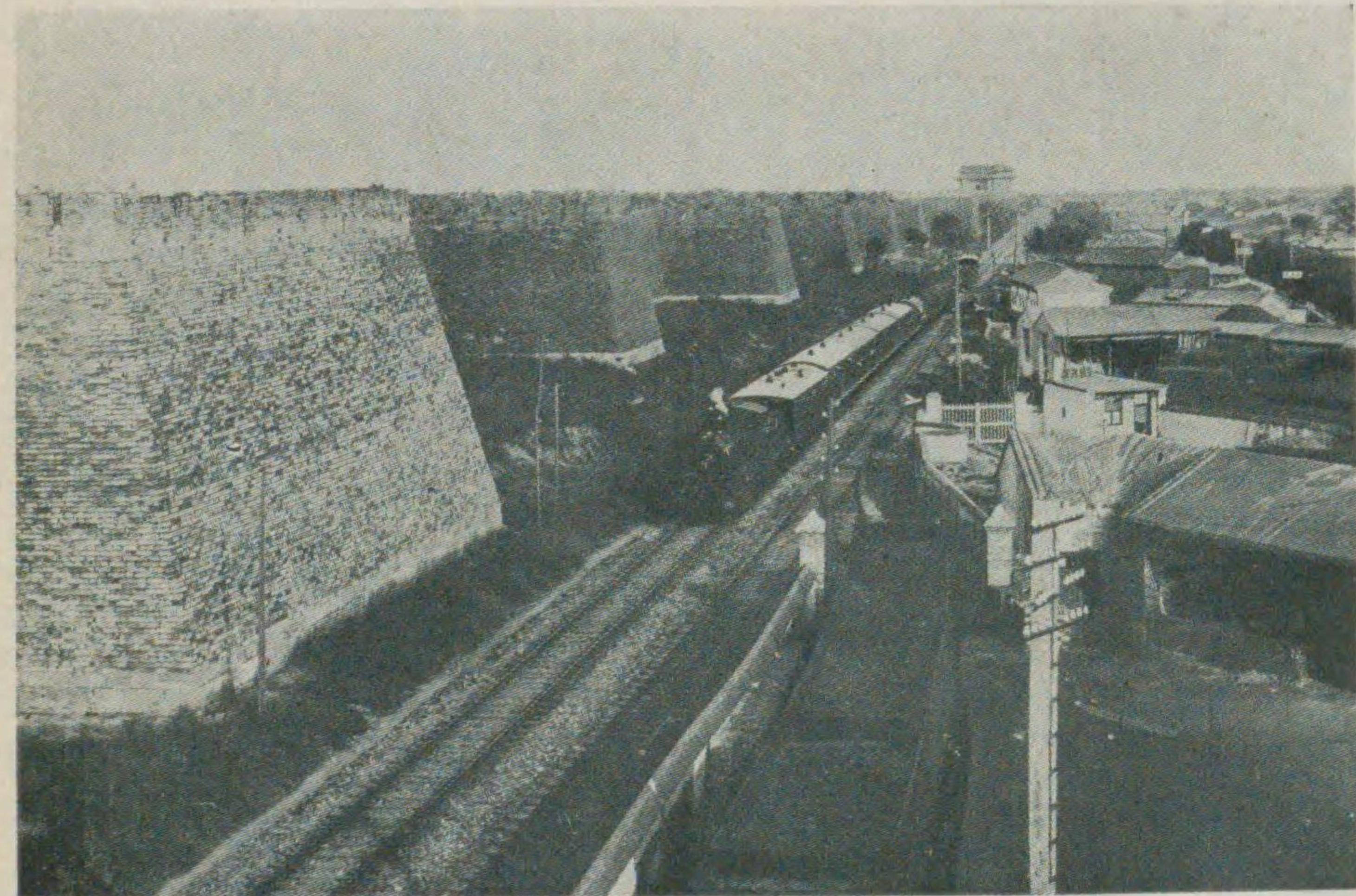


刀龍青の用身護其と飛張る護を羽關



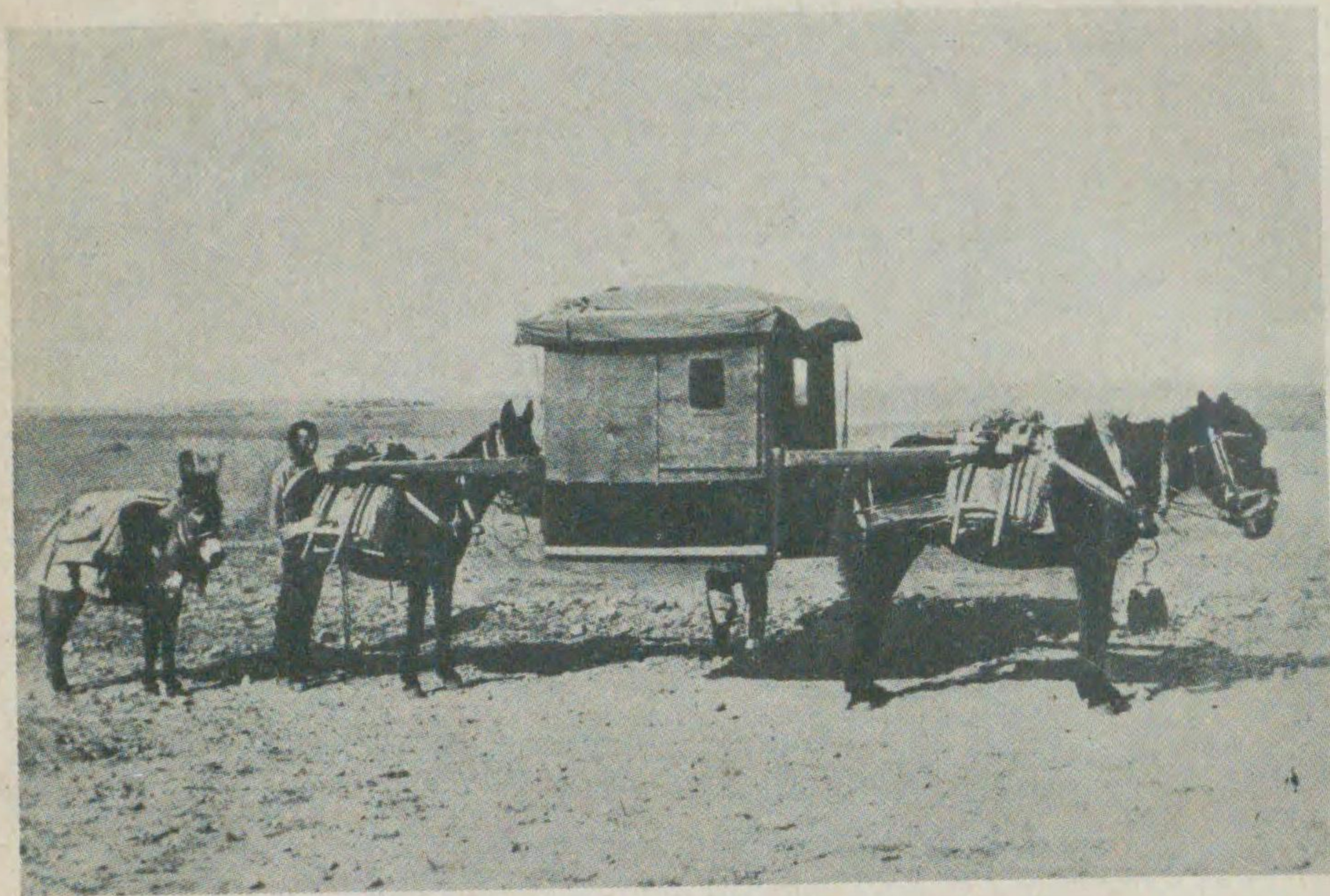


行古蒙の隊駝駱外城平北省北河 (一)

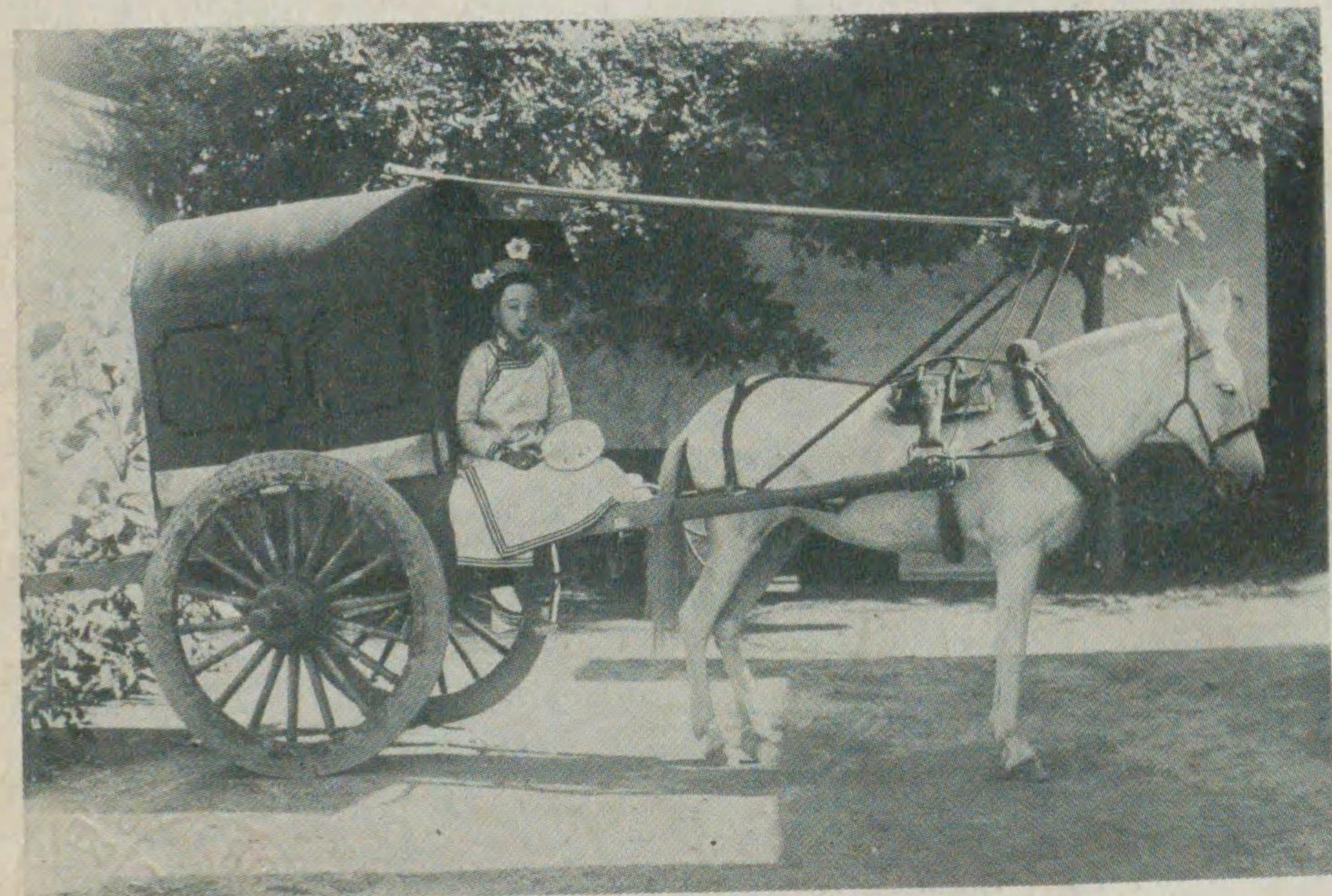


線狀環の路鐵外城平北 (二)

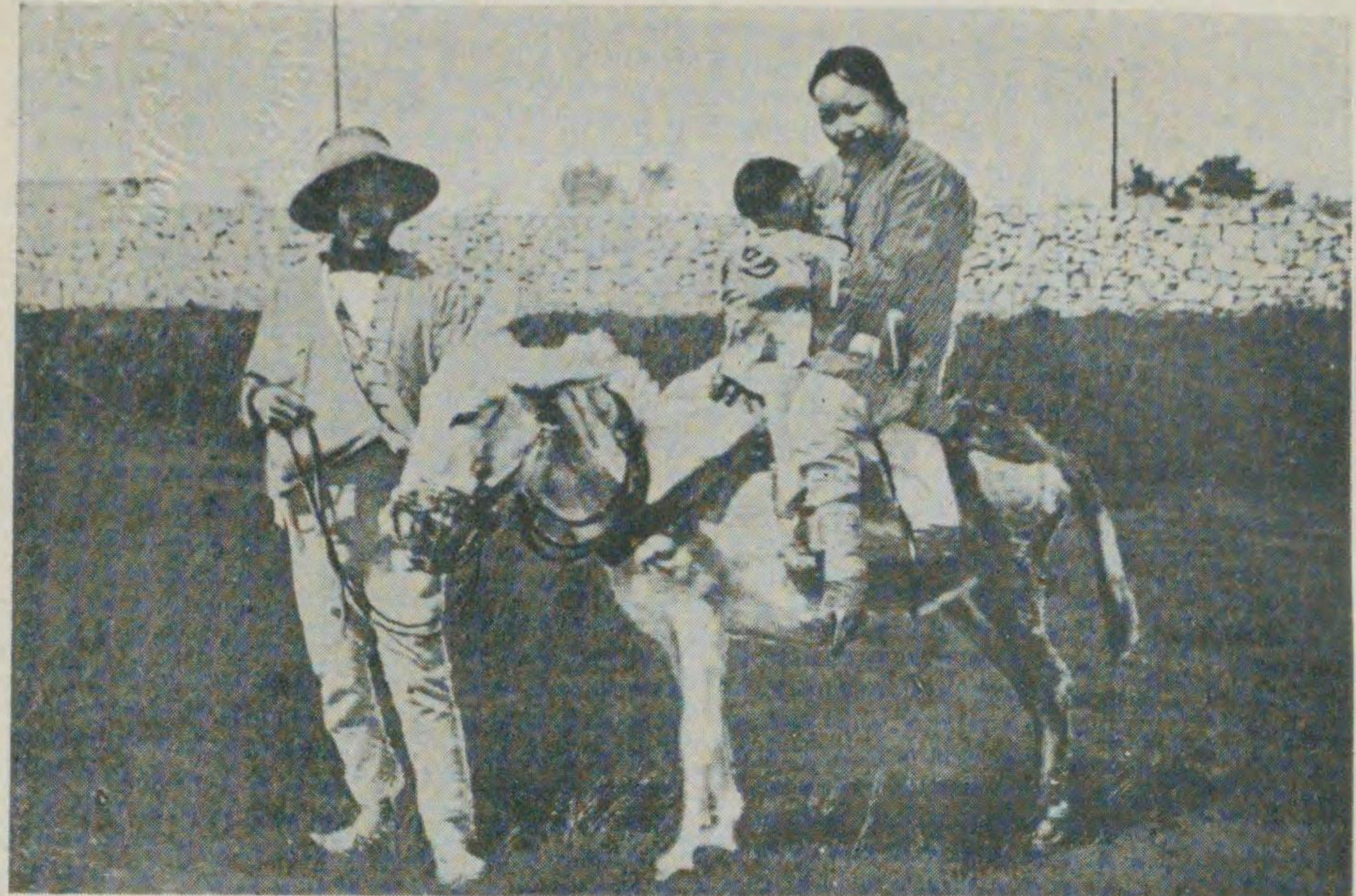




趣情の轎驢ゝるらひ用に遊漫舎田の那支北 (三)



車馬ゝるらせ視利便に歴遊の那支北 (四)



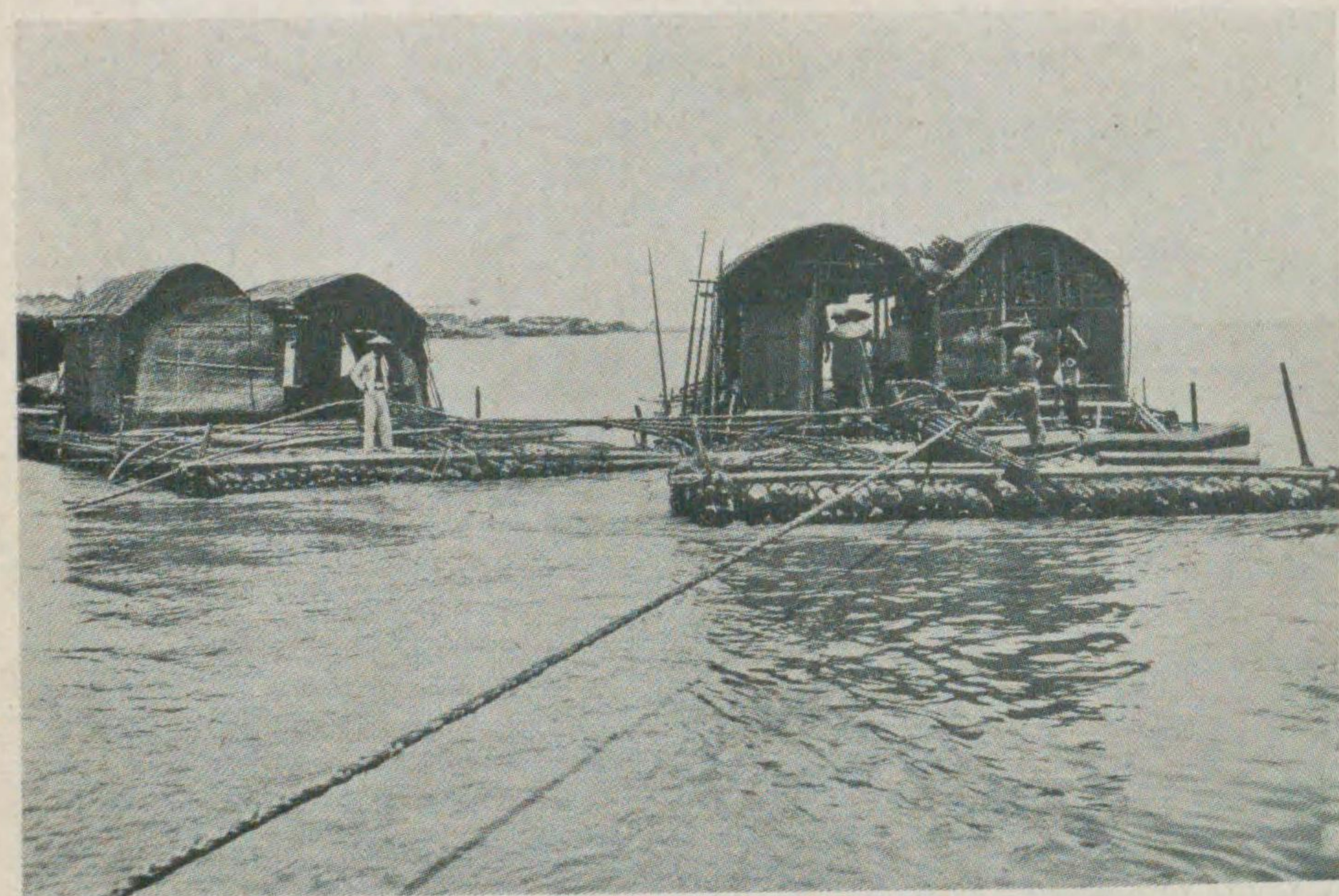
供子人婦るれが跨に馬驢の用家自 (五)



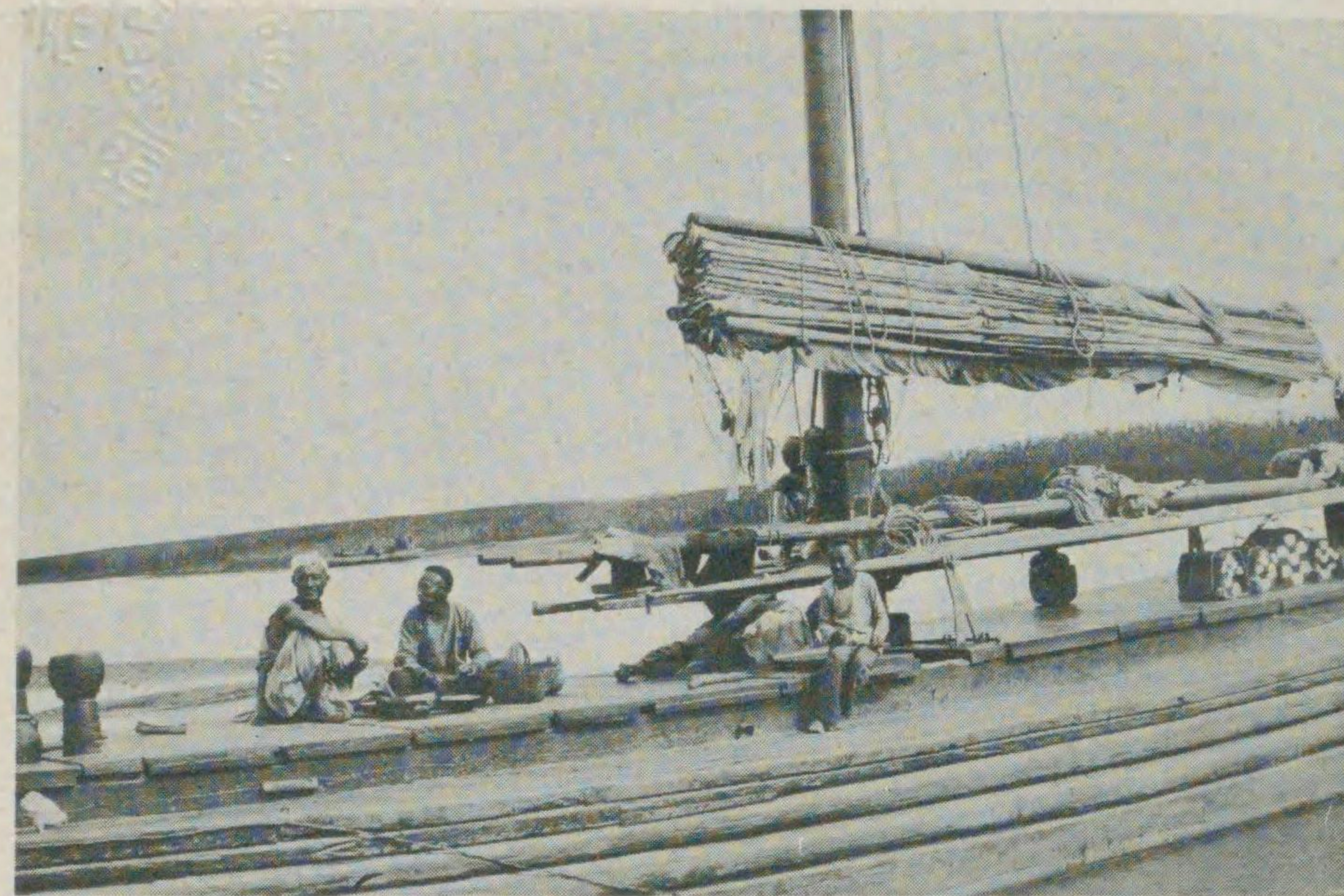
趣情の車輪一く行を外郊の南江 (六)



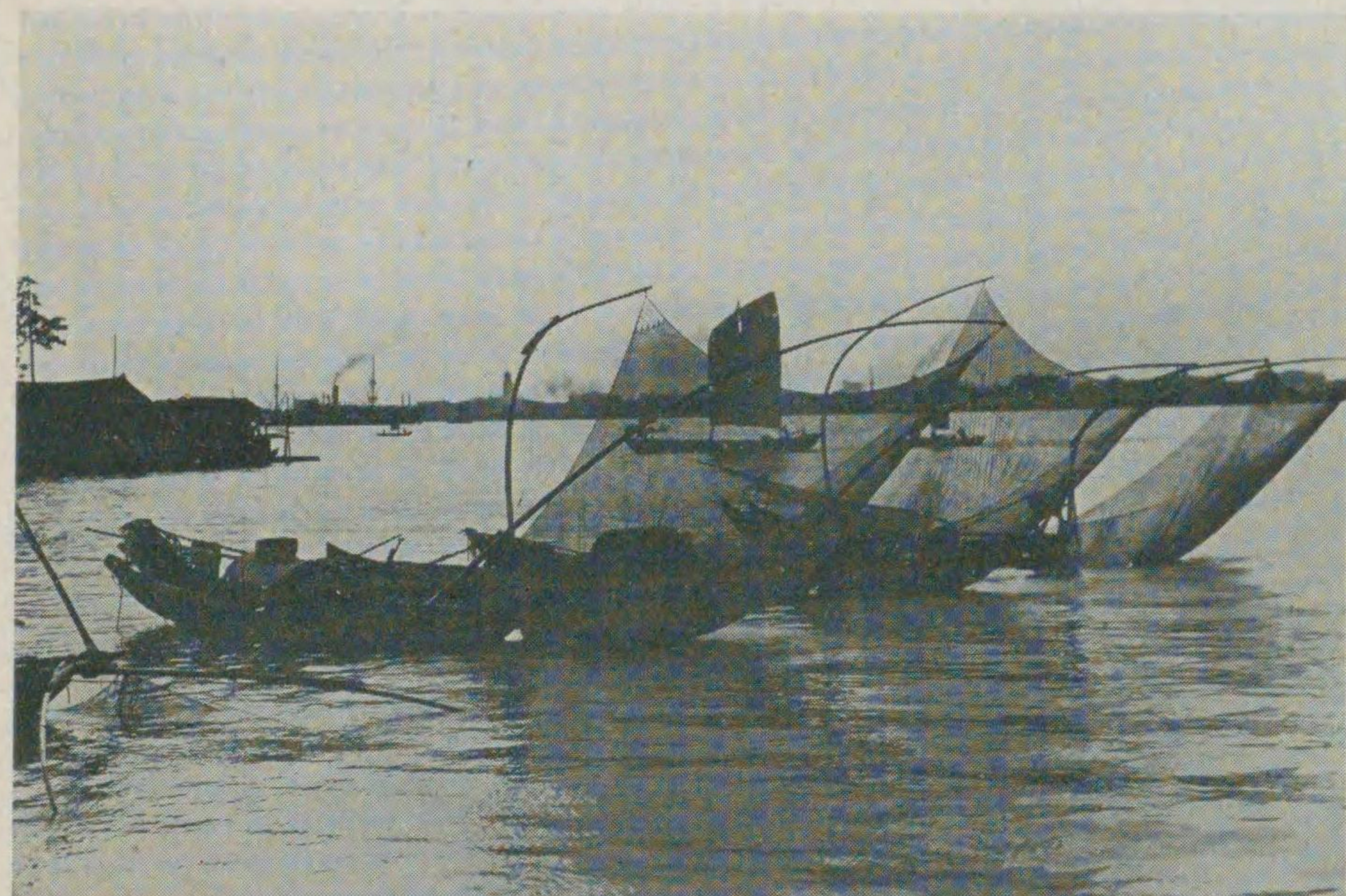
子轎るせ登攀を坂峻の上途嶺牯ンリウク山盧省西江（七）



群の筏大るせ泊に上湖庭洞省南湖（八）



り振揚悠のちた頭船ふ憩に頭舷の克戎那支 (九)



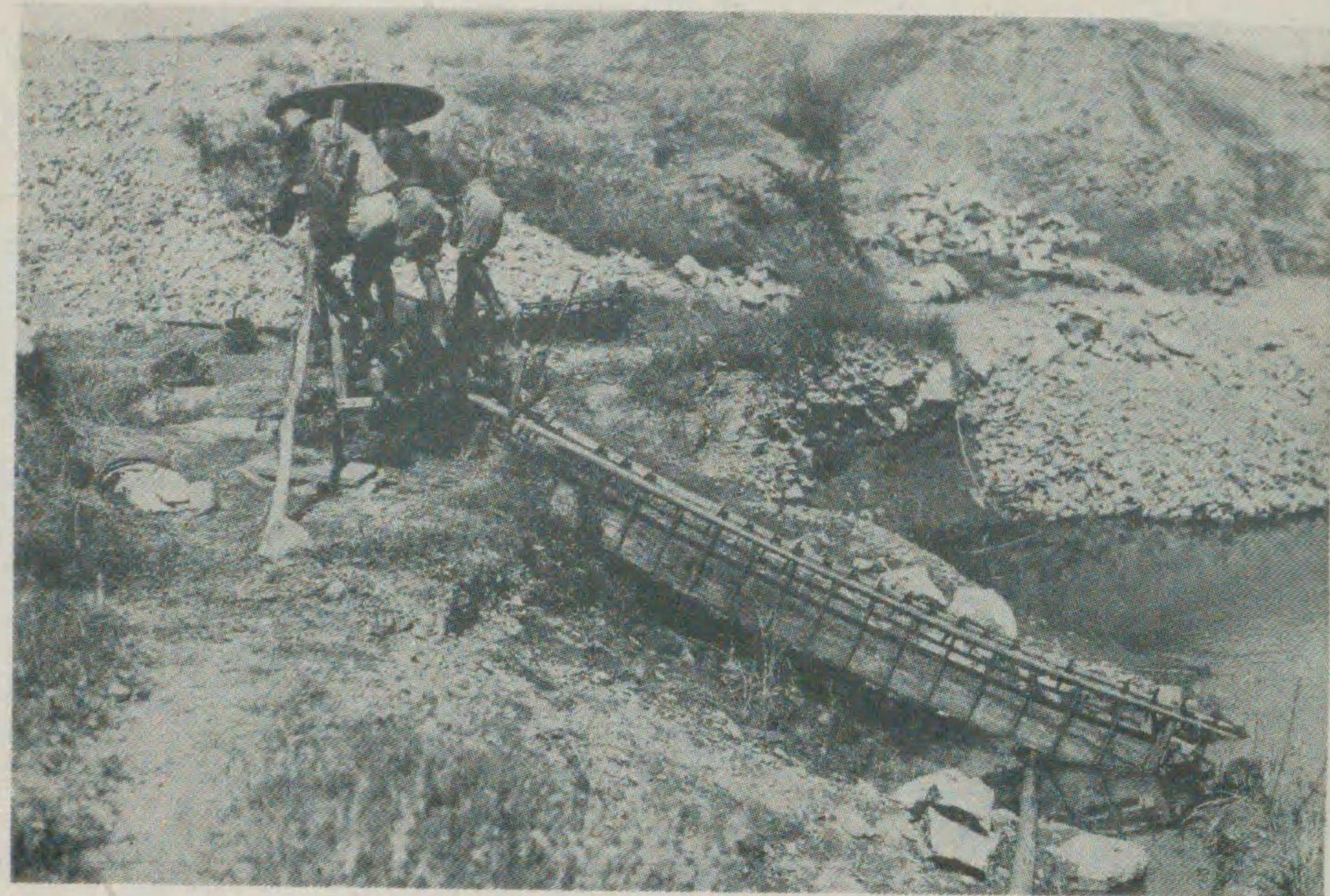
趣情の網手ツ四る見に郷水の江長 (十)



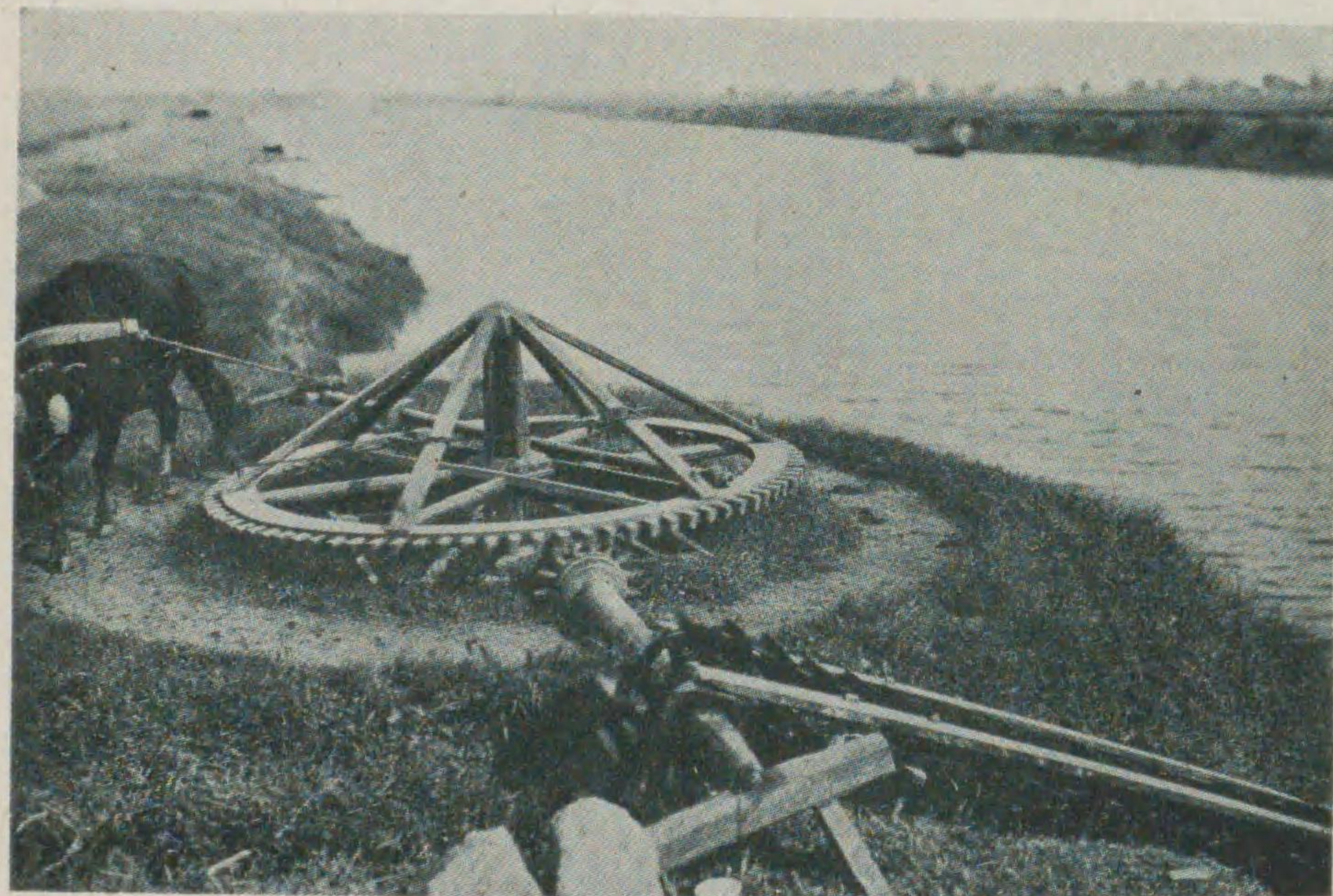
色春のえ植田る見に方地南江 (一十)



趣風の時獲收る見に村農の南江 (二十)



車骨龍の用漑灌る見に村農の江浙 (三十)



造構の車骨龍る見に方地蘇江、江浙 (四十)

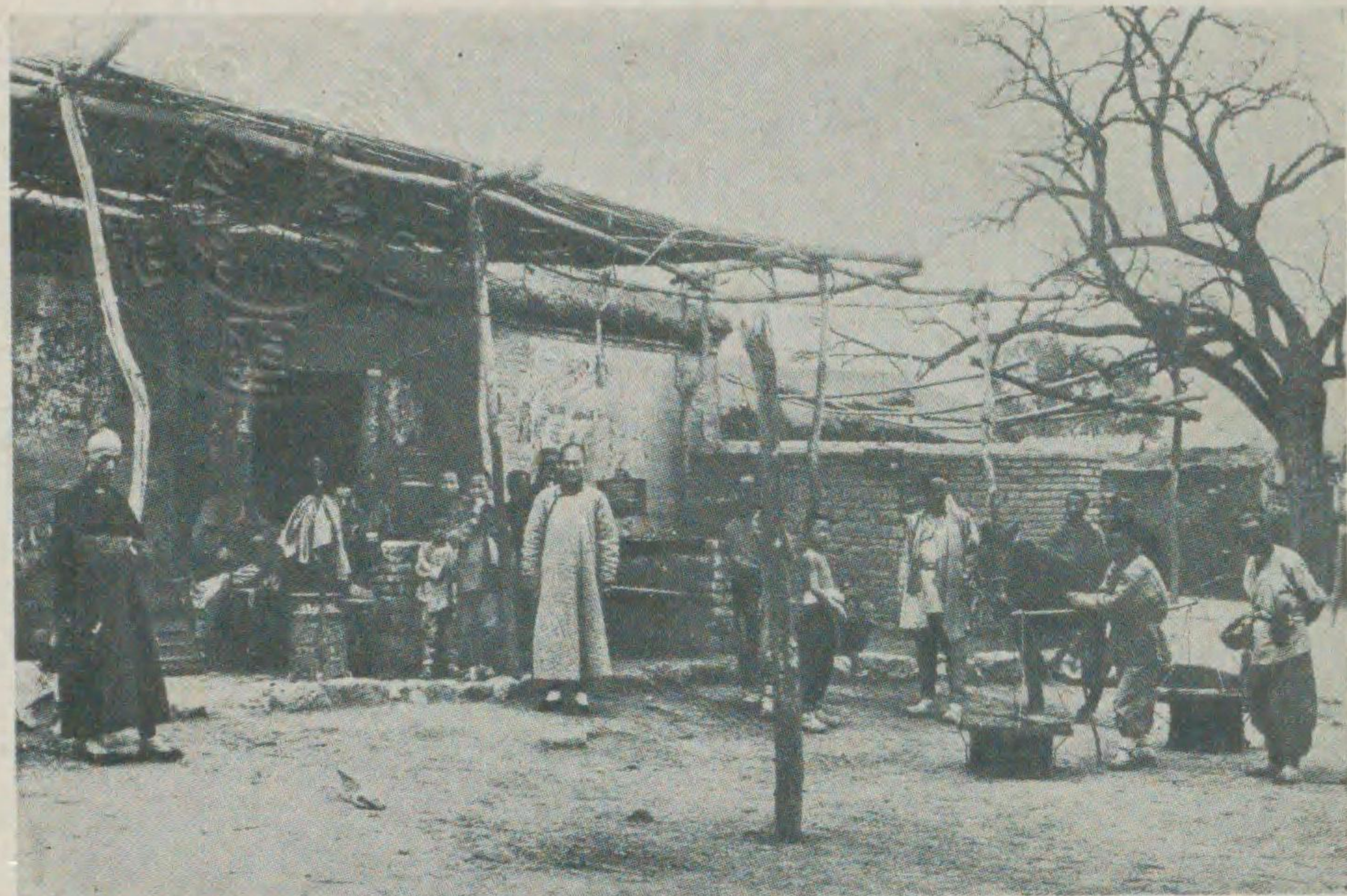


姿優の夫農と磨石るせ用使の家農江浙（五十）



態情作耕の童牧る見に舍田の漢武（六十）

THE UNIVERSITY OF CHICAGO
1914



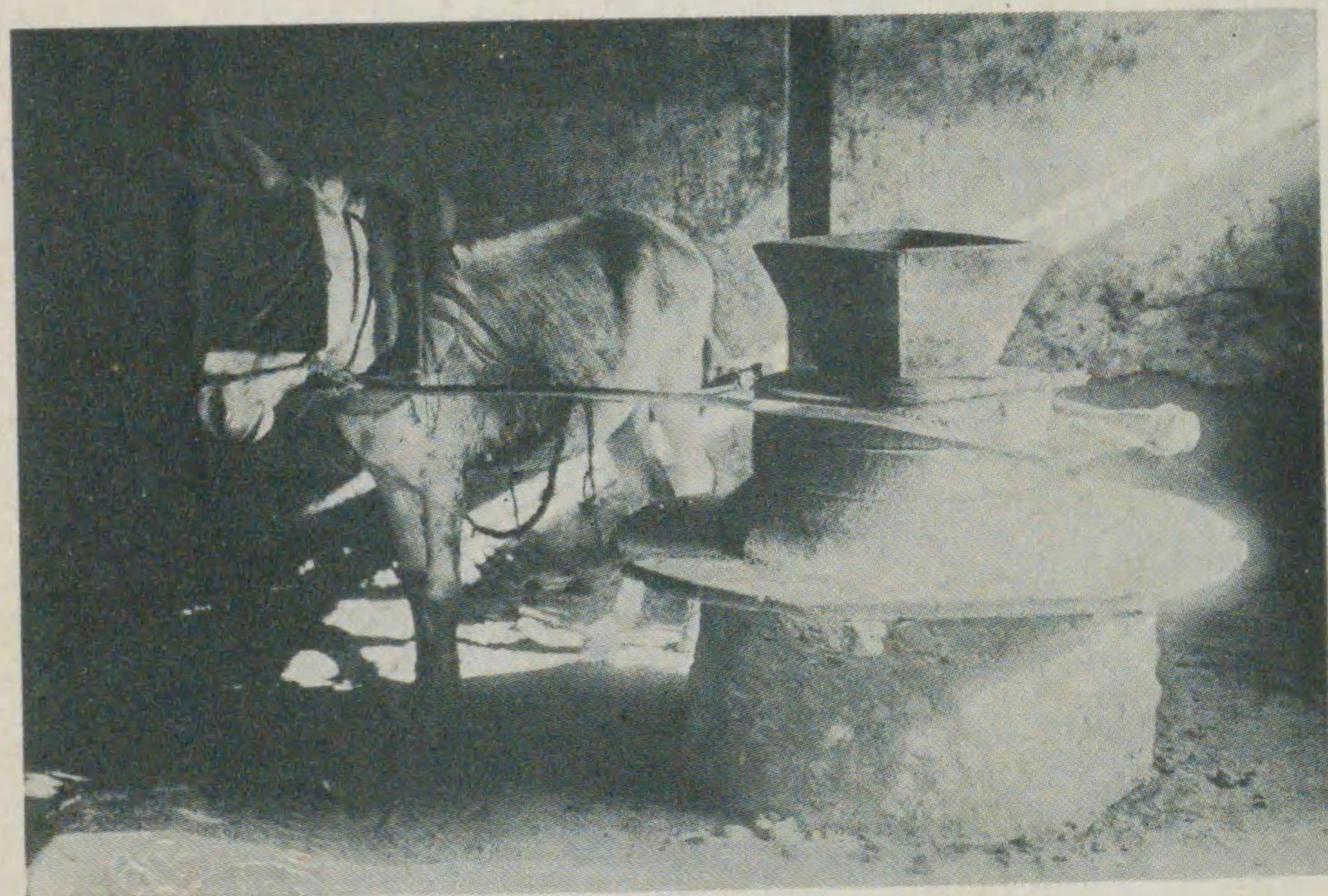
和日春小の秋る見にれ外町の那支北 (七十)



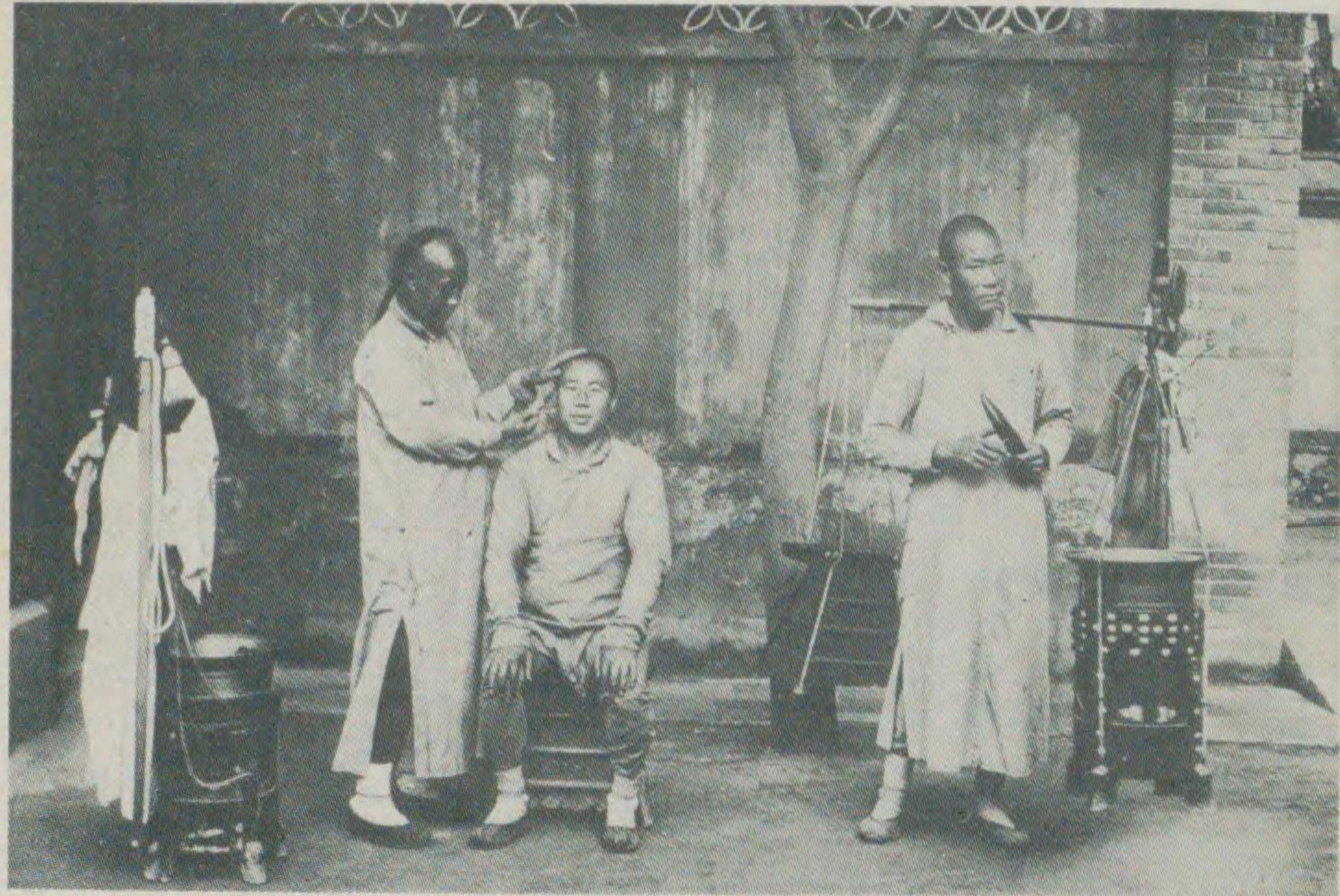
隊兵の軍民國るせ省歸に村農の那支北 (八十)



態情粉磨の馬驢る見に家農の支南 (九十)



り振業従の馬驢たれさしくか目 (十二)



(屋床) 的頭剃イテウトイテる見に前門の家良内城平北 (一十二)



活生常日のんさみかる見に舎田的那支 (二十二)

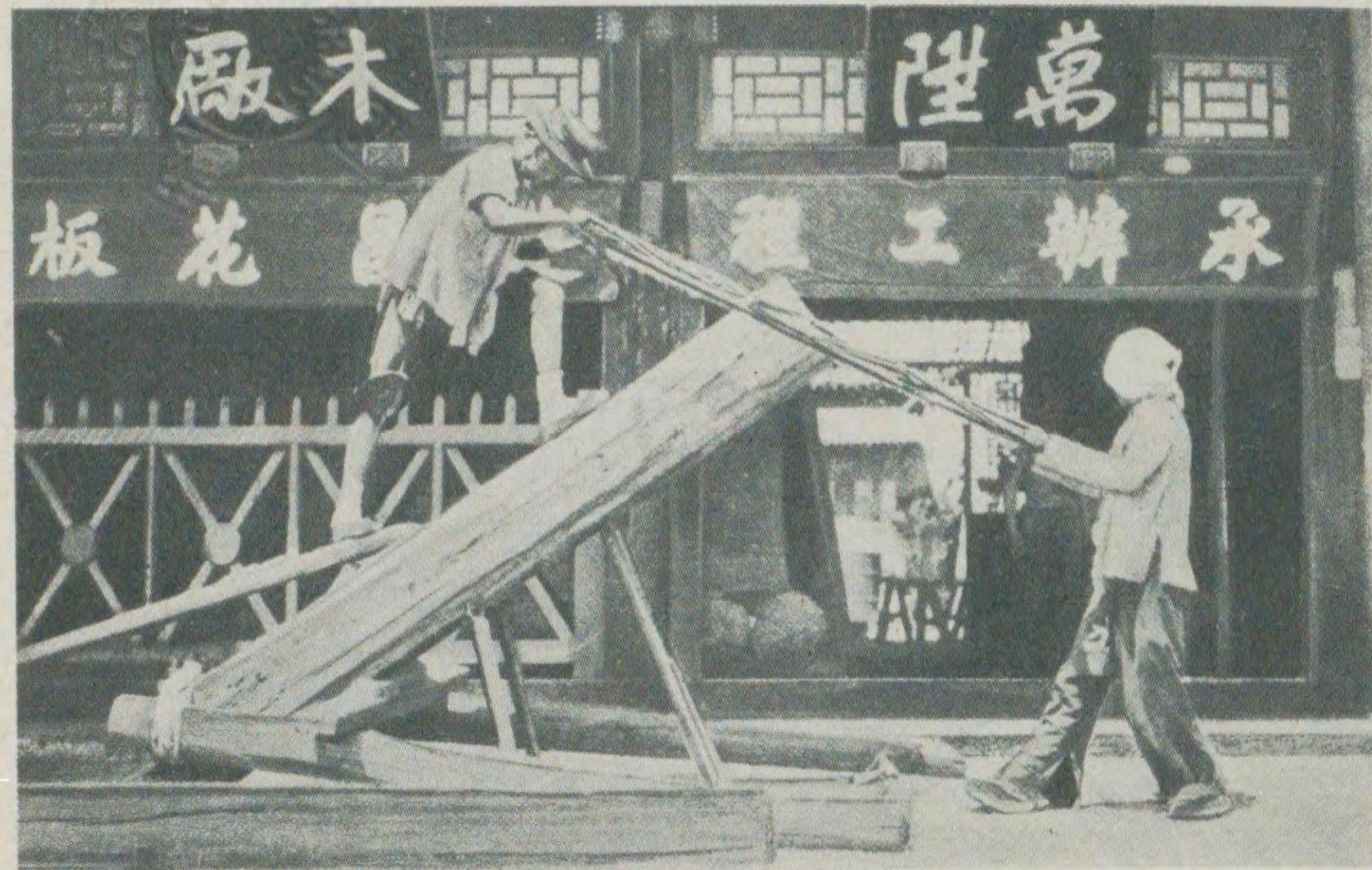




顔笑な福幸の衆大る見に舎田の南江 (三十二)



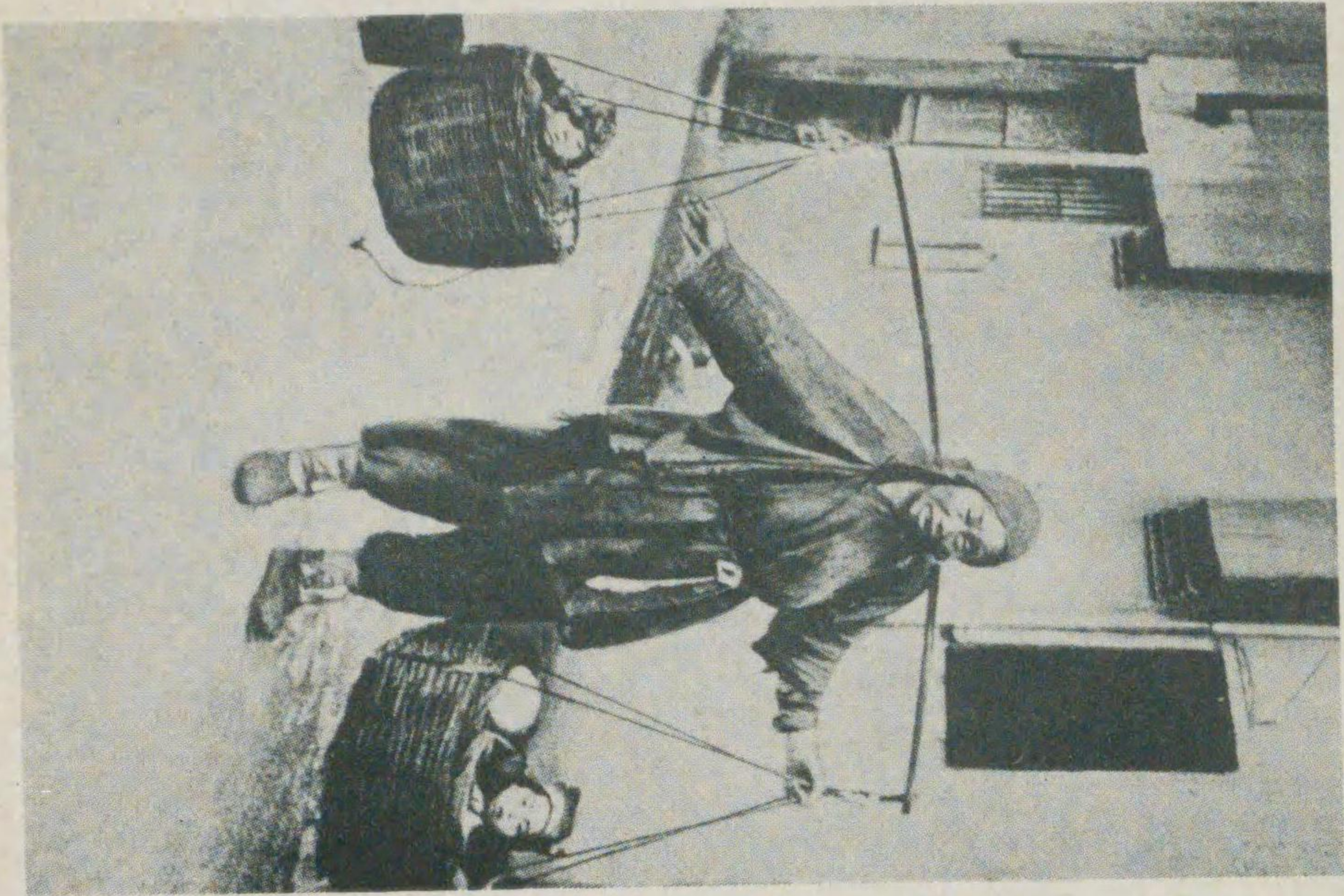
圖廠鳥の居住落部民細那支北 (四十二)



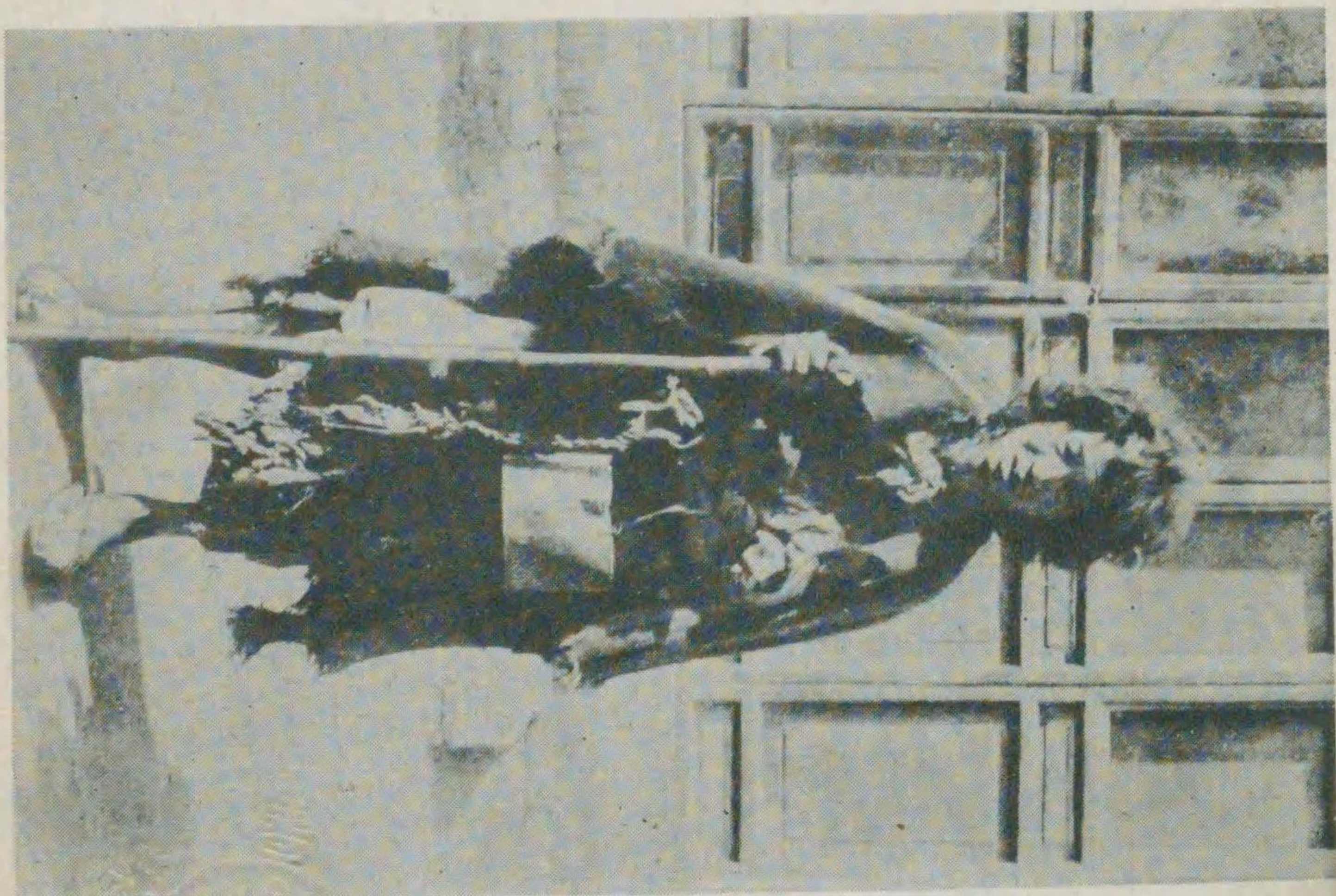
業作同共の挽木る見に頭店の商木材平北那支北 (五十二)



隊駝駱る見にりたあの根城皇内城平北 (六十二)

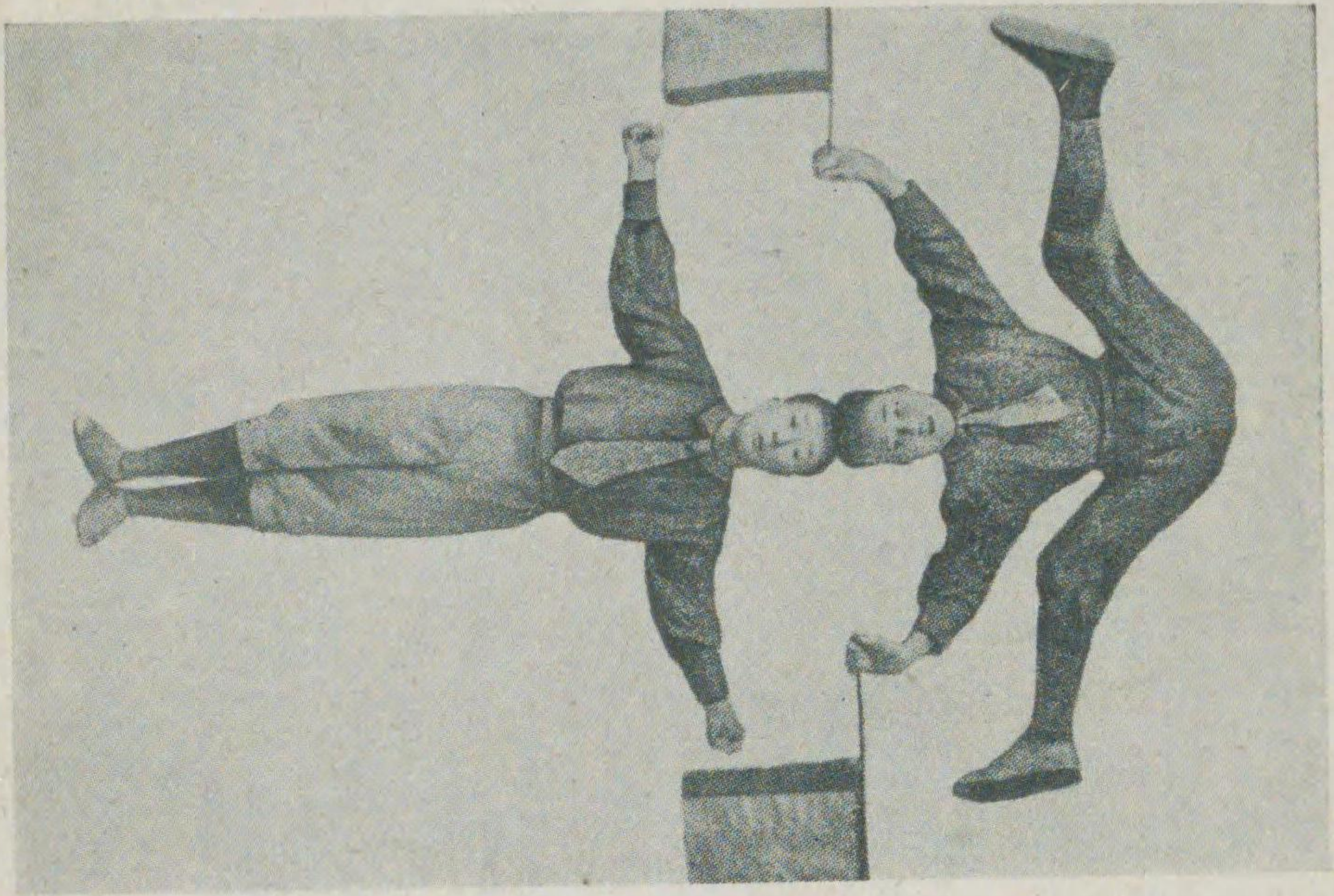


(二十八) 上海城内、人さらひに捕はれた兒女を賣り歩く老婆

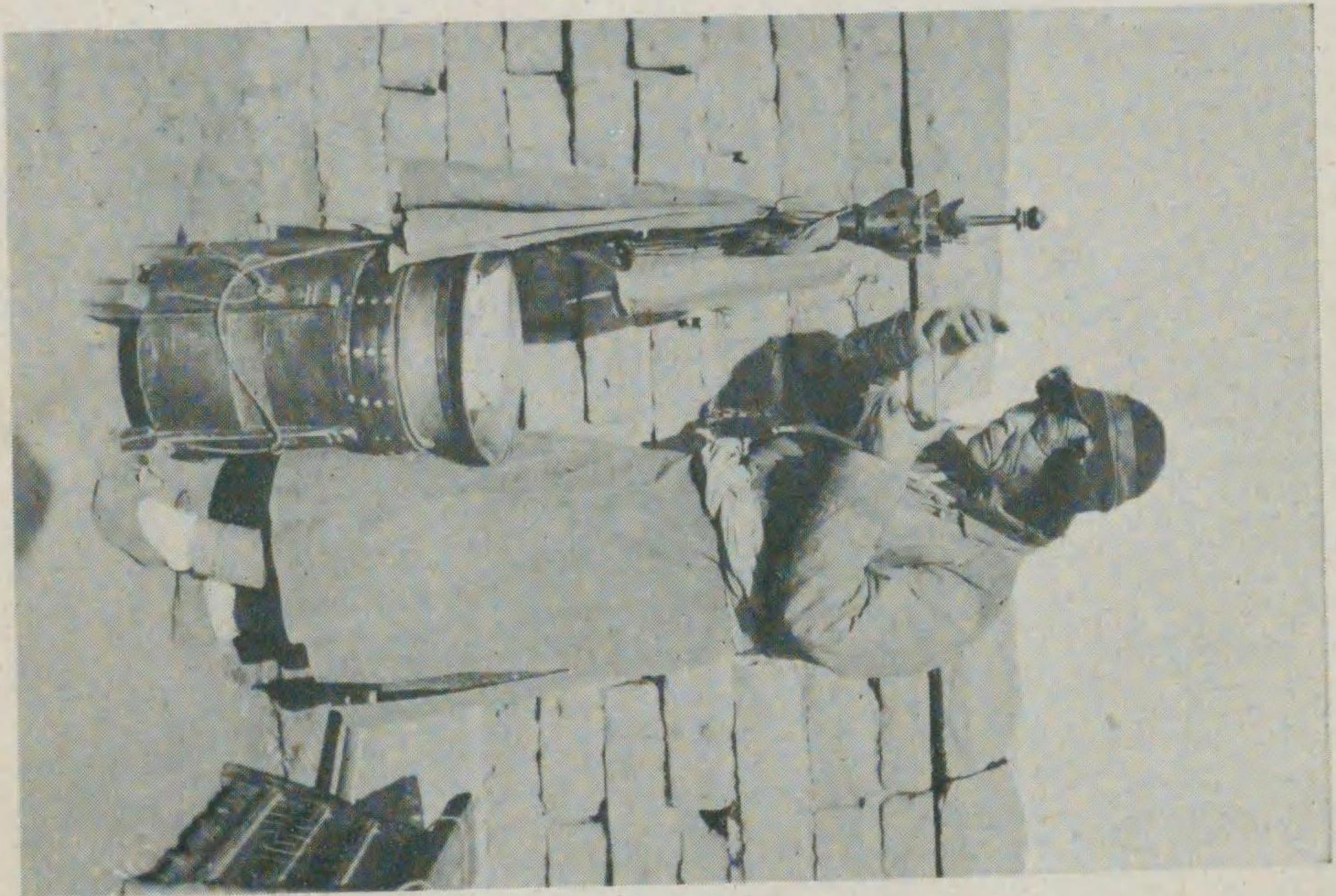


(二十七) 北平市に見るホワツ花子(乞食)の哀訴振り



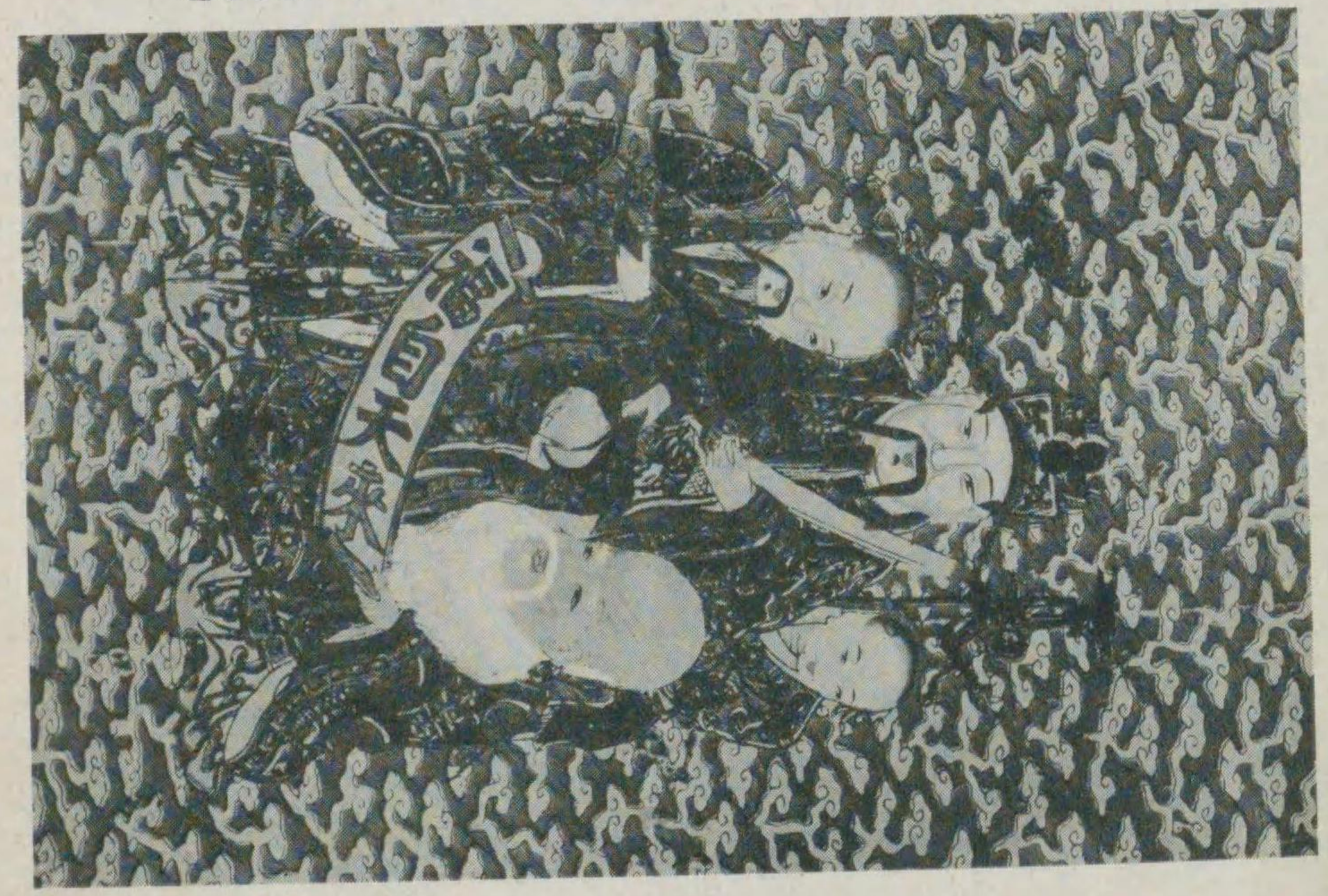


(三十) 支那現代輕業の極致、頭上頭を支ふる離れ術

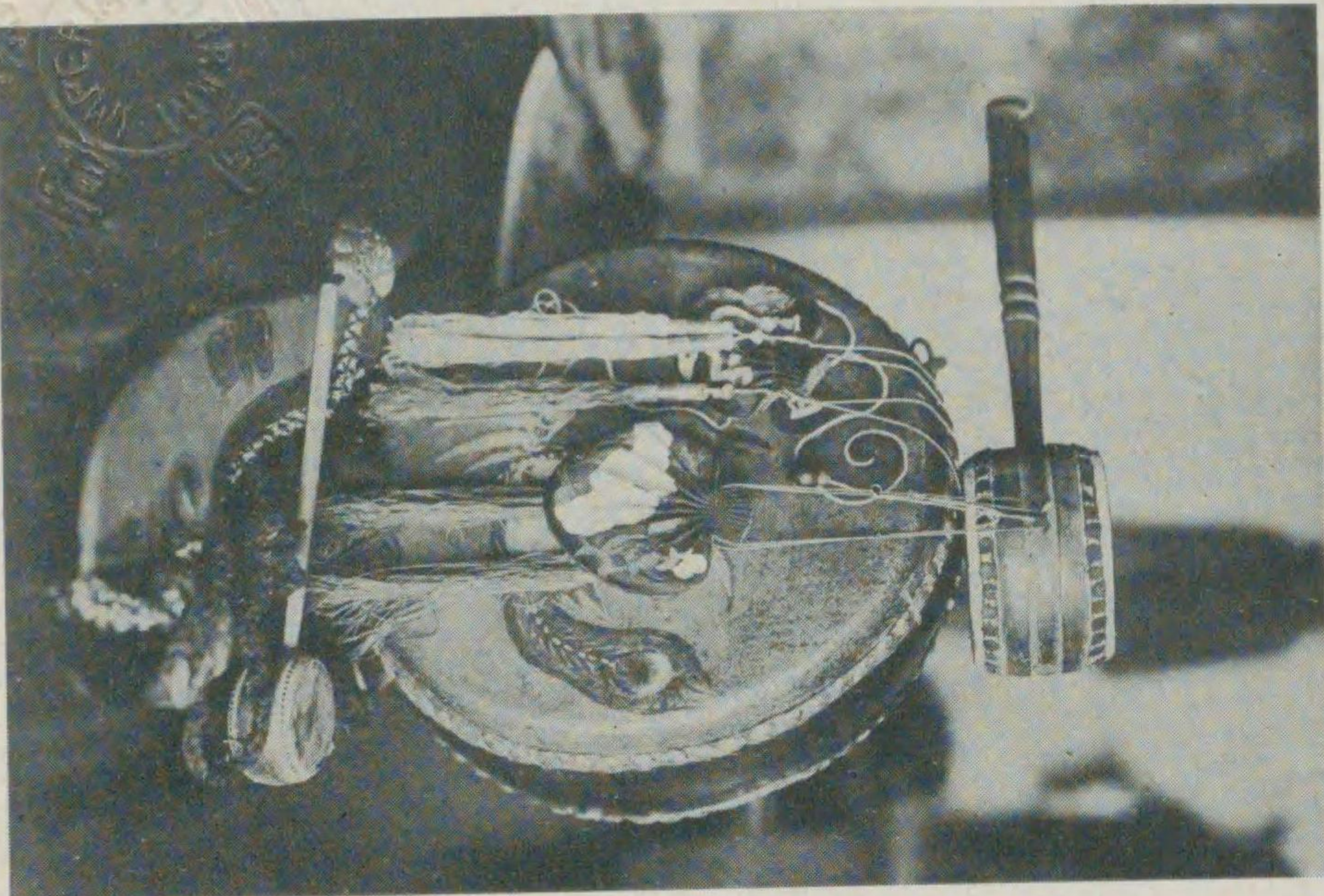


(二十九) 北支那の城内に見る露店茶屋



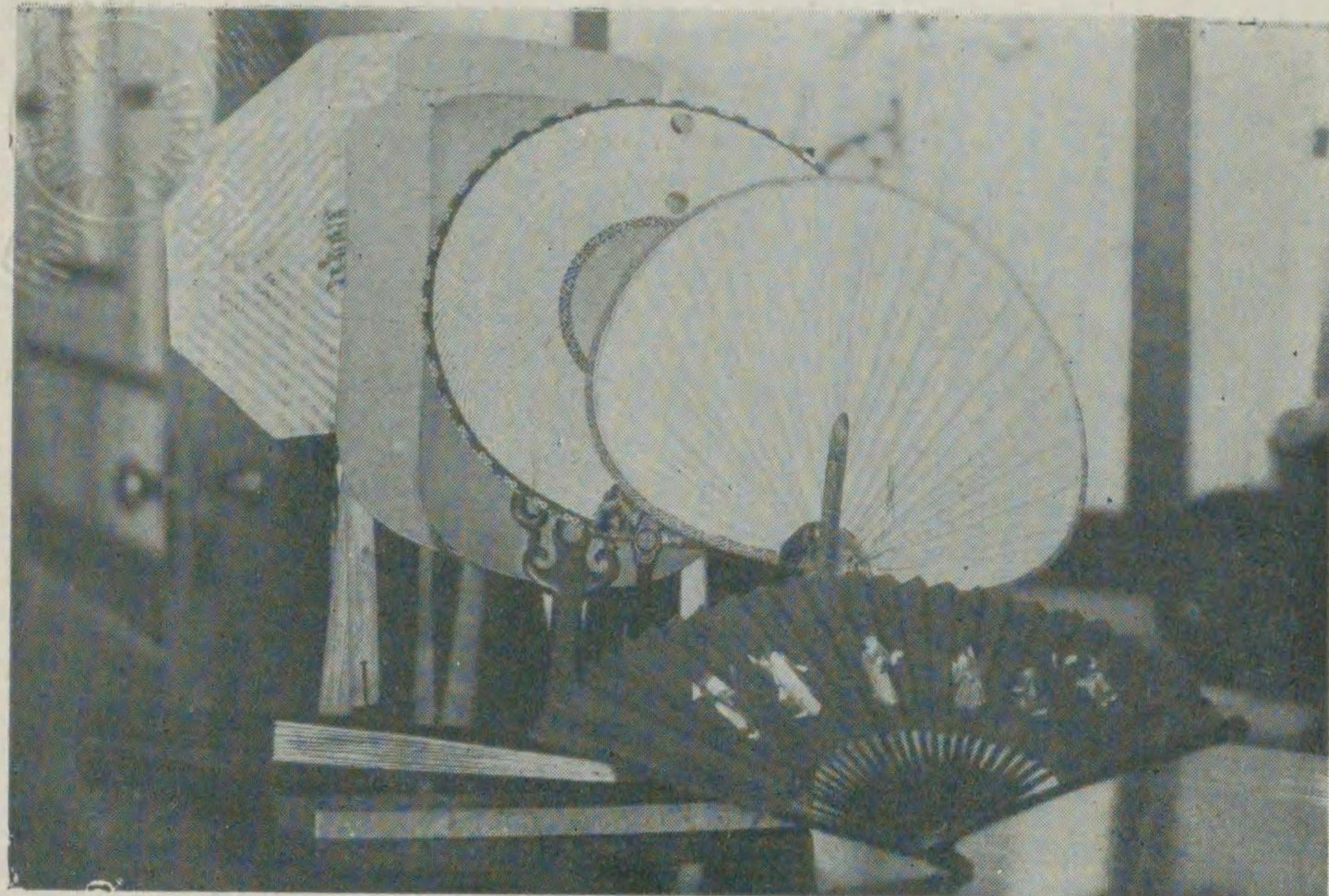


(三十一) 北支那の住宅門扉に掲げらるゝ正月の門神

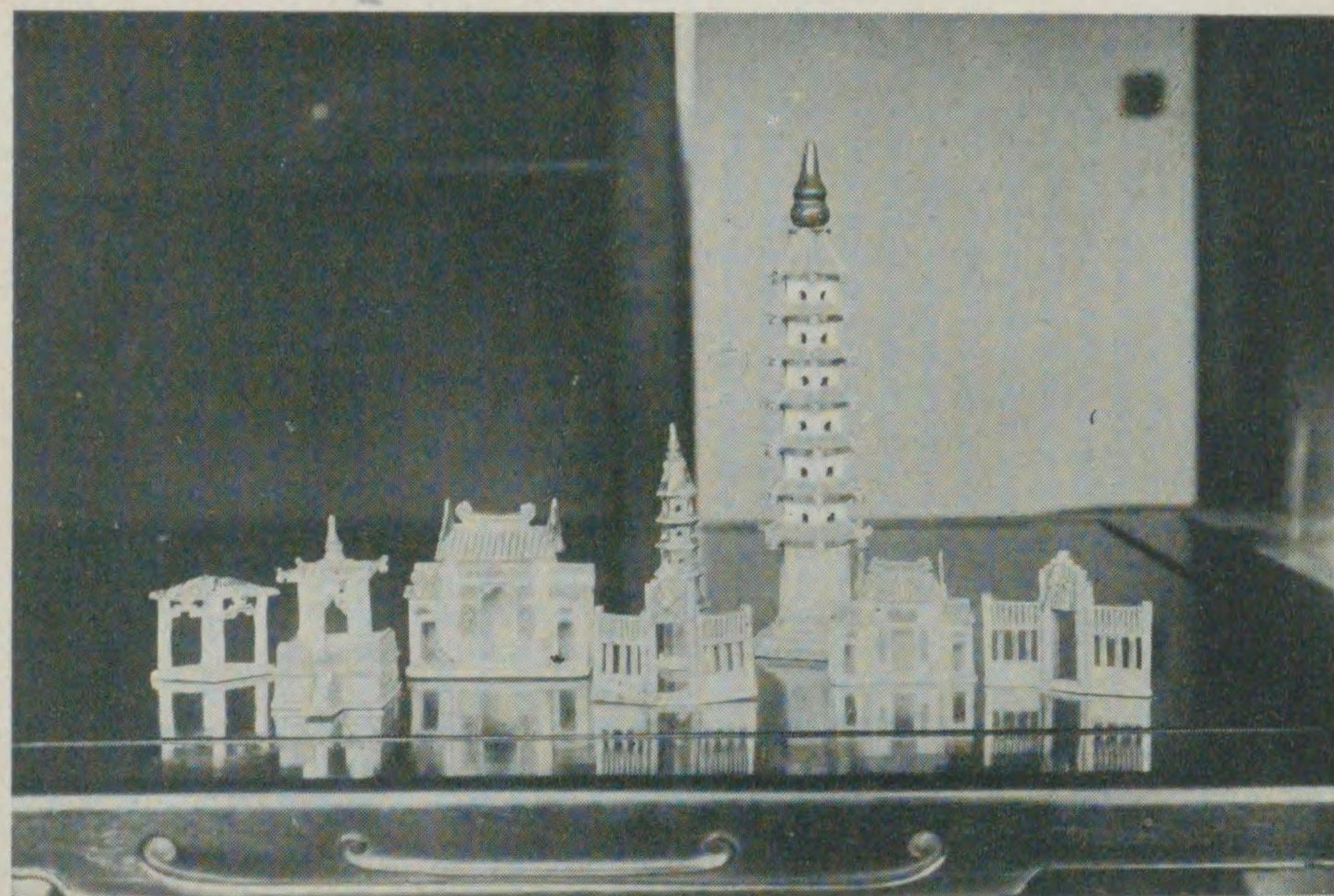


(三十二) 南支の兒童の好む玩具各種、太鼓、青龍刀、巾着など

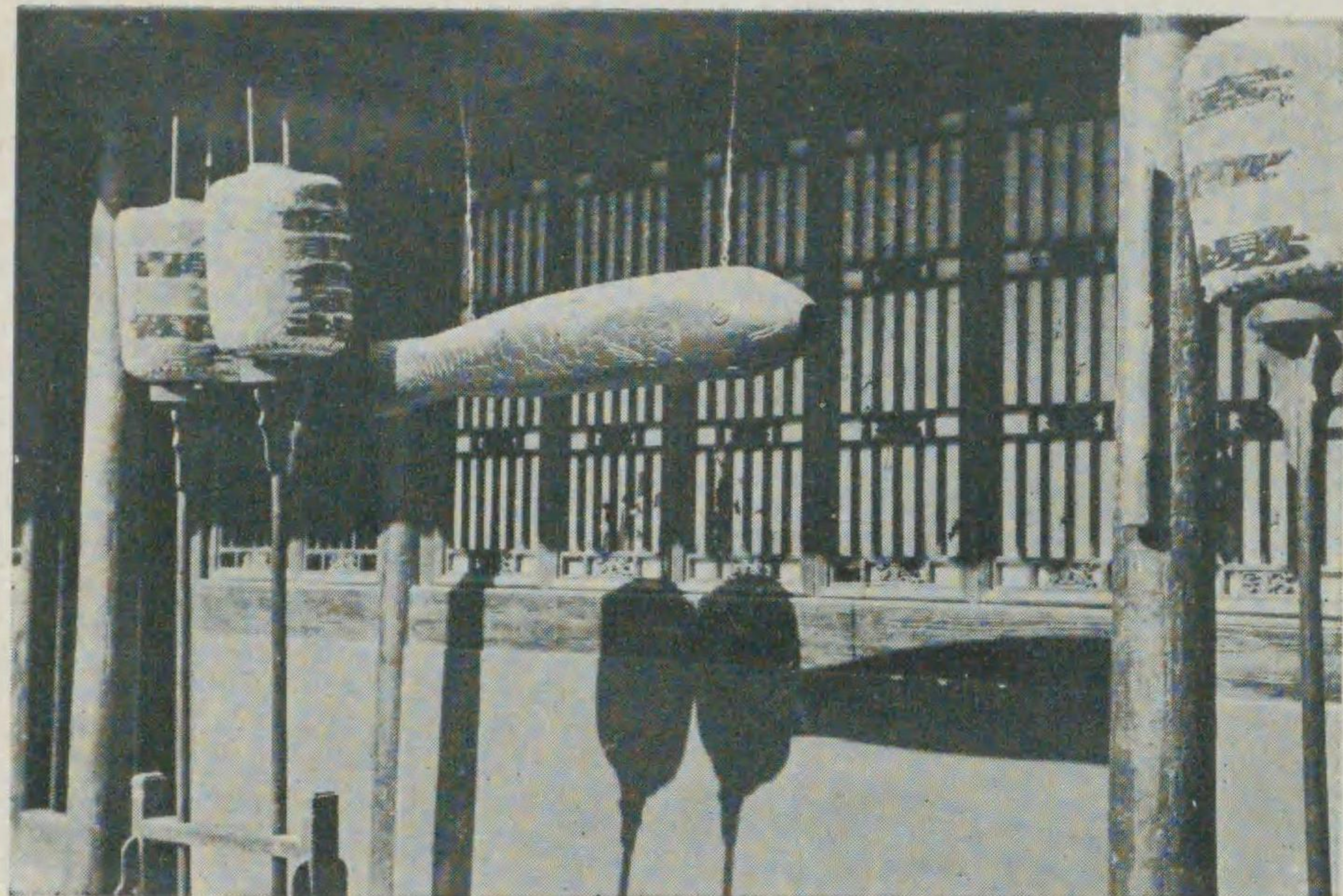
THE UNIVERSITY OF CHICAGO
ASIAN LIBRARY
1500 EAST ASIAN BLDG.
CHICAGO, ILL. 60607



他の扇團 面扇ゝるらせ愛に庭家の那支北南 (三十三)



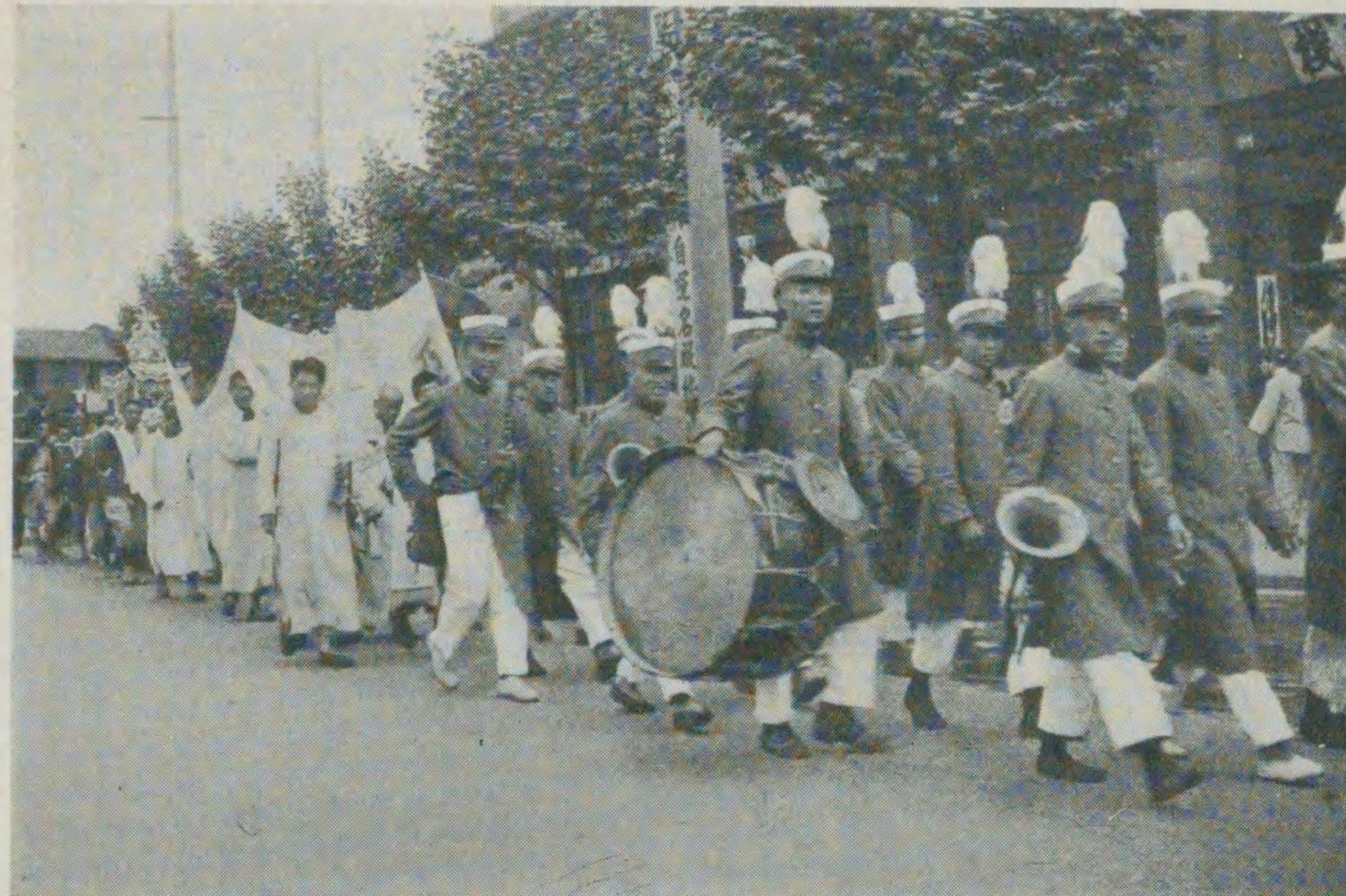
種各具玩の藍伽塔堂ゝるらせ玩愛に庭家支南 (四十三)



魚木る見に内境の寺禪支南 (五十三)



蘆葫々蛭籠虫の秋ゝるらせ用愛に庭家流上那支北 (六十三)



見所海上 隊樂音の式新最國民華中 (七十三)



種各仗儀る見に宮后天祖媽灣臺 (八十三)



一のそ .番茶道大の船早跑る見に内城平北 (九十三)



二のそ上同 (十 四)



景光の樂奏人伶の代時舊る見に那支北 (一十四)



り振扱取の器樂式新る見に方地各支南 (二十四)

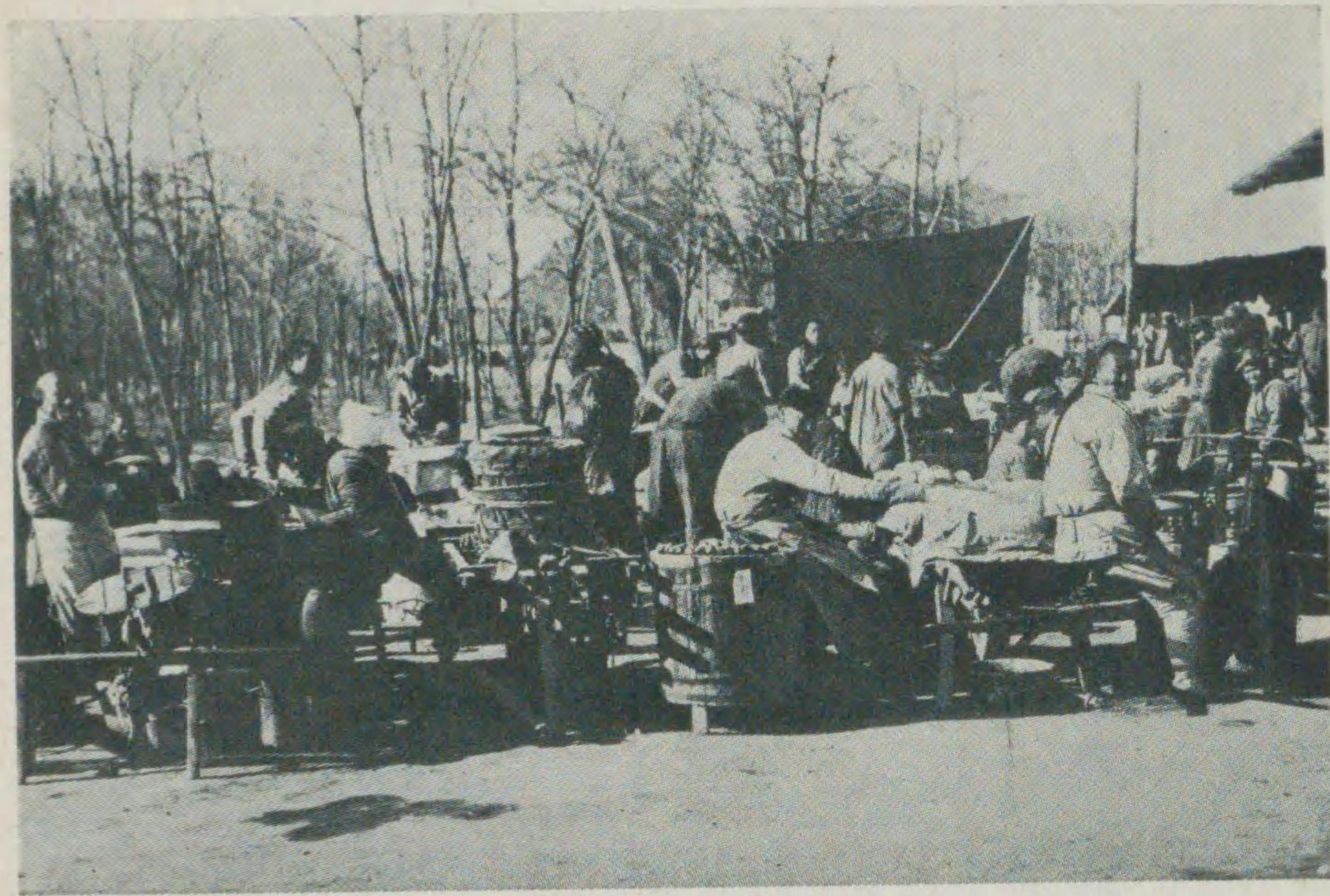


り振況盛の店肉鶏る見に中市平北 (三十四)



デのでしと民住移那支ゝるば運へ洲満りよ省東山 (四十四)

一ヤジンセバ・キツ



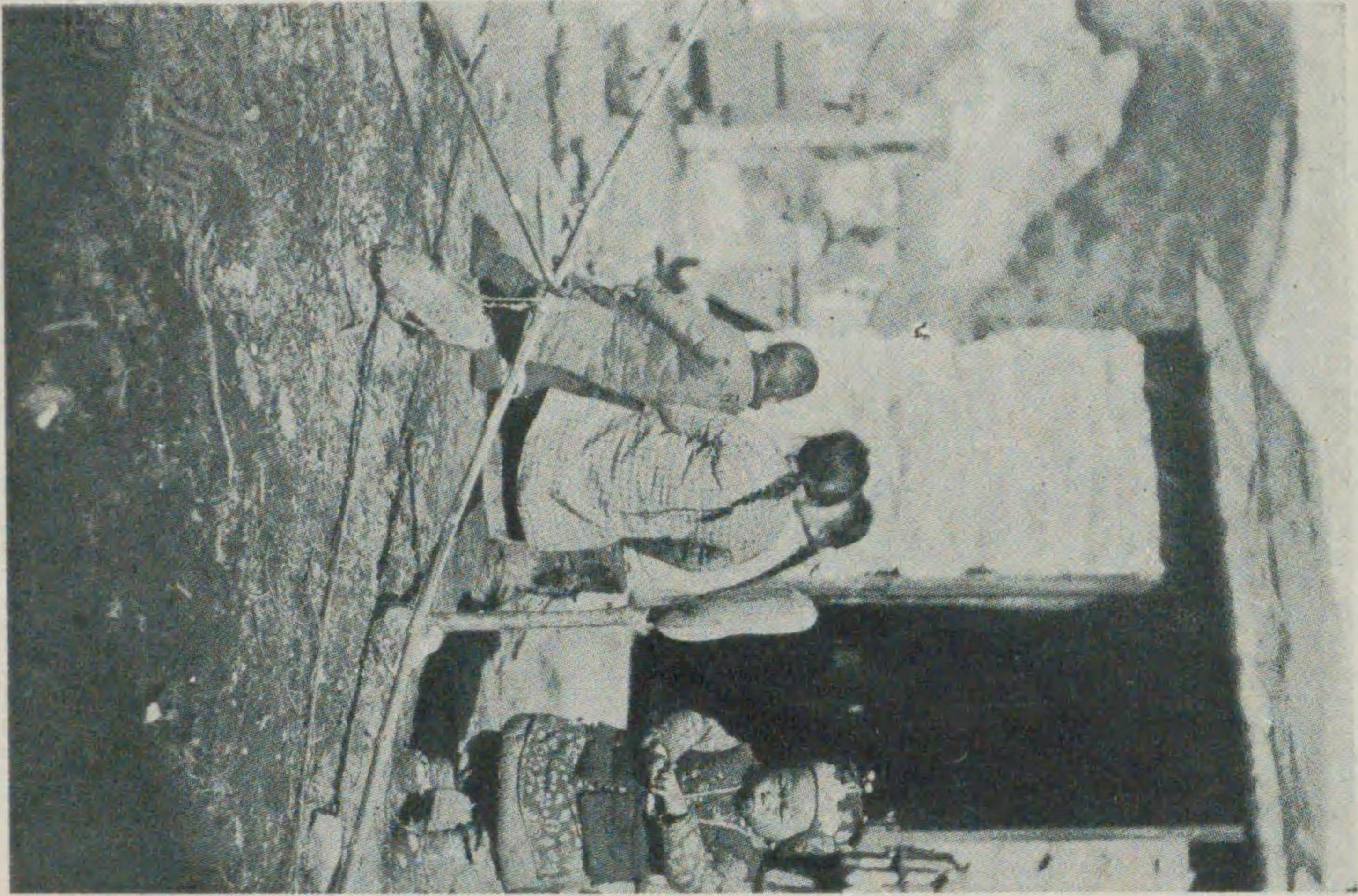
部一の路橋天郷樂歡衆大の的陸大る見に内城平北 (五十四)



ぶ列を薯白烤り振店露の民細る見に舍田の那支北 (六十四)

THE UNIVERSITY OF CHICAGO
ASIAN LIBRARY
1101 EAST 58TH STREET
CHICAGO, ILL. 60637

(四十八) 江南農家の門前にとどくる兒女



(四十七) 北支那の田舎農村に愛せらるゝ好々爺

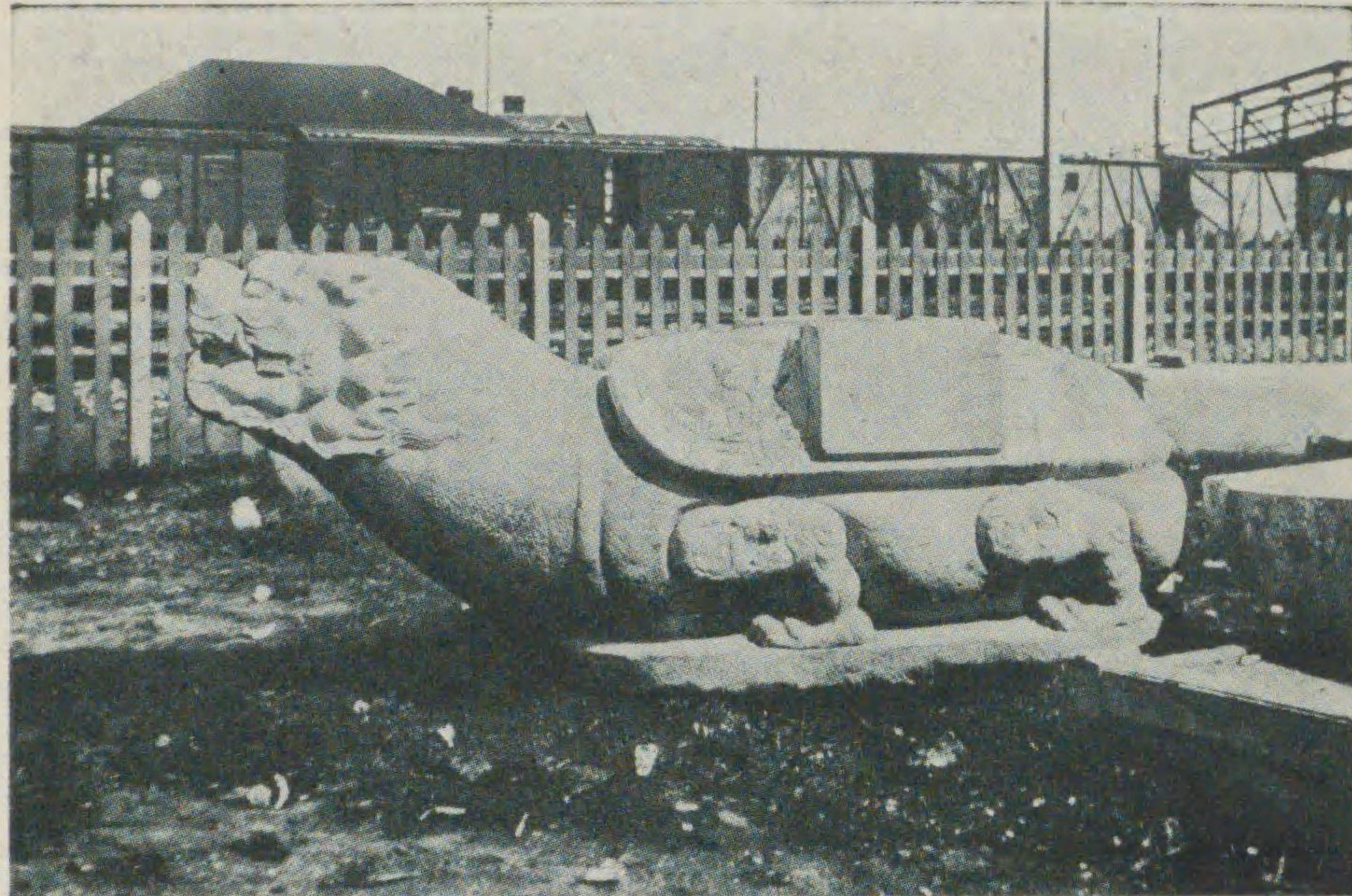




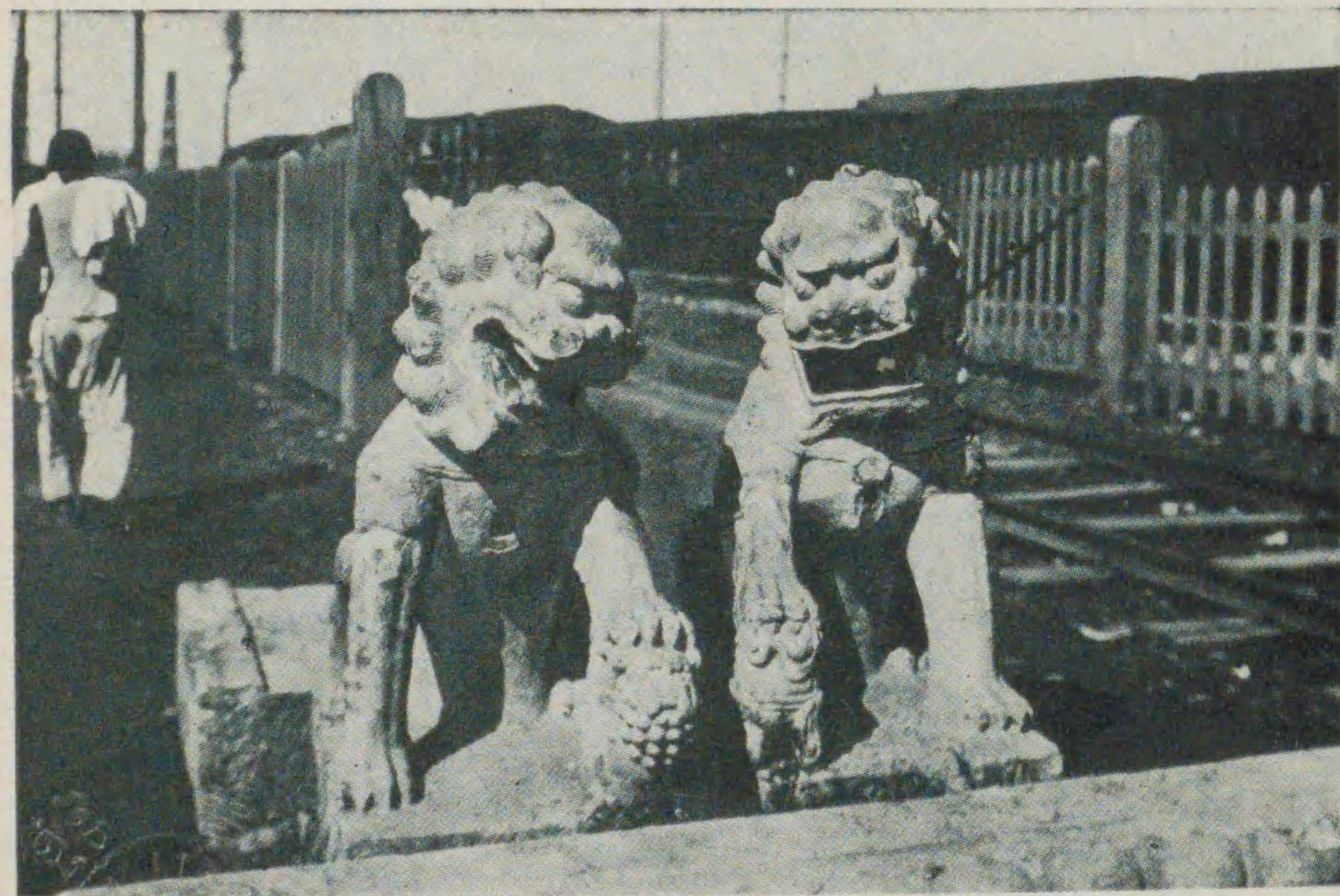
姿雄の豪土る見に舍田の那支北 (九十四)



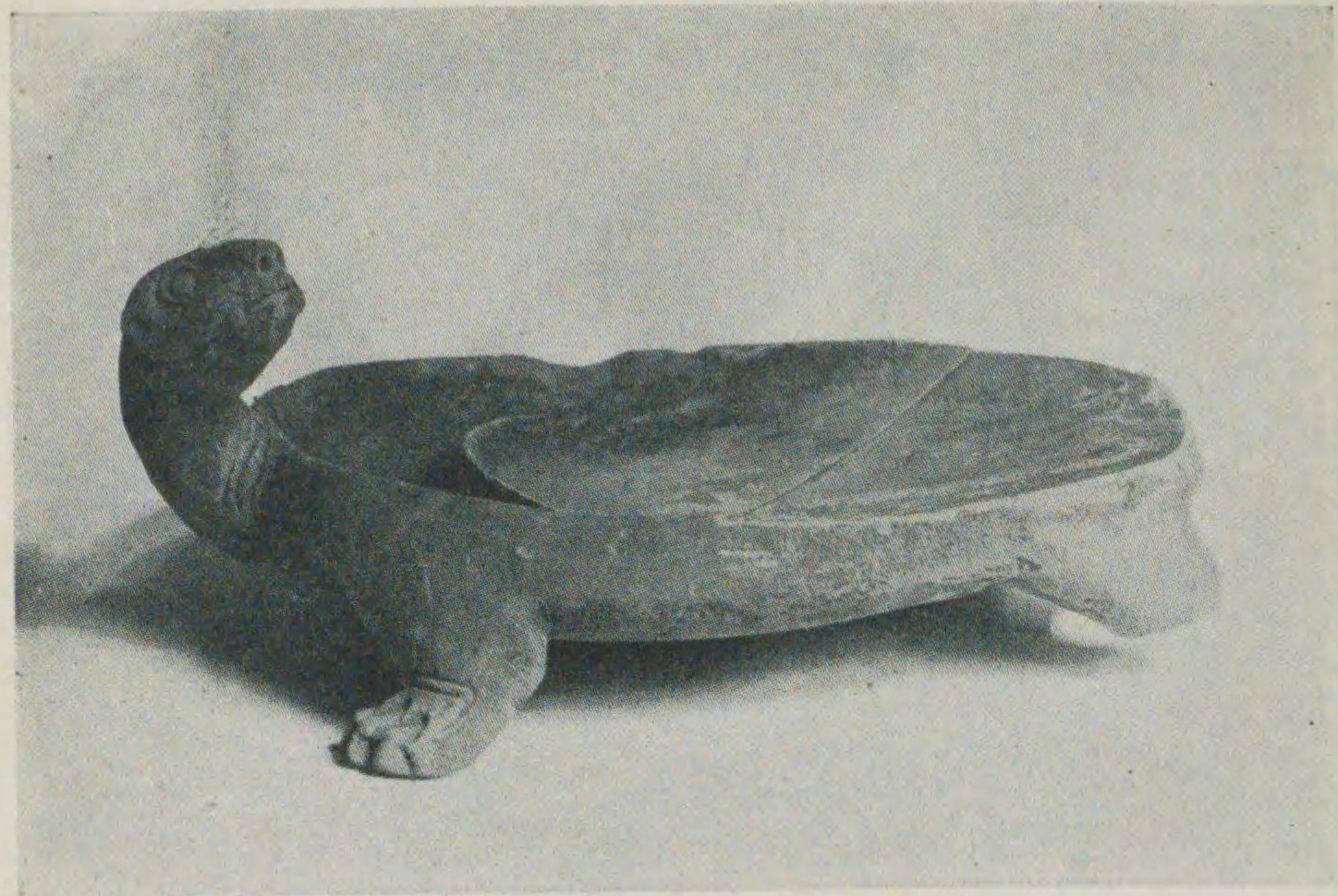
夫擔の柩靈る見に儀葬の庭家流上那支北 (十五)



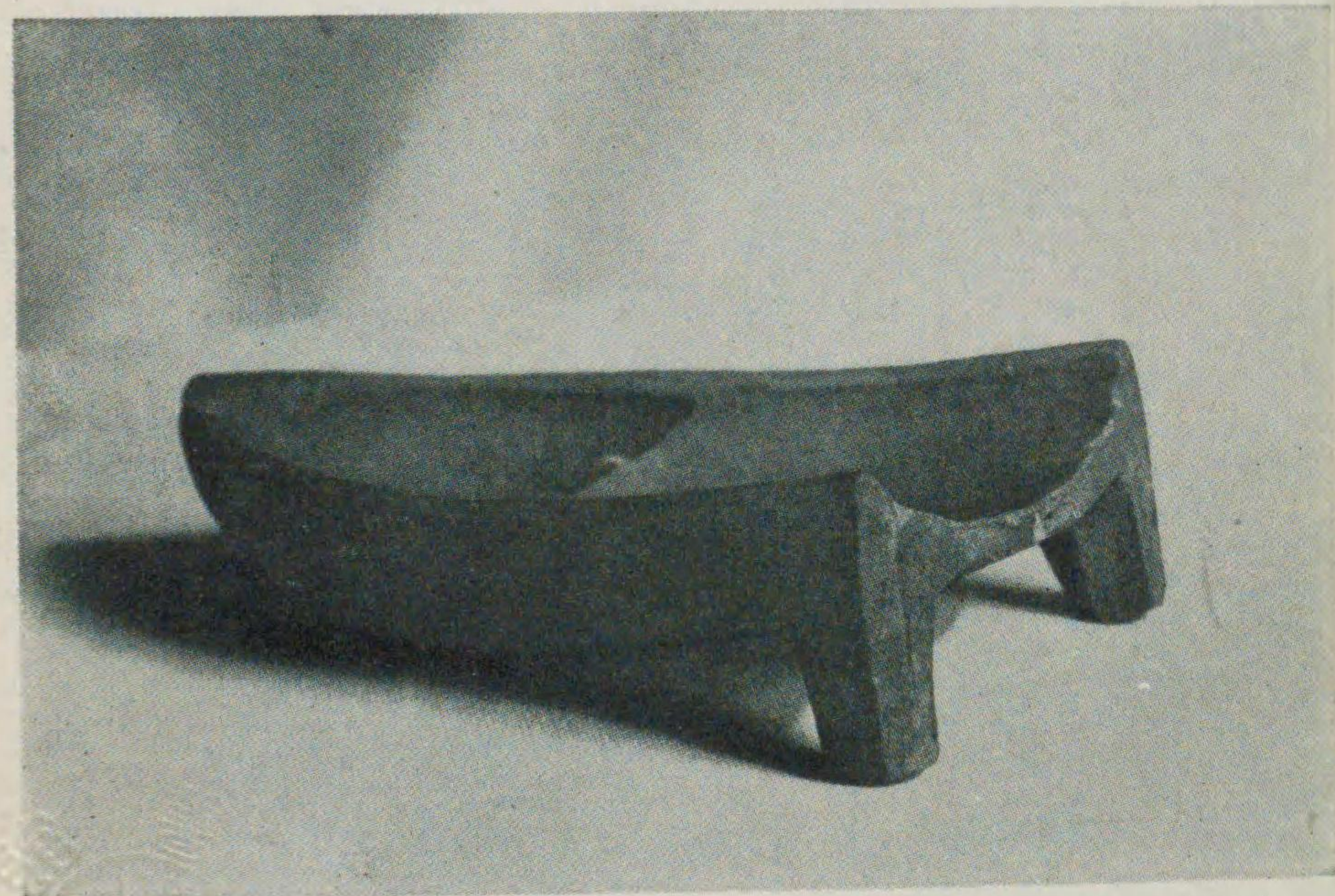
北支那の那田か白河塘に運ばれた代埋の石龍 (一十五)



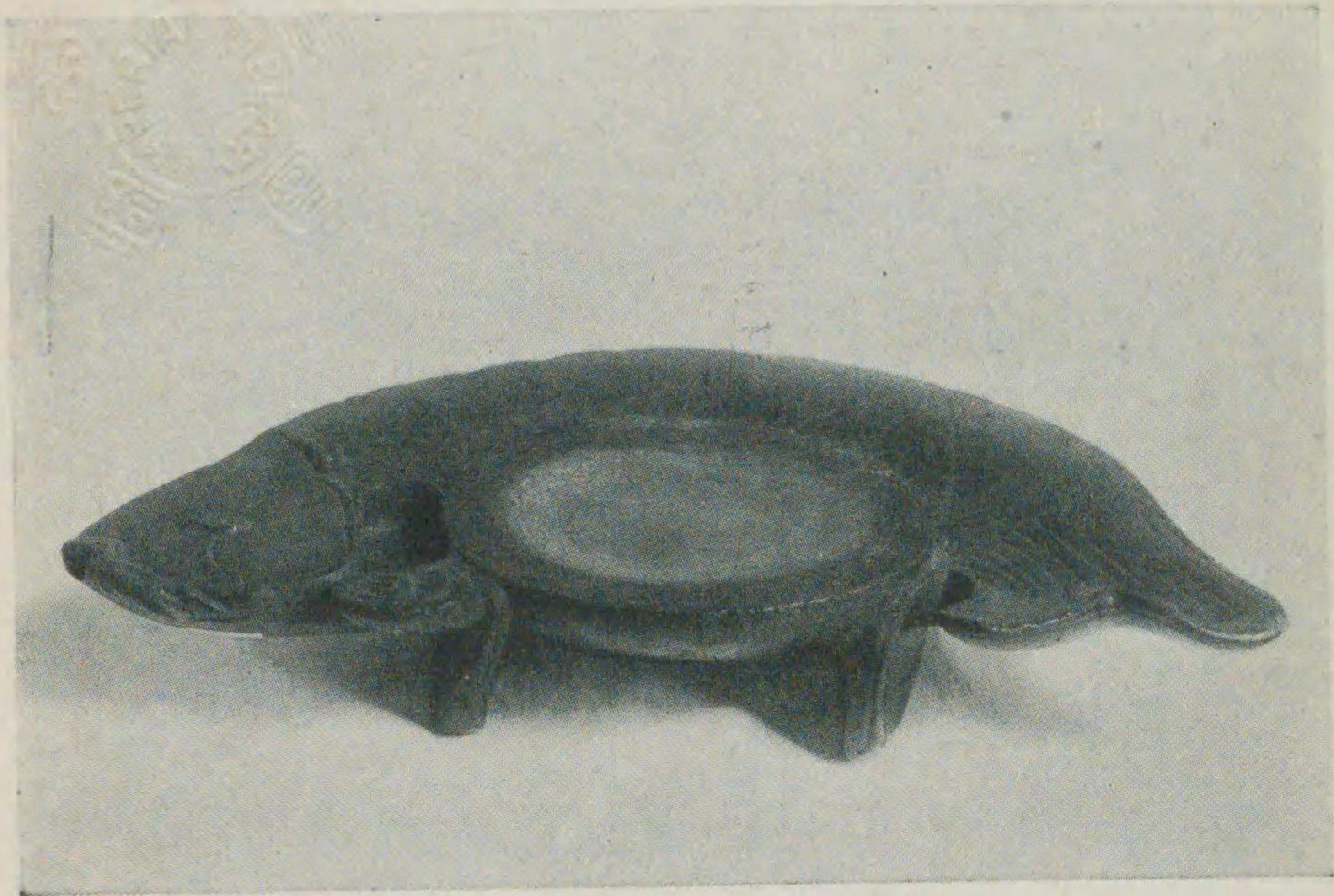
乾隆の傑作物語をあるウ・獅子の子 塘沽所見 (二十五)



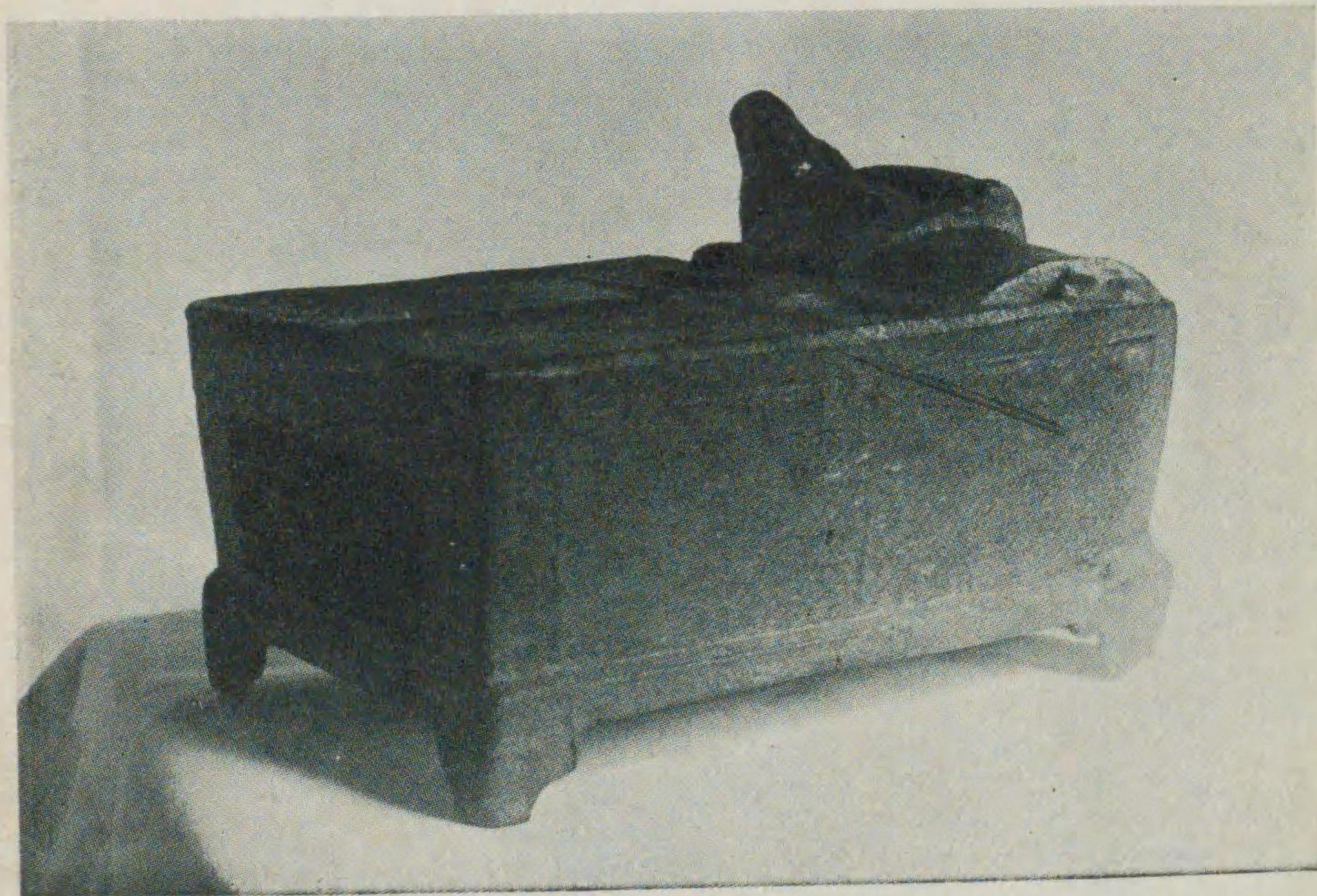
硯瓦の式踏籠 .品土出の代時朝六 (三十五)



硯瓦の式斧古 .品土出の代時朝六 (四十五)

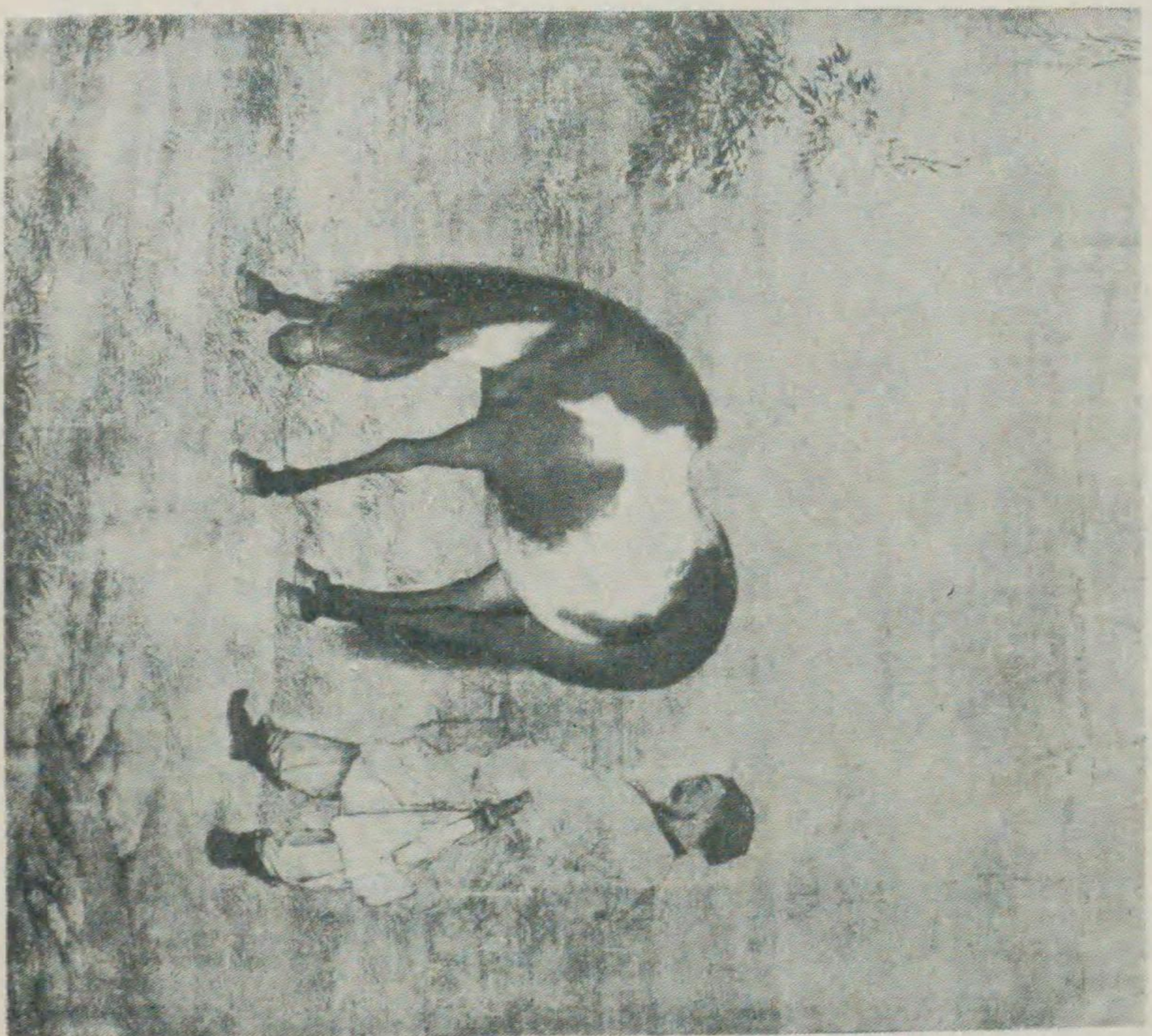


硯寶式魚鯉。尾龍州歙宋 (五十五)

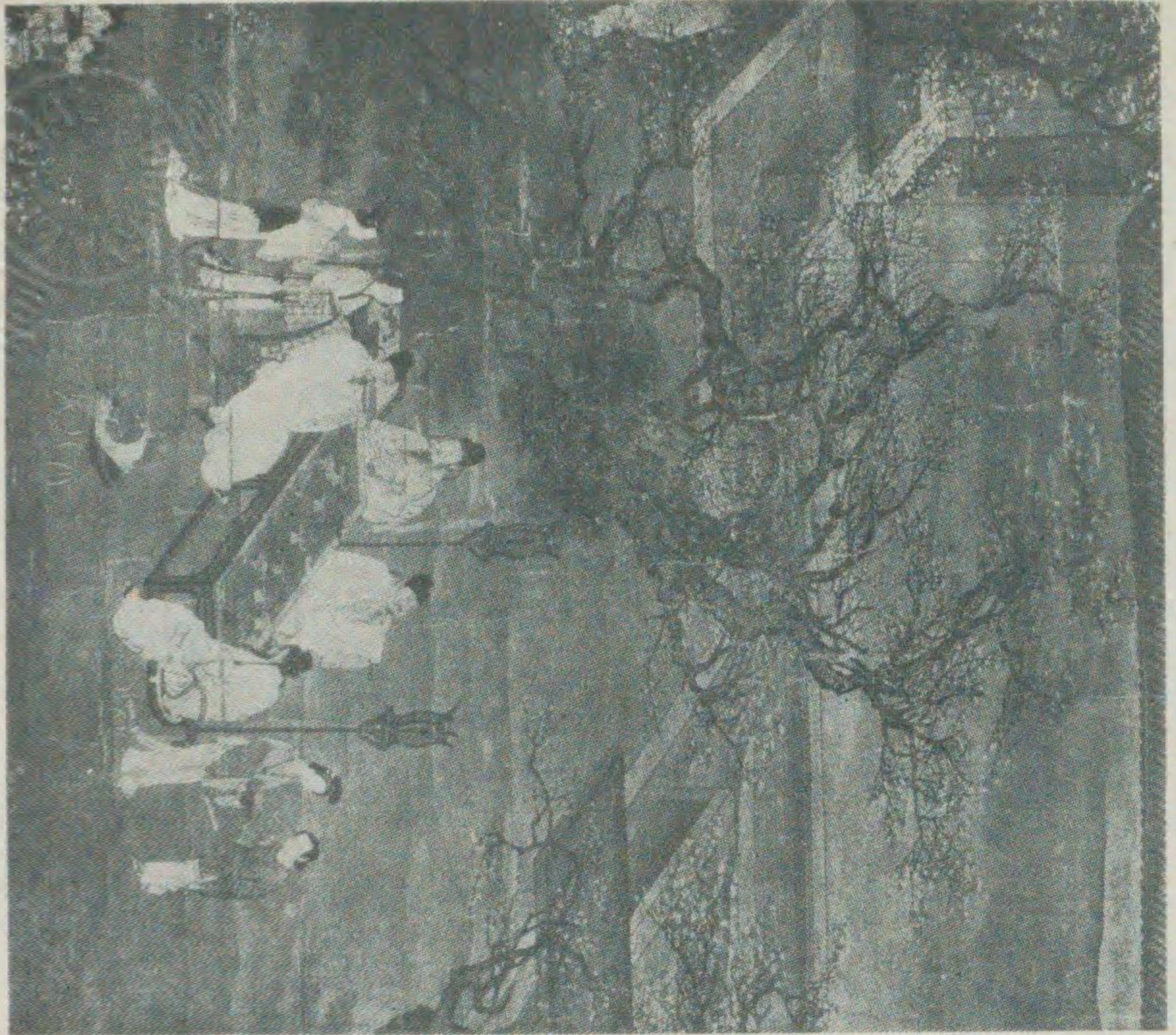


硯鐵履雙土出式子太朝唐 (六十五)





(五十七) 明代、仇英筆、桃李園の二部



(五十八) 清代、伊太利ラソシニ郎世寧筆、郊原牧馬軸卷の二部



(五十九) 宋代、牧溪筆、雜圖の一部



(六十) 元代、趙孟頫筆、茶圖

支那風俗趣味篇の序文

化石した支那でなく本當の生き生きした支那民族の特質を知り潤ひのある支那絶大の文化を理解しようとするには現代の支那を立脚地として出發しなくてはならず、殊に之を社會一般に判らせようとするには問題部門の如何に拘らず之を趣味的に興味深く攷察するの必要がある。

化石した支那を取扱ふことを唯一の支那討究の目的で、よもある如く見てゐる觀方は今日の如く學問の實際化を要求して來てゐる日本の國家社會にとつて餘りに無意義な隱居仕事と云ひ得る。支那の事を實地に見ない者はあたまごなしにけなしてかゝつたり、或は遠くより見て自分極めのドクマで以て多寡を括つた斷案を下したりおまけに徒らに大言壯語するの傾きがある。それでは門外のもの首肯納得せしむるだけの興味も惹かず、事例の提供にもならないのである。今日の日本の現状は支那を専門家が獨占顔をして自分免許の觀察法のみで以つて研究してよいと云ふやうな時代ではない。むしろ出來得れば書齋より街頭へ持出して老いも若きも各その觀方の異つた方面からそれく

大支那大系

自由討究をなすべきときである。三民主義の擡頭して以來王道地に墮つなど、愛憎をつかし今日及び今日以後の支那舞臺を無視せんとする如きは自分どもの最も採らない處である。窮すれば通ずる式の支那流の行きかたにも尙且つその間支那獨特の民族性の閃めきが立派に看破せらるゝ。

世間では又まゝ支那を觀察研究するに文藝方面は面白く、風俗趣味も亦取り付き易い。が政治外交は堅くてむつかしい、などと始めから極めて掛るものがある。しかし支那は奥底の知れぬ國柄だけに之を民族性とか社會相、思想の表現振の方から見て來るならば何だつて興味の深いものがある。外交可なり、財政可なりである。何だつて取り付き易く又堅苦しくなくもやつて行ける。謂はば支那社會相各般のこと悉くが面白く又柔らかく行ける。法律上の犯罪行爲の叙述取扱ひにしても面白く潤ひのある方法がとれる。大支那大系の任務は實にこゝにある。人選にもなかゝの骨が折れるがその部門の取扱ひかたが更に一段の骨である。風俗趣味の如き見方次第では文化各般のことに及ぼし、廣汎に亘つて面白く説くことも出来る。又さうしたい考でもあつた。從來の漢文や東洋史が今日の青年學生だから最早や化石視され殆んど愛憎をつかされてゐる事實のあることについても吾人支那文化の方面に筆を執るものゝ大いに考へ直すべき教訓の含まれてゐるやうな感じがし

風俗・趣味

てならぬ。迂つかり無味乾燥な又熱のない態度で以て御茶を濁してゐる丈では益その譏りを繰返させることにもなる。日本でこれ迄幾度か支那全集ものゝ計畫が話題に上つてはゐても物にならずに立消えとなつたのもその處である。どうやら多士齊々のお歴々の出揃はれた陣頭に立つて劈頭かうした隨筆めいた拙文を公刊するのは處を辨へぬとの譏りを受けることかと覺悟してゐる。併しその言々句々悉く自分が支那都鄙殊に山村水郭に實地に見聞體驗したものに觸れてゐない處はない。此の稿は固よりその器に非ざることを知るも及ばずながら自分一個の趣味の方面から南北各地の民國風俗の一斑を見又之を民族性の現れの一片鱗と考へ隨處々々に自ら起稿したるもの。決して一夜漬のものではない。がしかしその代り系統的に論理を立てた八釜しいものでもない。

要するにこの小冊子支那風俗趣味篇はその全篇に民國人の民族性と社會相、並に風俗趣味の人間味のある處が何となくにじみ出てゐること、又その點に自分の多少努力したことさへ讀者に見出してもらへるならば本書の目的は達せられる。廣い支那文化の全般に亘る趣味の筆の如きは悠久閑雅な氣持ちで油の十分に乘つたときでなくては出來ない事である。一朝一夕の速手間で速成的に作り上げる如きは自分の氣持ちの許さない處である。聊か我が思ふ處を有りのまゝ叙べて本書の序文と

大支那大系

なす次第である。江湖の讀者幸に自分の氣持ちに共鳴せらるゝ處があるならばその閃めきを打寛いだ談笑裏に承る機會を得たいと思つてゐるのである。

昭和五年四月十六日予が誕生の日の朝 日本東京の僑廬にて

後藤朝太郎 するす

大支那大系(第八卷)

風俗趣味篇 目次

一 支那風俗趣味に入る前に

- 一 時代に添はぬ支那知識の採り入れ方……………一
- 二 戦争と政争以外に輝く無限の社會現象……………五

二 支那風俗の現れ方

- 三 民族性の現れ……………三
- 四 大自然を背景とする支那の風俗……………一六
- 五 支那の社會を物語る風俗……………一九
- 六 支那の人情を物語る風俗……………二四
- 七 支那の理解は風俗から……………二六

風俗・趣味

八 支那青年の憂國運動……………

九 支那文化の底力……………

十 日支風俗の相異……………

三 支那の家庭生活

十一 支那家庭の衛生思想……………

十二 支那家庭の簡易生活……………

十三 家庭生活に戒しめらるゝ無駄……………

十四 家庭生活の内部……………

四 支那男子の風俗秘話

十五 支那男子は腰に褲子を纏ふのみ……………

十六 禪なきは衛生に叶へるか……………

十七 支那回教徒の局部の小淨……………

五 支那の第一夫人觀

十八 人は人、我は我……………

十九 第二夫人の氣分……………

二十 第二第三は分業的専門にて納まる……………

六 支那家庭に見る兒女の生ひ立

二十一 支那の子供……………

二十二 中流家庭の少年少女……………

二十三 社會より受くる感化力……………

二十四 周到なる獨立自尊の心……………

七 支那家庭の阿片室

二十五 阿片の力……………

二十六 船中の阿片室……………

二十七 江南の豪家に見る樓上の阿片室……………

二十八 性欲生活から見た家庭の阿片室……………

二十九 趣味嗜好から見た阿片室……………一五三

八 支那正月の行楽

三十 支那人の正月気分……………一五七

三十一 正月は支那人の生命である……………一六二

三十二 正月から見た萬里同風の支那……………一六五

三十三 門神と花聯の情趣……………一六八

三十四 壽星が手にする蟠桃の姿……………一七三

三十五 正月用の文字……………一七七

九 支那の田舎の正月

三十六 田舎に見る正月の情緒……………一八四

三十七 江南の豪家に見る正月の展観……………一九一

三十八 田舎の正月に見る様々の風情……………一九三

三十九 支那正月の祝に見る紅色……………一九八

四十 正月氣分を象徴する色……………二〇〇

四十一 支那趣味に最も適合せる紅色……………二〇五

十 支那家庭に見る玩具

四十二 趣味深きおもちゃ……………二一〇

四十三 富貴と長命を象徴したおもちゃ……………二二二

四十四 滑稽趣味のおもちゃ……………二二四

四十五 鳥やけものを現はしたおもちゃ……………二二六

四十六 木や竹や土で出来たおもちゃ……………二二八

十一 支那の五味八珍

四十七 支那料理……………二三二

四十八 田舎のめしや……………二三八

十二 支那社會生活に見る風俗

四十九 君子は貧を憂へず……………二三八

大支那大系

五十 實生活の裏面……………二四八

五十一 安全地帯は上海より南洋へ……………二五三

十三 北平の美人街……………二五三

五十二 遊里の道德……………二五八

五十三 尖先生……………二六二

五十四 前門外と四馬路……………二六六

十四 支那遊戯の超越性……………二七五

五十五 狒猴戲……………二七五

五十六 吹糖人……………二七八

五十七 賣紙燈……………二八〇

五十八 賣風箏……………二八二

十五 支那古名畫に見る風俗……………二八九

五十九 古典的な風貌……………二八九

六十 十戶外路傍の畫題……………二九四

六十一 室内の風俗……………二九九

六十二 調度類の描寫……………三〇三

十六 支那古名畫の趣味……………三〇八

六十三 名流將來の古名畫……………三三二

六十四 唐宋元明の名畫を前に……………三三六

六十五 明畫の風韻……………三三六

十七 支那古名硯の觀賞……………三三二

六十六 趣味の國交……………三三六

六十七 文人趣味の高調……………三三三

六十八 愛硯趣味……………三三六

六十九 北平名流の古硯展觀……………三三六

七十 文房具中に於ける端溪歙州の位置……………三六一

風俗・趣味

十八 文人の幽齋

- 七十一 文人の情趣……………三九九
- 七十二 水村山郭の詩韻……………三六六
- 七十三 萬家の春聯……………三九四
- 七十四 文人幽居の情……………四〇〇
- 七十五 文人の書齋……………四〇六
- 七十六 文人を訪ねて(その一)……………四一〇
- 七十七 文人を訪ねて(その二)……………四二四

十九 支那翰墨閑話

- 七十八 支那實業家の風流味……………四一九
- 七十九 書畫に對する風懷……………四二〇
- 八十 風人高士を偲ぶ……………四三三

二十 支那宗教に見る人情風俗

- 八十一 支那現代の精神生活……………四四五
- 八十二 面子論と宿命論……………四二九
- 八十三 迷信の威力……………四三一

二十一 支那の佛寺

- 八十四 都鄙に見る寺廟……………四四〇
- 八十五 山寺の僧侶生活……………四四三
- 八十六 禪寺と禪僧……………四四五
- 八十七 客堂物語……………四四八
- 八十八 榮ゆる寺と亡び行く寺……………四五二

二十二 支那現代の儒教

- 八十九 儒教不振の事情……………四五五
- 九十 孔子廟參拜……………四五七
- 九十一 文獻上に於ける儒教……………四六二

九十二 儒教を超越せる支那人

二十三 支那現代の道觀

九十三 北平の白雲觀

九十四 大自然を採入れた道教

九十五 迷信を利用せる道教

九十六 祈願禮拜

九十七 道教思想の將來

二十四 北平回教寺に發見せし秘話珍談

九十八 アラビヤ文字と清真回回の招牌

九十九 回々の茶館と澡塘

百 回々の翡翠老舗

百一 教子胡同の東大寺と牛街の西大寺參詣

百二 回教寺院内の沐浴と禮拜

百三 回々教徒結束の力

百四 四川村狂堂君の回教三昧を頌す

二十五 支那八選

百五 古玩店頭

百六 辭令の情味

百七 清濁併合

百八 歐米人の支那趣味研究

百九 不安な社會

百十 米國で大持て

百十一 輕業好き

百十二 若返りの壯陽法

二十六 支那民衆奇習

百十三 四川の紅本黃表紙

大支那大系

百十四 阿片公賣……………五四〇

百十五 出稼船……………五四五

二十七 支那乾棗に見る奇習

百十六 琥珀蜜棗の神仙味……………五四九

百十七 若返り法に適用せられた神仙棗……………五五五

百十八 棗の並木を作る美風……………五七四

二十八 支那貨幣に伴ふ奇習

百十九 贗札……………五七九

百二十 贗の銀貨……………五八二

百二十一 響の清き銀貨……………五六六

百二十二 銀貨の銀粉……………五六九

百二十三 銀貨の秘藏……………五九二

百二十四 車錢の手工品……………

二十九 繪文字の趣味

百二十五 電氣家室……………六〇〇

百二十六 室の字各種……………六〇九

三十 支那風俗趣味の新傾向

百二十七 動かない支那の民族性……………六〇八

百二十八 洋風化せる趣味の傾向……………六〇九

百二十九 支那趣味に對する懐古の情……………六一三

— 終 —

風俗・趣味

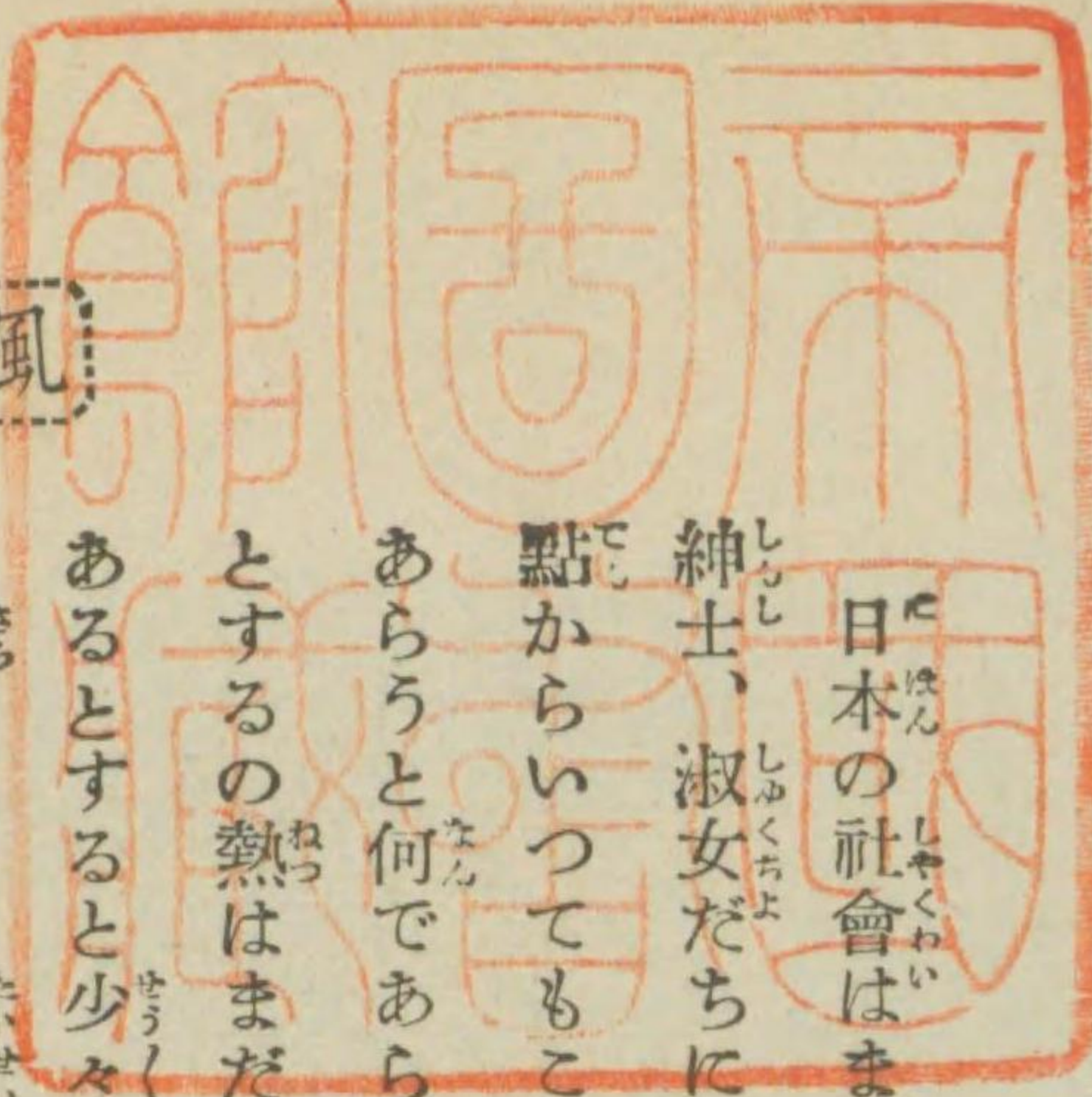
大支那大系

第八卷

風俗・趣味篇

後藤朝太郎

風俗・趣味



一 支那風俗趣味に入る前に

一 時代に添はぬ支那知識の採り入れ方

日本の社會はまだ何といつても歐米本位であり、當節の青年學生はもとより朝野の名流、貴顯、紳士、淑女だちにしても歐米のことゝいへば何でもその流行を追ふ傾きがあり、少なくとも氣持の點からいつてもこれを信用してかゝつてゐる情態である。そして毛斷ガールの姿であらうと舞踏であらうと何であらうと、歐米の文化としいへば何でもかでも一應はお構ひなしにこれにあやからうとするの熱はまだ中々衰へない。新日本の勃興氣分が今日かやうな浮足の氣分で象徴せらるゝのであるとすると少々情なくなるのである。

更にもつと大勢の上から見てもやはり日本の現在は歐米の文化各般にわたり、衣、食、住であれ身のまはりのものであれ典禮であれその他、美術工藝、單語、交際、運輸、土木、軍事、教育、倫理、學術とあらゆる現代の社會生活に必樞のものといへばこれを泰西の國々より取入れまたはその範をこれに仰がんとつとめてゐるのである。日本の今日あるをいたした素因の一朝一夕でな

支那風俗趣味に入る前に

大支派大系



大支那系

いこともこれからほど推測せらるゝのであるが、見方によつては日本は全くその衣食住はもとより美術工藝なり、社會運動なり、その社會現象のうはは歐米の文明で以て裝飾せられ、着色せられその爲めに日本人は日本の天地でいやでも應でもその雰圍氣のうちに入つて生を送らなくてはならぬことになつてゐる、またそのこれを享受することを一般は喜んでゐるといふ大勢になつてゐる。これがまた所謂當世流といふものゝ本位となつてゐる。されば各その潮流に乗つかつてサマサの今日常識としての常道であると相場がきめられてゐるのである。

今日は、時代の大勢が既にこゝまで来て居り、そして朝野全般の空氣もこれを是認してゐる以上こゝに殊更異説を立て、時代に添はぬ支那の話を持出しその知識の取入れかたの批評を試むるなどいふはあまりに物ずきに失するやうにも見えるかも知れぬ。人あるひはいはん。

「支那のことなんてどうだつてよいぢやないか」。

「所詮歐米には勝てない支那のことぢやもの」。

「持病の如くいつも戦争ばかりしてゐる支那ぢや」。

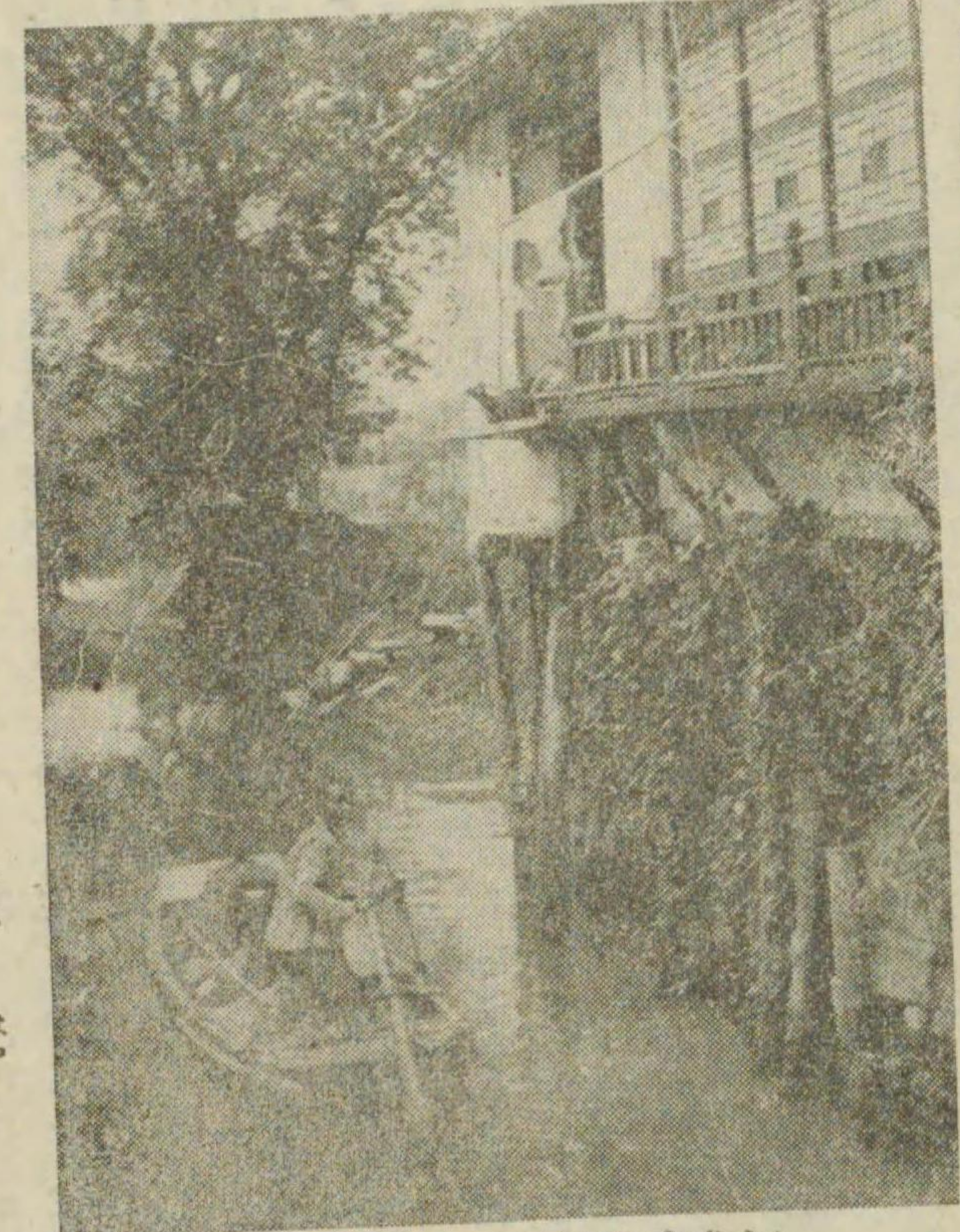
「支那からはどうして氣のきいた人物が日本に來ないのぢや」。

などいひのたやうな口吻を漏らして來るものがある。といつた符號で、てんでこれを問題にしよ

うともしないのである。當節の紳士連中でもまた今日は大抵これである。一般に支那の理解を求むるなどは當分まだ無理なわけである。中には全然馬耳東風の態度にきめ込むものもあるが當然のことである。しかし如何に世は歐米本位に傾いてゐようと朝野の空氣があまり膝元の東亞の舞臺に對して無頓着でゐらるゝといふのは看過することの出

來ぬ時代錯語である。かやうにこゝに時代錯誤だといふやうな穩かでない語でも用ひて來るといふ度はいふ、

「われ〜だつて支那知識の必要な



江蘇省蘇州城外水鄉情趣

風俗・趣味

位のこととはわかつてゐる。また常に注意を拂つてもゐるのだぞ』云々
と來るのである。その點のわかつてゐてくれゝば東亞の爲めまた日本の爲に喜ばしいことである。ところが今日、社會教育の上から見て最も重大な使命を持つてゐる新聞紙上にしても日本人と

支那風俗趣味に入る前に

して知つてゐなくてはならぬ支那社會の事と云ふと時勢に添ふやうに報道されて居らず、その支那時事として報ぜらるゝものといへば、殆ど千篇一律に戦争と政争の範圍内のことに限られてゐる。戦争や政争のこともよいにはよい。がしかし年が年中そればかりで、他に幾多の我々日本人にとつて重要な出来事と認むべきもの、また支那社會にとつてもその眞面目を表現せる側からして等閑に付することの出来ない事象が頻々として面白く現れて來てゐるのであるがさういつた方面の事柄は殆ど全く問題にされず、また報導もされず、暗から暗に葬られてゐる。まことに返すくも遺憾なことを思ふのである。他國から日本人の如く戦争すきの國民に見られてゐる國民はあまりないであらうが事實また戦争記事や戦争の號外を好むこと日本の如きは少ないことであらう。また日本人の如く政黨觀念の強くまたその政黨が天下をとると、此時とばかりに懸命にそれを露骨にまた傍若無人に振舞ふものもあまり他にあるまいと思ふ。

その邊から見ると今日の支那知識がその好む所に限定せられてゐるのもその所であると思ふべきものかも知れぬが、しかし新日本の將來の舞臺はかやうな時代遅れの知識を以て支那局面の能事終れりといつた風な態度でゐることは許されないのである。日本の今日までの一般支那知識なるものはまだくたしかに時代錯誤に陥つてゐるものと評してもよろしくはないかと思ふのである。

二 戦争と政争以外に輝く無限の社會現象

世に十八史略を読み、また吳魏蜀の三國志の劇的戦争の舞臺面を書籍の上から知つてゐる者は、今日いくら時局の安定せぬのを見ても驚かない。中華民國になつてからその中原に鹿を逐ふものが入り替り立ち代り現れ、それが袁世凱であらうと、黎元洪であらうと、段琪瑞であらうと、また張作霖、吳佩孚、馮玉祥、孫傳芳、蔣介石とたれにしたところで要するに古來の歴史をたゞ繰返してゐる役者の出現に過ぎぬ位にしか見てゐない。事實またさうなのである。

舞臺はどう變つても同じやうな役者が現れる。蘇秦張儀が出で、陳勝吳廣が出で諸葛孔明に魏の曹操が出る。合従連衡、離合集散、古來全くその軌を一にしてゐると云ひつべく、どうせはじめから一盤散沙といつた支那の時局面のことであるから、標語モットーをその時勢に合ふやうもつともらしく旗幟高く翳して立つといふまでである。多くは大抵龍頭蛇尾に終るにきまつてゐる。とかやうに多寡をくゞつて高所から大悟徹底して世相を觀じ禪僧のやうな心持で見ましてしまつても愛想がなくなる。がしかし支那は民國となつて最早や十有九年、年々歳々花相似たりでいつまでたつてもやれ北伐、やれ渡江、やれ武漢、やれ南京奪回、やれ徐州占領といつたやうなことを何百回となく繰返

支那風俗趣味に入る前に

大支那系

してゐるのである。そしてそのうちには必ず支那一流の寢返り内通と買収とで以て番狂はせのまはり舞臺を演じて來る。こはその積りで見てゐるときつと出て來る。全くうまく仕組まれたもので全くの芝居に過ぎぬのである。いつになつたらこの争奪戦の幕ははねの時刻になることやら見當がつかぬのである。時局の舞臺の中心は時によりあるひは直隸に山東にまた河南に、兩湖に、江西に、浙江に蘇江に、カントンにまた四川にと、その場所はいつもくるくると變りこそすれ日本から見てもゐると同じやうな舞臺で同じやうな戦争の蒸し返し演ぜられてゐるとしか考へられないであらう事實はそれがこまかく報道されてゐても読み手の頭には大新聞の紙面でも何でもたゞその同じやうな事にしか感じない。その記事を掲載することにかけては各社はこれ日も足らずやつてゐるといふ状態であるからかなり皮肉にも見えるのである。つまり自分共はいかに日本の國民が戦争に興味を持つ世界有数の尙武民族であるとしてもさうそのいつまでも包圍と攻撃、占領と奪回の記事ばかりでもあるまいものかと考へさせらるゝのである。

しかし支那四百餘州のあれ程廣い天地にして、然らば果してかうした戦争とか殺伐な出來事とかの外に貴重な新聞紙面を埋むるに足るべき好個の資料はないのかといふに決してさうではない。戰場や政争の事以外に無限の興味ある現象が支那社會の全局面にわたり光輝ある歴史と大陸的のひら

風俗・趣味



浙江省寧波城内上流家庭婚禮に用ひらるホウクラウト
ン花鼓桶、子孫繁榮の用具

めきを以て時々刻々演ぜられつゝあるのである。たとへばその必ずしも都城といはずまた山郭水村といはず支那民族がその自治的方法として最も誇りとするところの團體生活においてこれを見るもその政府に關係なく作れるその集團の方法、組織それに自衛防禦の方法からして、苛斂、誅求に對する適當なる防壓手段、自治的裁判の方法、市場マーケットの經營、物資の運輸遞送に關する方法また金融の方法機關等、卑近な例で考へて見てもかなり注目に價する新しい出來事が色々あるのである。近來日本でも八釜しい交通、道路、特に舖道の問題についても南支には日本のとりて以て參考に供すべき舖石のものがどつさりあるのを見るのである。思ふに時代の要求する支那の知識は

支那風俗趣味に入る前に

大支那大系

つもその戦争のことばかりを唯一の出来事なるかの如く思はしめなくともよろしいではないかと思ふ。

戦争に關する知識は派手やかであるからあるひは一部日本人の特殊のものには大いにうけいられ歓迎もせられよう、しかし若し本當に支那を理解し支那の社會を知り、支那の家庭を知り支那の個人を知らうとするには、戦争ばかりでなく人情の世話物もよろしかるべく、柔かな美しいやさしい方面にもいくらでも材料がころがつてゐる。しかるに、鼻につくやうな戦争のこのみで支那をまたかと思はしむるといふは支那に平和なる氣分の漲れる大局面のあることを全然没却せしむることになる。支那は局面の廣い國で時局の戦争なんか知らぬ地方も各省にかなりある位であるから我れ關せず焉の生活振りをやつてゐる平和の民はなほ幾億萬といふほど相当澤山あるのである。戦争を繰返してゐる一局部の事をのみ力説してそれで以て支那全體の平和村を殺伐視して考へるなどいふことは支那の眞面目を大いにスポイルすることになるのであるから自分は深くこれを遺憾に思ふ次第である。

日本では支那としいへば戦争と政争それから略奪排外 不當關稅といったやうな神經を尖らせる事件のみしか考へられない。その他の事は忘れられてゐる譯でも勿論あるまいが、次から次へと日本や列國はその痛棒を感じしめらるゝ事件が突發して來るので、その對策と善後策とにのみこれ日も足らず随分骨の折れた譯であるが、事實何等そのためのゆとりを生じないのである。しかしながら、われわれに關係のないこととしても大抵南北對峙の戦役のやうなことで占領 奪回 寢返り、亡命といった物騒なやうな記事ばかりであるのである。ところで世間ではそれらの戦争記事を読むものゝ多くはきつと互に異口同音にいふ、ことに

「支那もよい加減で同じやうな戦ひは大抵にして止めたらよさうなものだ」

「中央政府で今少しく眞劍になつて取締つてやればよさそうなものだ」

「よい潮時を見て南北が妥協し有方な中央政府でも確立して統一をしたらよからうに」

「早く安定をさせる人傑の出て憲法でも確立するやうにしたらよさうなものだが」

といろ／＼の名案も日本人の間から大分出ることは出るが、かういつたお誂へ向きのことは決して行へないのである。といふのは支那が、日本の國土ぐらゐの手頃の境域を持つてゐる國であつて、且つ中央政府の威令の行はるといふ國であることを前提にしてゐる場合の話である。或ひは國家の統一といふことを朝野の個人々々が眞に希望し、そして最初の憲法の制定を完成し、どこまでも憲法なり約法なりに準據しようといふ考へのある場合に望み得る話である。支那の現狀に對し日本人にか

支那風俗趣味に入る前に

風俗・趣味

大支那大系

うした考へのうかぶといふことはもつともなわけであるが、支那はいつになつたらかやうなお誂へ向きのまとまつた統一情態を見ることやら、恐らくかやうな状態を見るときは容易でないものである。

といふのは支那は一つの政府の下に國家としてまとまるのには國土の領域があまりに廣過ぎる。支那そのものゝ大自然があつた通りに廣い。四川省から三峽を通つて出て来て、兩湖を過ぎ、西江、安徽、江蘇と下江して上海まで来る千五百マイルといふものを考へて見るだけでも容易なことではないことを首肯せしめる。また北はチ、ハルからハルビン、長春、奉天と出て来てそれから北平、漢口に至り、洞庭湖長沙から衡州、曲江を経て廣東に出るこの長い南北の境域を見ただけでも大變である。

これから東西、南北にわたる支那大自然の間の都鄙、交通、資源、富力、氣質、思想、利害關係などすべてにわたつて考へて見るといふとその風物の統一だけでも思ひもよらぬといふことが考へられる。支那大自然の風物は見れば見るほど支那といふ國はいつの時代にも分解作用が起つて對立分立乃至は割據といふことの方が寧ろ原則として考へられる。たゞ帝力、爲政者の威力の十分にきいてその影響の及ぶところの範囲が統一の範圍であることは、支那の歴史を考へれば、明かである。

にレコードされてゐるだけのことであるといふ風に考へさせらるゝのである。

なほ又その支那の社會方面についてその南北富力の相違や思想の懸絶、武力のへだたりのあることとやなどから考へて見てもその統一はますます望みにくい事になる。そこへ持つて行つて近來列國の足並のとかく不揃ひがちであつて支那に對してとかく英、米、日、佛、露、獨とそれ／＼その立場と利害關係を異にして來てゐるのであるからその邊のデリケートな點もこゝに影響しいよ／＼以てその統一安定を期するなどいふことは實際にますます影が薄いやうに見えるのである。

戦争や時局の問題などに氣をとられてしまつてゐるものは勢ひ支那大自然の風物の方は閑却せられたゞその焦眉の急を要する問題の一點にのみ考へが集中せらるゝものであるから、その點について神經がますますとがつて來る。そして全局面に對して自ら閑却の形をとるに至るのである。支那に對して一にも二にもたゞ統一統一と口ぐせの如くに斯く云ふものなども實はその大自然の絶大であることを忘れてしまつてたゞうっかりしてゐる爲めに出る言葉であると思ふ。聯省自治も何も今の處全く見込みの立たない支那の行政に對しこれに統一安定を求むるなどいふは實際のところ百年の河清をまつと一般ではないかと思ふ氣がしてならぬのである。

風俗・趣味

支那風俗趣味に入る前に

二 支那風俗の現れ方

三 民族性の現れ

お隣の支那は表面に見えた時局問題や新聞紙上に窺はるる政治問題のみから見てゐるのでは本當の支那の眞面目は看破せられない。その場その場で變つて行く刹那的の現れはいくら之を追驅けて見た所で際限のない話である。十分深く這入つてゐる根柢のある所まで知り辨へてゐて、そしてその表面に見えたその場限りの現象を視て行くのであるならば本當の譯も理解されるであらうがホンのうは面だけを見てゐるやり方では遂にその眞相を掴むことも出来ずして止んでしまふのである。凡そ支那の事物の眞相を知らうとするには支那の社會に不用意の間に起る幾多の自然的現象をつかまへて行かなくてはならぬのである。そこには支那民族自身のかかなり深い性質も兆してゐれば又支那民族獨特の癖もおのづから見えてゐる。支那人の心持ちの大部分はかうした不用意の間に成す行爲のうちに見えはるゝのである。而かもそれは一度や二度でなく氣永くよく見てゐると大抵の行爲は極めて無邪氣に現はれて来る。支那人の氣持や性質を見ようと思ふにはたゞと一期の外では行爲

まへようなどと考へるのは間違ひであつてなるべくゆつくりと精密に又根氣よく見て行かなくては判るものではない。

支那人の心的方面を見て行くには成るべく興味のあり且つ有益な方面に現はれた現象を掴まへて行くやうにすることが必要である。わけても支那の社會一般に漲れる風俗に着眼することが一等判り易くもあり興味もあり、又有益でもあるかと思へらるゝのである。旁その風俗のうちには最も肝腎な支那の民族性國民性と云ふものの現れを看破することが出来るのである。



北支那の路傍に見る儀葬の行。列、縁衣を着て禮具を擔ぐ。

だのと云ふものと同じく永い間かゝつ支那の風俗は文字だの言語だの習慣

てゆつくり造りあげられたものであつて支那民族そのものとは離るべからざる密接な關係を持つてゐる。風俗のうちにはいつも比較的碎けた柔かい氣分が充分満ちてゐるからいくらその風俗の内容をしらべて行つても途中理屈に出くはさない。又比較的大衆向きに出来てもゐるから普遍的の性質

支那風俗の現れ方

大支那系

があつてよく受け容れられる。一人や二人のなす奇行異態は人々が之を別に見て狂人あつかひをなし一般風俗としては勿論見ないのである。されば一般的價値の認められてゐる風俗そのものは民族性を見て行く上に有力な手掛かりともなつてゐるのである。今日支那時局を前に控へてゐる支那社會の本質的心持ちを察し辨へんとするにはその順序として風俗の一般に通じそれが裏面を流れてゐる民族心理を豫備智識として知つておく必要があると考へるのである。

固より支那はあの通り領域も廣く人口も多く到底日本邊りの島國のそれを以て比ぶべくもない。従つて支那風俗と云つてもその内容は色々地方によつて變はる。北支那、中部支那、南支那、奥地方面と隨處隨處に多少づつの差異のあるは止むを得ないことである。又その社會の大なるに従つても違ひ、或は時代によつても違ふ。又その外國から歸つたもの共の風俗と來たらこれ亦著しく變つてハイカラになつてゐる。一概に支那風俗と云つてもそんな工合でかなり開きがあるのである。併し概括して云へば支那式の香氣が漲つてゐる。いかにも支那らしいと考へらるる何物か、漲つてゐる支那の社會は何となく東洋氣分を漲はせてゐていくら變だと思はれることであつても日本人朝鮮人あたりにはまだまだ呑み込める氣持ちもするが西洋人と來たらんで判らぬことが多い。支那各地民俗一般に行はれてゐる門閥、門閥と云ふのは戸籍門閥に附せらるゝ所の文學的階級名を言

風俗・趣味

- 一、宣傳性があり
- 二、堅忍不拔なる悠久性があり
- 三、社交性に富ある所があり
- 四、享樂性に濃厚なる所があり
- 五、破壊殘忍性があり
- 六、建設集團に努むる所があり
- 七、民族保持には特に底力の強いものがあり
- 八、大悟徹底した禪味もあり風懷もある

支那風俗の現はれ方

大支那系

と云つた風にいくらでも之を數へ來ることが出来るのである。而かもその何れか相集まり編み立てられてこゝに美しい支那民族的の面目を躍如たらしめてゐるのである。支那の風俗はその間に立派に作り上げられてこれらの性質日常生活のうち散り嵌めかれらの人生に滾々盡きない潤ひを付け柔かみを持たしめ、そしてかれの社會生活をして一層滑かならしめてゐるところがあるのである。さればお隣の支那民族を理解したいと云ふにはその風俗の方向の研究に這入ることが必要でないかと思ふのである。

四 大自然を背景とする支那の風俗

支那民族が不用意の間に示してゐる古來の風俗と云ふものは日本人の目には極めて大まかな呑ん氣なものに見えてゐるところがある。時には大膽極まることもあるかと思ふと又平氣に無雜作に片付かると云つたところもあると云つた調子で日本人の考へてゐる常識とは桁がちがふのである。どう考へて見ても支那の風俗にはその背景に恐ろしい大陸的氣分と云ふものが動いてゐる事を忘れてはならぬのである。どうしても支那はいつもその大陸的大自然をバックしてゐると云ふ點が支那風俗の特色根柢となつてゐることに意をいたさなくてはならぬと考へられる。上にも述べたやうに支那人の大まかであり従つてその桁外れの大きい考へを持つことゝ云ひ、又無意識に出る色々の氣持

風俗・趣味



四川省揚子江上流通航舟船竹索結付く見所峽三、備設の岸江

支那風俗の現はれ方

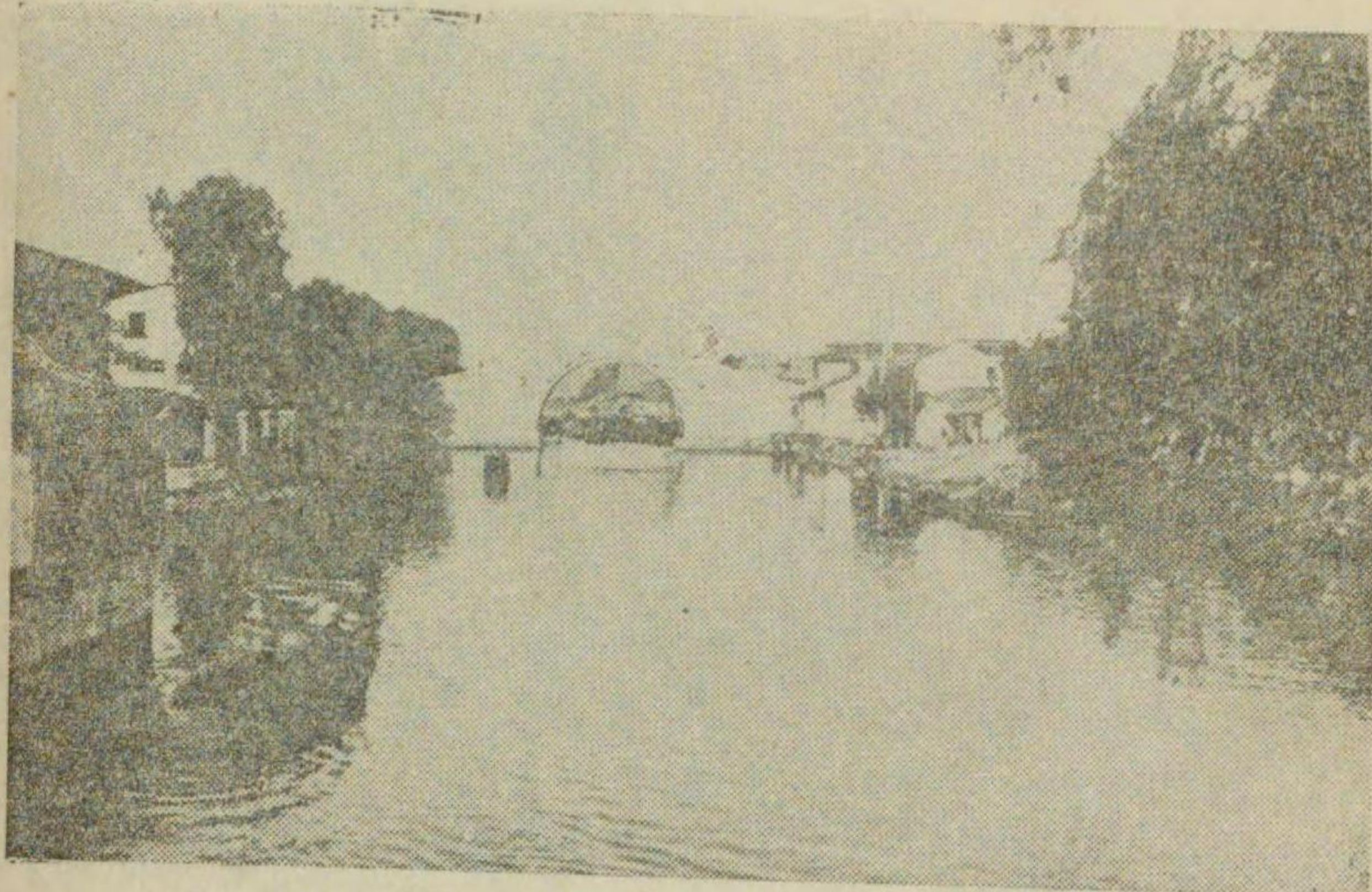
ちと云ふものは到底争はれないものである。その裏には必ずその歴史的にはぐくまれたる大自然の山川風土の影響があることを忘れてはならぬ。その佛事に際して禪寺でよく見る風俗であるが山門の四天王のあたりに持つて行つて冠らせる紙の帽子である。二間三間からある圖なしの大きいものを作つてゐるのを見たりする。かやうなとつもない事をしすかと思ふと反對に又小鳥を愛護して労働者に至るまでが鳥籠を提げ町をあるいてゐる風流な景色などを域内に見ることがあるのである。一々かうして支那の風俗を眺め之を嘖みしめて行くと云ふとそこに大陸的なゆつくりした氣分のあることが認められるのである。

大支那系

支那人は北支那にしろ南支那にしろあの通り廣漠たるところにその社會生活を送つてゐるのであるからおのづからそこにその平素の氣持からして吾々日本人などの想像もつかぬことがあるにきまつてゐる。例へば支那の人々には

- 一、悠揚迫らぬ呑ん氣な氣合の見えてゐること
- 二、物に超越はしてゐるがしかし中々よく要領を得てゐること
- 三、無邪氣でユーモアに富んだものの多きこと
- 四、細かい處があるが又反對に大まかなところのあること

などが數へらるゝのである。この小さくて狭ま苦しい日本の國土にゐるものには支那の風俗と云へば鬼角いつも締りのないものゝやうに見られてゐる。それと云ふのも大陸的氣分の現れであるといふべし。



浙省紹興城外水郷に見る運河の情趣

化が興つて力強く動いてゐる爲めであると斷ぜらるゝのである。

五 支那の社會を物語る風俗

日本人には少々異様に感ぜらるゝ風習であるかも知れぬが今一二の例をこゝに述べて見よう。支那の田舎に行つて町を歩いてゐると夏の夕など民家の食事どきとなると街路に食卓を持ち出し家族諸共に露天で以つて食事をとつてゐる光景をよく見ることがあるのである。そこには極めて無邪氣な呑ん氣な氣持が見えてゐて實際はあまり變にも感ぜられないのである。

又春のチンミンチエー、清明節の時分であるとか又秋の盂蘭勝會の折とかになると殊に路上に食卓を持ち出して來るものが多い。と云ふのは支那の風俗でなるべくその卓上に列べた御馳走は人に見てもらひたいと云ふのが習慣となつてゐる。出來れば行人などにも請坐請坐の挨拶をしてそしてゆつくり腰をおろしてもらつてニコやかにやつてもらひたい。見ず知らずの他人でもかまはず之を請ふることさへあるのである。日本人の常識から考へられないことのやうであるが支那の田舎ではかくして近處界限に對する聊か見えにもしてゐるのである。又それによつて先考、故人などの靈に對する一つの慰めにもなると云つた心持ちも手傳つてゐるらしく思はれるのである。若し何か特別の

風俗・趣味

支那風俗の現はれ方

大支那系



北平城内商店街に見る白市光景

饗應催しでもあると云つた場合の如きは好んで街路へ出張つて食べてゐる様子を見る。あの狹隘な支那町の街路へ卓を持ち出されるのであるから行人どもは勿論誰れだつて之を邪魔に思ひさうなものである。ところが一向に平氣なものである。交通の邪魔とか何とか云ふことは毫も考へてゐないものが多いのには更に驚くの外ない。そこに支那人一般の呑ん氣な無關心な所が見えてゐて面白い。田舎にはかうした場面をよく見るのであるが、自分自身もそれには慣れて何とも思はなくなつた。もともとかれらは享樂趣味から出てゐる事でもあるし、又宣傳になるつもりでもあるのであるから戸外に持ち出して食事をすることが却つて最もふさはしいやり方であると思はれてゐる。殊に社交方面から之を考へて見てもそこには面白いことがある。そこへ通り掛かつた

風俗・趣味

行人などの若し愆意の人であつたときにはすぐ之を呼び止め食卓につかせるやうに請するのであるかうした場面は田舎にありがちでいつも見るところである。日本人は家庭に於いてどうするかと云ふと食事のときは殊になるべく戸外から覗き込まれないやうと態々障子まで締めることに努めるのである。支那では反對になるべく見えるところへ出て食べると云ふのであるから大變なちがひである。尤もこは中流以下のうちの話であつて一般が悉くさうやつてゐると云ふ意味では勿論ない。しかし中流以下のうちは支那社會の大部分をなしてゐるのであるから之を以つて先づ支那社會の事相を物語つてゐるものと見てもよろしいのである。

尙江南地方の民家では自分共が毎年よく困らせらるゝのはその清明節時分に喪中のうちに盛に鐘や太鼓笛で以つて鳴り物入りの讀經を掲げる事である。固より讀經の間だけは靜かであつてよろしいが鐘や銅羅で以つて囃し立てる。その爲めに近處界限にゐるものはとてもたまらぬ。夜半であらうが夕方であらうが朝早くから續けざまにやるのである。とても安眠など出来たものでない。それが清明節の頃には一ヶ村に幾軒となくやるうちが出来て來るのである。又その隣村にも鳴り物をやつてゐるうちがあつてよく聞えてゐるのである。夜半になると殊にそれがよく耳に立つのである。隣家の迷惑になる點から云ふと随分迷惑な話である。がしかし喪家の方から云ふと成るだけ村ちう

支那風俗の現れ方

大支那系

に鳴り渡り噂をされた方が宣傳になつてよろしいのである。曰く

「亡くなつた親の爲めにかくも悲しみ哀調の曲（必ずしも哀調らしく聞こえては居ないが）を延べつにやつてゐるとは奇特の至りである。感心である」

と推賞せらるゝのである。そこが眼目となつてゐると皮肉つてもよい位である。若し自分共が遊歴中そばに行つてその鳴り物やら佛壇に供へられた物などを見に行つたりしようものなら大變喜んで又請坐と愛相よく云ひ出すのである。行つて見るとそこには僧侶の一人や二人は招いてゐる場合が多い。鐘や太鼓や銅羅の方も伶人として外から別に雇傭して來たものであるからとにかく大變な物入りなのである。喪家に在りてはそれ丈けのことが世間へ見えなくてはつまらぬと云ふ極めて宣傳本位の支那らしい考へである。支那の社會としてはこれは洵にふさはしい氣持ちであると評すべきである。

支那の田舎へ行つたときはその氣分を看破してよくその場面にふさはしい事は出来るだけ聞いて見るべく、その費用のかゝつた事は同情の心を以て話を持ちかけてやらなくてはならぬのである。外のどうでもよい話のみをして肝腎の本論に觸れぬやうなやり方では折角あちらから請坐請坐と云つてくれた禮に對しても失禮になるわけである。物を辨へぬ人間と云はれても仕方がないのである。

風俗・趣味

支那の風俗の見方は之を單なる風俗として離して見ると云ふことでなく必ずその社會の心持を不用意の間に物語つてゐるものとして見るときはそのつまらぬことに見えてゐることであつてもその裏面に面白い事の伏在してゐる事を見出すのである。いかにも時には見え透いたやうなことに見えることもあり、日本人では氣が咎めてあまりにしらじらしくて厭やな心持ちになつたりする事があるがそれにしてもかれらは平氣で又カラカラした氣分でやつてゐるのである。又支那兒童の路傍で遊んでゐる様子を見るとその遊びがいかにも支那社會の一面を物語つてゐるやうに見える。と云ふのは子供たちの大抵その遊戲の心持ちと云つたら支那芝居の眞似をやつてゐるのである。殊に滑稽な笑はせごとユーモアなどを演じそこを面白くをかしく遊んでゐるのである。従つて支那の子供用の玩具を見ると智的と云ふよりは滑稽な假面があつて見たりして人を笑はせるやうに出來てゐるのが多い。人を恐れさせたり物凄く感じさせたりする方のものは少ない。ところが日本の子供の遊びかたを見ると大將ゴツコであるとか戦争ごつこ敵打ちと云つたやうな殺氣立つたことを演じ何かと云ふと人を敵に見て之に打勝つことを主にして遊んでゐる。これはたしかに日本の子供は日本の軍國氣分を物語り支那の子供は支那のゆとりある大陸社會を物語つてゐるものと云へるのである。何れにしても争へないのは此の風俗の現れである。

支那風俗の現はれ方

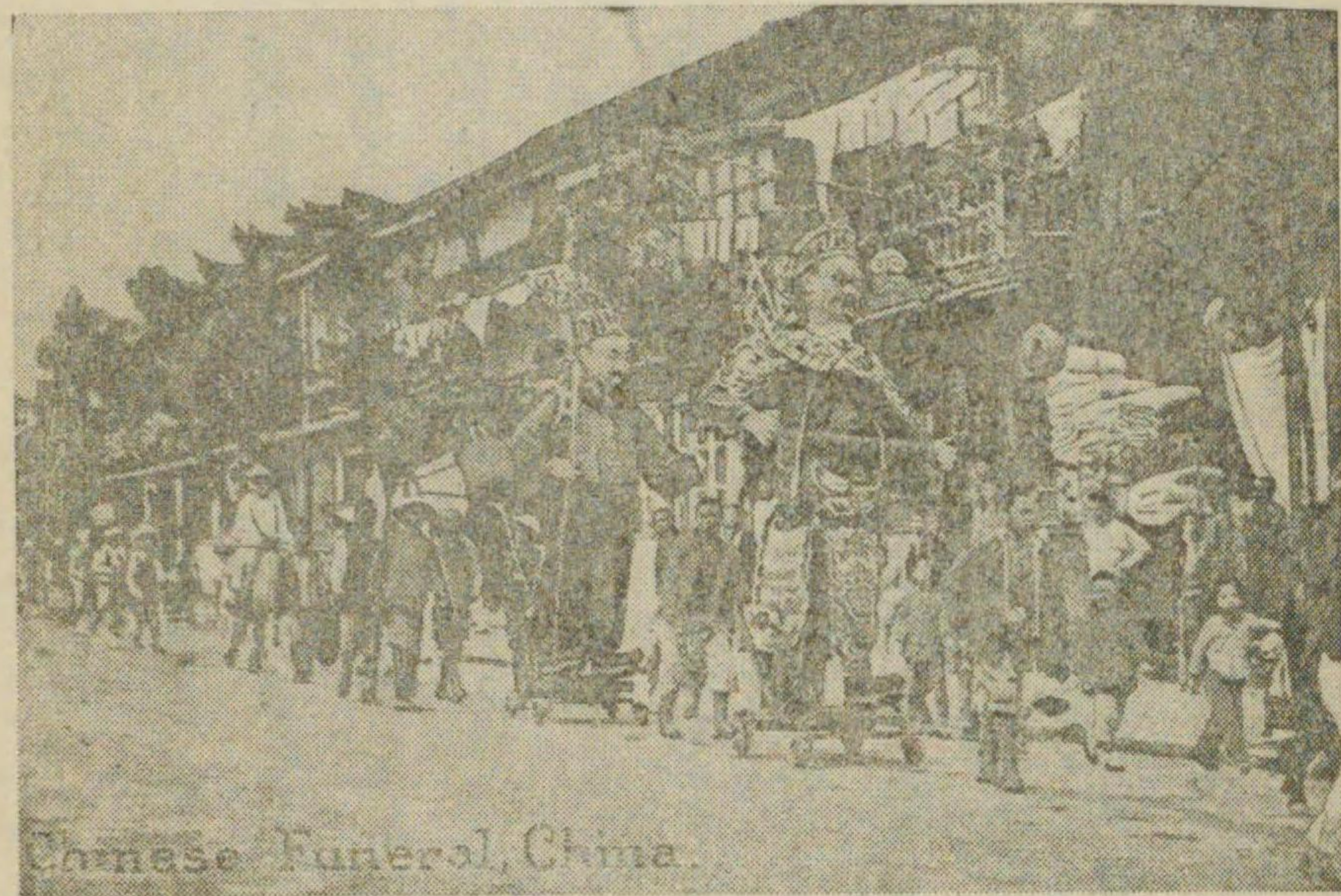
大支那大系

日本人はやゝもすれば支那と云へばいつも政争とか戦争とか云つた方面のこのみを見てゐて少しもその風俗の方面と云つたのとりのある方面には目を着けようとはしない傾がある。支那を見よとか支那を正視せよとか云つて叫ぶものはあるが、かうした社会生活の内容にまで這入り本當の支那人の氣持ちの現はれてゐる風俗方面に着目しようとするものの殆んどないのは残念に思はるゝのである。

六 支那の人情を物語る風俗

支那人が平素その最も美しい人情の現はれとして小鳥を愛するの美風を有してゐることは誰れも風流に思はないものはあるまいと思ふ。そのいかに賤しい下層民であつても又その日その日を稼いでくらししてゐる苦力だちにしてもどうかすると鳥籠に小鳥を飼つて町外れの土手の上などに停み、日の入りの夕照の頃口笛で以つてよくあやしながらさ一日の疲れを癒するやうな心持ちで頻りに小首を動かして悦に入つてゐるところを見ることがある。又北平や上海に小鳥を止まり木に止まらせたまゝ右手に軽く翳して路を散歩してゐる手合ひを見ることがある。又茶館あたりへ行つて見ると別に誰れにと云ふ當てもないらしく自分獨りでその小鳥を相手に樂しみつゝ、明茶に耽つてゐるものを見ることもある。そして誰れか同じやうな仲間でもそこへ這入つて來るものがある。それと

風俗・趣味



上海城内に見る上流家庭葬儀の列行の奇観

支那風俗の現はれ方

双方でその小鳥を啼かし比べでもやると云つたものがある。誠に春の日永には春風駉蕩の氣分でこはよりも目出度い情趣であると思はれる。たしかには支那人と云ふ支那人の持ち前の人情を物語つてゐる美しい風俗であつて南支北支到るところに見出さるゝ光景なのである。又支那は都會と云はず田舎と云はずその邊の城廟なり后天宮なり又三元宮なりニヤンニヤン娘廟なりどこへ行つて見てもその卑俗な信仰の厚い寺院に行つて見るとそこには必ず毎日香華の紫煙立單めて大變な雜沓賑やかさを見せてゐる處があるがその間に善男善女の神前に至りその提籃から鶏の丸煮外各種の料理を取出し之を手向け又貢燭、線香、酒など

大支那系

をそなへ、圓座に坐して三跪九拜をなし銀紙のユワンパウ元寶を焚くとか爆竹を鳴らすとか云つたやうにあらゆる手段方法を盡して禮拜をなすのを見る。神前に物を手向ける時の心持ちと云ふものは何れの國にしても大抵その氣分は同じものであるが獨り此の支那の習慣を見て居るとその間あまりに人間味が勝ち過ぎて俗氣たつぷりのことがあり甚だ滑稽に見らるゝこともあるのである。と云ふのは支那では神様を見ることすべて人間並みであつて必ずその間人情味を加へて神意を忖度してゐるのである。若し神様に祈願したことでもあるとすればその祈願の量の多少によつて豫め供物を遠へなくてはならぬものだとしてゐる。その大きい事を願ふならば随分ウント持つて行つて神前に供へなくては願を叶はせて貰へないことと考へてゐるのである。少量のものを供へておき過大の事を祈るのは不當であると云ふことを心から正直に考へてゐるのである。その爲め随分時としては參詣人にしてどつさり大荷物籠を城隍廟とか財神廟、東嶽廟あたりへ持ち込んでゐる場面を見ることがあるのである。それは無理のないところであつて又一面には可愛いところもあるのである。しかしそこに滑稽なことがある。それは神前に澤山の供へ物をした以上は誰れ人が考へてもその代物は祭壇に奉納したものであるから神靈に受け入れてもらつた心持ちで歸路についてもよかりさうなものだと思はるゝのである。ところがそこが支那人である。はたでよく見てゐると祈りが済むな

風俗・趣味

り例の堤籃の蓋をあけてその鶏の丸煮から何から何までそつくり皿まゝ御苦勞なことに再び取り入れて歸路に就くのであるから、神靈に對しては唯ホンのその三跪九拜をする間だけ香氣をブンブンにほはせてあげたと云ふに過ぎぬのである。神様だつてそのやうな仕打ちをされてはあまりよい氣持ちもしてゐないことかと思はれる。どうせそれを寺男があとでお下がり物として取つてしまふときまつてゐるにしても、一旦奉納した以上は供へたまゝにしておくが日本人あたりの考へである。然るを早速そつくり持つて歸ると云ふに至つては餘りにひどいと云ふ感じがしてならぬのである。ところが支那人の考へと云ふものは違ふ、大變ちがつた人情を有してゐるのである。そのまゝ供へたきり置いておくなど云ふことは支那人の人情に反したことになるものかとも云へる。そこになるあまり立入ることになり日本人からは何とも評せられなくなる。恐らく神様でない寺男などと横取されるのは忌まひましい。寧ろ人の手に渡らぬうち自分でそのまゝ片付けて之を持ち歸ると云ふ方が判つきりしてよいと云ふのかも知れぬ。その外向と同じく寺廟などでよく見る話であるがその參詣人が禮拜のとき手向けて行く紅蠟燭の類がその參詣人の點じてまだどれほど燃えて行かないうちに匂々それを蠟燭臺から抜き取り、そばに支度してある箱の中へと投げ込んで行く寺男がゐるのである。あとに參詣人の詰めかけてゐる

支那風俗の現はれ方

大支那系

爲めに早く抜き取らなくてはならぬ場合もあるであらう。時にはさうであらうが時にはさうでなくとも心得てゐて抜取つてゐるものと察せられる。これは寺男とその近處の蠟獨屋との間に或る種の密約が出来てゐてその間グルになつて相談が出来てゐるものかとも解せらるゝのである。して見るとなるだけ紅蠟はそのあまり減らぬうちに消して取つておくに限るのである。純な信仰心もなにもあつたものでない。寺へ詣で手向ける人こそよいか減馬鹿を見るのである。この邊の消息を述立つるとあまり露骨にも聞こえるし又信仰心に關係ある風俗を穢すわけであるから如何かと思はるゝのであるがかう云つた世間に知られてゐない實相は參詣者の方にもあれば又寺男の方にもあるのである。だから支那人の或る方面には人情味の要領のよい所がいかにもよく物語られてゐるのである。

七 支那の理解は風俗から

支那の眞相を理解させる爲めにと云つて日本にはいかなる方法が講ぜられてゐたであらうか。從來の漢學、漢文は固より支那歴史にしても支那地理にしてもこれまでのやうなやり方では本當の支那氣分は押らない。又論語の文面や、孟子の文字をいくら讀んで見てもあれだけでは本當の支那の轉るわけがないと思ふのである。本當の支那は論語や孟子に關係なく又之を超越しそれとは無關心でどんだん進んでゐるのである。日本が理屈だの科學だのと振り廻はしてゐるうちに現實の支那の舞臺は快速力で以つて構はず進んで行きつゝあるのである。

風俗・趣味



北平城外に見る露店イテウ
(理髮屋)的頭剃イテウ

それが最も有力なものとなつて來るわけである。固よりその風俗と云つても時と處とによりよく變化し推移する。その推移しない方から云ふといくらも變つてゐないやうに見えても之を推移する方から見るとこゝに北支那、中部支那の兩方から見ただけでも随分變つたことが多いのである。

支那風俗の現はれ方

支那はどこまでも理屈の爲めに立つてゐる國ではなく又科學の國でもない。一種理屈や科學なんかにお構ひなく之を超越してゐる國であると云ひ得る。その點から見ると云ふと風俗の如き民族的の實際方面に現はるゝ慣習慣例と云つたものが最も重要視せられ又それ

大支那系

北方に河水の少なく南方に水郷の多いだけでもその郷土郷土の風俗の相違が著しく感ぜらるゝわけである。南方の水郷を中心にその民間盂蘭盆の燈樓流しの古習を見るだけでも北方の方には全く之を見ないのである。

この他多くの年中行事や冠婚喪祭のことにしても之を各地の實際に就いて細かく見て來れば來るほど、それぞれ違ひのあることが見出される。けれども高所大所から一般支那人の家庭生活夜食住の有様からその流行に連れて變つて行く色々の風俗の推移や町村なり城内なりに見る社會生活の動きと云ふものの大體を見て來ると矢張りその支那民族としての色彩の範圍内にて變つてゐるのであつてそれを越えてそとに移り行くことはないのである。そのどことなく支那らしい處を必ず留めてそのにほひのしてゐる範圍内で働いてゐるやうである。例へば今之を交通運輸の方面から見ても最近新しい自動車の流行などは別として一般に

- 一、馬車
- 二、ワンパオツオ黄包車(人力)
- 三、推車
- 四、チャオツ轎子
- 五、民船
- 六、小舟

など色々あるがこれらの馬車なり人力なり何れにしても皆自らそのものに支那らしい氣持を必ず見せてゐる。馬車ならばその馬車にいかにも支那のガタ馬車らしい格好を見せてゐるし又人力な

風俗・趣味

らはその長柄に車夫が兩腕を托し兩臂を思ひ切り開かせて走つて行つてゐる様子と云つたら海によく出來てゐるのである。その馬車にしろ、人力にしろその他轎子にしろ驢馬にしろ皆同じやうなものであつて支那の乗り物と云ふ以上は支那らしい氣分と云ふ點から見ると全然同一の情趣が聯想せらるゝのである。支那流の馬車と云へばあの通り全くバネを有しない蒲鉾なりの幌屋根のガタ馬車が思ひ出されるのであるがさうした支那式の馬車に乗つて田舎路でも行くときの心持ち氣分と云ふものは四周の環境光景やその馬車夫の氣分にかにもよく一致してゐるのである。又その人力車や轎子にしても同じやうなものである。殊に又あの一輪車の推車に托して人間や荷物などの運ばれて行く有様と云ふものはこれ亦いかにも支那らしい趣を見せてゐる。自分はたつた一臺の粗末な一輪車であつても又黄包車であつても之によつて無限の支那情趣を思ひ出し得べく又之によつて支那の社會情態そのものの眞面目を語り得らるゝ氣持ちがしてならぬのである。あの山東は濟南城内あたりでよく推車を推して行く車夫の行列振りと云ひ又その車輪の軋るキーキー鳴り響く所の聯想と云ひ如何にもよく支那の面目を物語つてゐるのである。江南各地の都鄙に見る推車は之と多少違ひその車軸のきしる音響の趣は南方に來るとバツタリ聞くことが出來ない位全く靜かに引かれてゐるのであるが。それにしても尙推車そのものの形はいかにもよく支那の風物なり支那社會の實

支那風俗の現はれ方

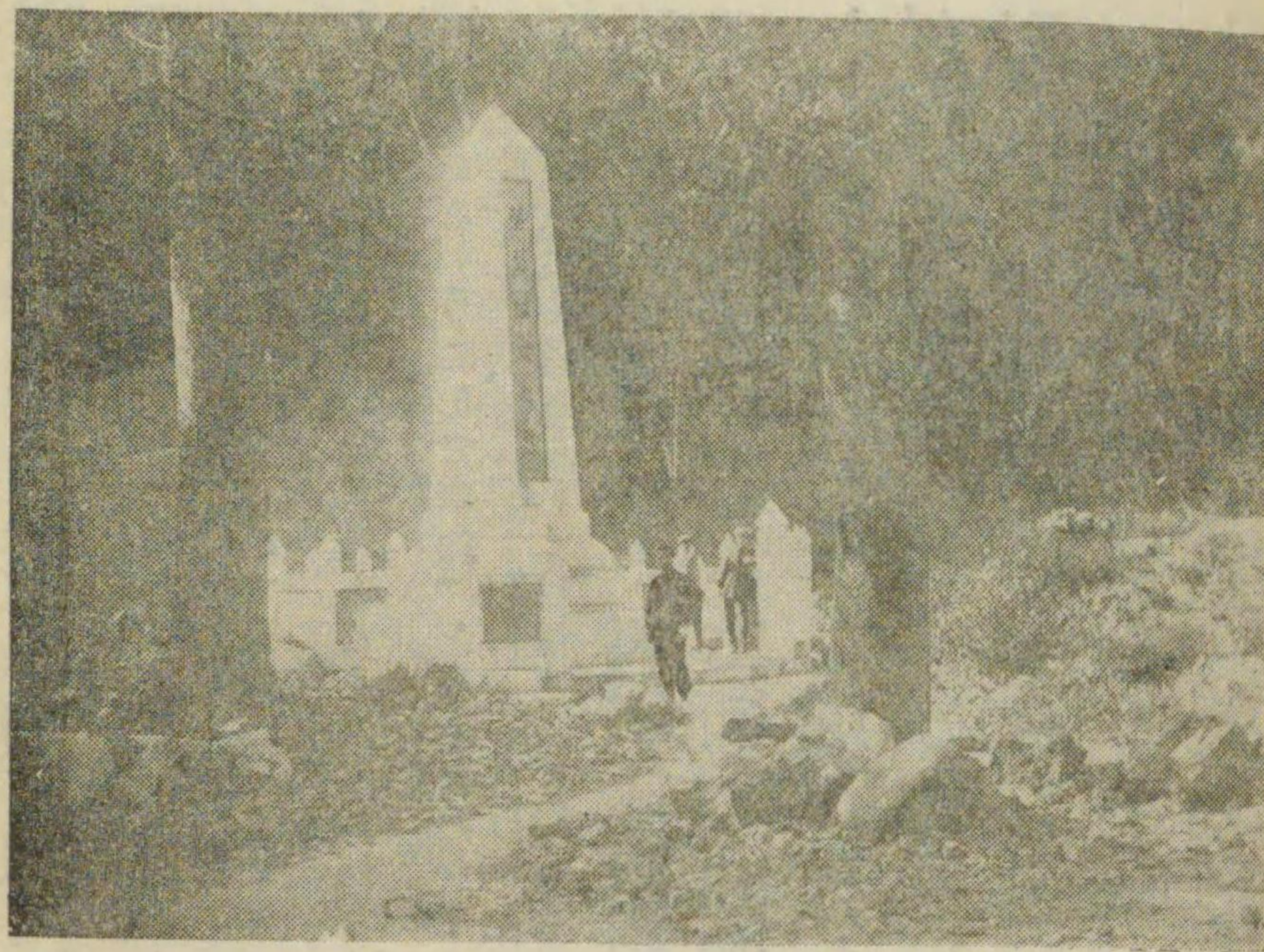
大支那系

相なりを物語つてゐると云へる。かやうに見て來るときはそのホンの陸上の交通機關一つつかまへて來ても之に無限の支那社會相の味のある處が窺はるゝのである。若しそれ民船戎克により又小舟により水郷の支那の風物を物語らんとすればこれ亦いくらでもその聯想が呼び起されるのである。殊に水村民船の去來に伴つて見らるる風俗と云ふものは古來の詩にも見えてゐる如く一種支那人の詩的情緒を漲らせてゐるものであつていかにその水郷の民が漁舟民船の徳によつて人生を楽しみつゝありしか、或は又之をフラワー・ボートとしての畫舫に就いて見てもいかに雅趣を催させてゐたかが判るのである。されば乗り物は僅か畫舫とか轎子とか馬車、又は推車位のものであつても之によつて支那人を知る爲めの民族氣分を先づ以つて窺ふことが出来るのである。之によつて更に支那の社會や人情の機微にも觸れて幽玄なところが窺はるゝのである。別段何等の理屈なしに風俗の方面からすれば支那の文化の物語れる面白い天地を見出し得るものと信するのである。

八 支那青年の愛國運動

モボやモガの多い上海は云ふも更なり支那は各地に新しい青年、ハイカラな姿をしたものどもが大分殖んで來た。毛鷲の代表的人物と云つたものも各地で羽振りをきかせて來ると云ふ時代になつて來た。ところで昨今青年の愛國運動に現はれてゐる顯著なものと思はれるものを見ると各都市

風俗・趣味



湖南省長沙對岸岳麓山中腹に見る蔡鏢大人の墓碑

支那風俗の現はれ方

や田舎の驛頭に掲げらるゝ所の色々の愛國的宣傳ポスターの圖案である。やれ國民政府擁護のやれ三民主義蔣介石擁護のと云つたポスターで以つて之に各種の繪を入れ美しく又力強く揭示してゐることである。それには國民政府の衙門の塔上より千里の光を放射する燈臺の團を示してゐるものもあれば又革命の工作に努力をいたせる黨員が槌、鶴嘴などを手にせる精勵格闘振りを示せるものもあると云つた風でかなりその人目を惹くべく考察されてゐるのである。尙その愛國運動の方法には現今流行の外國排斥のポスターを用ひたものが可成りあり之には随分皮肉なものもあり教唆的のものもありしてかなり

大支那大系

熱を煽つてゐるのである。しかし何と云つてもポスターの宣傳文ではまだ物足りないの之に示威運動の行列の方法をとつてゐることは世人もよく知る通りである。ところが最近にはこの示威運動の行列には依らず大分止めて来た傾向がある。その代りに田舎の寺廟の壁であるとか山の崖縁であるとか苟しくも場所のあるところは構ふ所なくこゝに幾百千字と云ふ長文の宣傳文を掲げて人目に觸れさせるやうにして来た。と云ふ風にかなり深刻に文字宣傳の方法を都會地以外へも擴げて来たこれが最近最も目新しく目撃さるゝ所のものである。又其文字の方法を離れたやり方としては國民政府の役人や又その系統の軍人やが自分の服装を改良して孫文を紀念するところの所謂中山服と云ふものに代へ之を一定の制服として之に權威づけてゐる點は殊に著しく際立つて目に付くのである。中山服は少しく注意をして見てゐるものにはすぐ判るのであるがその色はカーキ色でその上衣のポケットが袋形に仕立てられてゐる。それが垂れて浮き出してゐるので一見直ちに從來の軍閥系統の制服からは違つて見えるのである。

今日の時勢に當たりて民國青年の力を致せるところのものは一二にして足りないが尙民國の國家として最も力を入れてゐる如くに感ぜらるゝものはその筆に口にしてゐるところの(一)中國人の覺國共產黨の力がかなりよく伸びて油断もすきもならず爲めに首領の李立三の首には莫大なる懸賞がつけられてゐると云ふ形勢を示してゐるが左傾派は潛勢力の依然侮りがたいものがある。青年者流の間にも反國民黨として大分その方の一味の黨で隠に脈絡をとつてゐるものが多くあるらしく見えてゐる。がしかし主席蔣介石の名によつて之に對し大分彈壓手段の取られてゐるが爲め共產の方はあまりひどく曝露せられてもゐないやうである。けれども色分けからすれば今日民國青年のうちにはかなり赤化氣分のものゐることは事實である。たゞ最後に然らば支那の天地に赤化がうまく育だち、成功し得るや否やの問題になつたらどうかと云ふと支那のそのものはその人民の終極の目的に於いて赤化を擁し之をモットーとすることは不可能なところもあるから結局は駄目なものであると思はれる。が唯途中の手段方法として又その看板として共產氣分めいたことを云ふところの者は随分あるであらうと考へらるゝのである。

たゞこゝに注意すべきことは中國青年にして近來やゝもすればその結果として在來の支那風俗古習を何もかも破壊し之があとがたもなく撲滅してしまへば眞の新興支那がそこに建設でもされるかの如き考えを有してゐるものゝ多いことである。實際その心のうちではさほどでないかも知れぬがさう云つた空氣の青年の間に漲つてゐることはよろしくない。爲めに眞面目に古習風俗の保存を考

風俗・趣味

支那風俗の現われ方

大支那大系

へてゐた手合までもがやゝもすればかゝる風潮に囚はれんとするの傾向が見え始むるのである。しかしどこ迄も中國青年が在來の風俗を一朝にして蹴飛ばしてしまふと云ふことは慎しむべきであつて、さり云ふことはしないでもむしろ支那民族の背景の力として古來の風俗は風俗として之を存しておくのが必要であることを力説しておきたいのである。徒らに愛國運動の名にかぶれて本當の民國の爲めに餘韻のあり又ゆとりのある風懷を培つてゐた美風をばぶち毀さうとすることを考へるに至つては中華民國の爲めに衷心惜しまざるを得ないのである。この點は返すくも特に中國青年に反省を求めたいと思ふのである。

九 支那文化の底力

支那の風俗は上にも云ふ如く支那文化の底力を與へてゐるものであるから之を一朝一夕に亡くしてしまふやうな風に考へることは慎しむべきことである。今日ではたとひその支那料理を探つて考へて見ても又支那服をとつて考へて見たところでこれ等は既に恐ろしい底力を有して世界に響きを與へてゐるのである。

風俗・趣味



江蘇省蘇州のおかみさん路傍の獅子彫刻に見てくれ風情

ひろがり世界の料理となつたと云つてもよろしいのである。單なる支那一國の料理ではないのである。こゝにたしかに支那料理の世界を壓してゐる氣概とその氣持がよく見られるのである。更に又支那服にしたところで、これには洋服よりもたしかに優れた典麗閑雅なところがある。支那服がこれ迄の美點を集め大成して今日のものにまでなつたことに就いては支那人自身の十分に認めて居るところである。が今その料理に就いて考へて見るに既にこれも從來の料理法なり或は又その材料のことなり或は又その料理と不老長壽法との關係のことなり又料理そのものを媒介として

支那風俗の現はれ方

大支那系

時に世界の人々を引き付くる文の特徴と長所とを有してゐるものと云へる。

支那のことはかく食ふことと云はず着ることと云はずその風俗上に現はれた事柄は大抵皆これ迄幾千年となく練りに練られて來てゐるものである。それでゐるから今如何なることをこゝに取り出して考へて見てもそれによつて支那民族の強味底力を物語つてゐないものはないと云へる。たしかにその力を伏在せしめてゐるものと云へる。中にも文化的にその支那社會を感壓してゐる所の文字の如きものを見てもこれは支那文化を保持する最も底力あるものとして數へることが出来るのである。而かもその文字を用ひて文華燦然たる花やかな美風を演出し又その爲めに榮えた舞臺と云ふものがどれ位出來たことか判らぬのである。人は或は云ふ。支那は文字の爲めに中毒にかゝり、文字の爲めに國家は誤られ、文字の爲めに國家の進歩が中絶してしまつたとまで唱へるものもある位である。けれども物は考へやうである。否支那が今日まであれだけの文學とあれだけの制度とを發達せしめ所謂文質彬彬として閃めき鳴つてゐる支那文化と云ふものを生み出すに至つたに就いては文字がどれ文麗はしい光彩を添へてくれたことか判らないのである。

支那では又文字が毎戸その門扉にその書齋に又應接間にその他あらゆる壁間に對聯として又扁額として掲げられ或は又その城内の大階に又里間の牌樓にと到るところにこれが墨蹟の鮮やかなるものを見

風俗・趣味

ない處はない。その美風の仰ぎ見らるゝところは今も尙古に變らないのである。がしかしかうした支那文化の底力の隠然文字美と云ふ底力のあるものが流れてゐると云ふことは争はれぬ事實である。ひとりこの文字に限らず古代支那風俗の推移して行つてゐる奥底には文雅掬すべき大きな氣分が流れてゐる。それは支那民族の探つて以つて自ら誇りとなしてゐる所の支那文化の源泉が即ちこれであると思ふことが出来るのである。されば今日吾人がその奥底の深い支那文化の迹を見て行くことは面白いことである。又頗る有意義のことであると云へる。又その風俗資料の取扱ひかた次第ではいかやうにと之を導いて行くことも出来るのである。必ずしも吾人はこゝにひとり文字と云つたやうな高尚閑雅のもの計りをつかまへて云ふのではなく或は船頭苦力の仲間に見る所の風習にしたところである。そこには又それ獨特の見るべき美點が存してゐるのである。それが又そうした下層社會の日常生活の上一種のゆとりある風味を興へてゐるやうに見えるのである。そこに成ると決して社會の上下を問はず又その風俗の新舊如何を問はず一様に興味深く感ずる所のものがあつたのである。かう云ふ見方からすれば支那文化でも研究しようとするものは勿論又支那そのものの社會の實相をまのあたり視察し之を實感して行かうとするものにして支那人と直接接觸してそしてその間に見る風俗をつかまへ之が觀察を怠らないやうにすることが一等手取り速い方法ではないかと考へる

支那風俗の現はれ方

大支那系

のである。たゞ之にはかなり永年に亘る持續的態度が要るわけである。決してその發作的の思ひ付きなどから之を取扱ふやうでは物になるわけがないのである。

十日支風俗の相違

日本の風俗年中行事で支那大陸に目星をつけその源を探つて見ると云ふと大抵のことはあちらに聯絡がつきその緒の得らるるゝものが多いのである。古の屈原の傳統から來てゐる五月の端午節にしても名月を賞する仲秋節にしても或は又道祖神を祭れる古習にしてもその他禊祓の古例にしてもすべて數へ來たらば數へ切れぬ位たくさんさんの挿語があるのである。その日本に在りて支那と同じ風俗の見出さるゝものは大體彼の地より我れに傳來してゐるものが多い。古來いつの頃にか大陸から打寄せた浪によつて我が國へ傳へられたと云ふに過ぎぬのである。單に日本人の日常生活に因んだ方面のみから見て來ても彼我の間にはその同一又は類似の風俗習慣と見らるゝものが甚だ多く例へば日本人の今日危坐する風習に就いて考へて見てもこは支那唐代の壁畫あたりに照して見ると當時既にさながら日本の現代と全然同一の姿勢に坐してゐた様子をまの當り見ることが出来るのである。これなどは日本人が昔し支那からそれを學んだと云ふよりは双方で偶然一致した坐りかたを

風俗・趣味



支那風俗の現はれ方

夏季の海上租界に見る路傍の食物の賣り

してゐたと見るべきものかも知れぬがしかし日本の古代衣服の様式などは殆んど正式の官服と云つたものになると大陸傳來のものばかりと云つてもよろしいのであるから何はともあれその風俗上彼我の間に聯絡のあつたことは争へないのである。ところが近代になつてからの彼我のそれを考へて見るとお隣同士の間柄であるにも拘はらずその風俗習慣の相違せるには驚く程のものがあるのである。卑近なところで云つて見てもその食事はどうであるか、支那では世人も知る如くその料理の沸煮されて熱いものをそのまますぐその場で殆んどさまさないで取つてゐるに反し日本のはどちらかと云ふと冷却させる事が平氣であり又さめたものの方が多く、従つて日本人にはつめたいところの生水や生物が平氣で取られてゐるのである。支那人は之に反し熱湯

大支那系

(開水) 又は温熱甚だしいものでなくては大体とらぬを原則としてゐる。その卓上四冷盆などに見る小茶には例外的なものもあるにはあれどそのことはこゝに云はず。殊に支那人の目には日本人の生まの刺身などを料理の第一に考へてゐる如きは最も不思議となしてゐるのである。又日本人の目には同じ食卓を圍んで支那の人々が自分の嘗めた箸で以て客に摘んで採つてくれるのなども甚だ不思議に見えてゐる。わけてもそのやり方が殷勤丁寧なる禮法であると云ふに至つては日本人は最も意外としてゐる所である。その外贈答の禮の場合のことであるが支那では客に茗茶を贈るなどは最も雅趣に富んだ風流な禮として考へらるゝ位であるにも拘はらず日本では人に茶を贈るなど全く喪中忌明けの贈品でもあるかと云つた風にとられて相手に縁起悪く不快の念を起させるのである。或は尙もつと細かい事を云ふと支那からの土産物として人に螢手の茶碗の焼物十個ばかり贈りたりとせんか。若しその茶碗の中に蓮花の染付けでもしてあらうものなら逆に叱られることがあるのである。と云ふのは法會を營むときでなくては蓮花模様のものなんか日本人は使はないと考へられてゐるからである。支那ではいかに蓮花のついてゐようと平氣であるがつまらぬことを日本ではかつぐ者である。しかし支那でも言葉の方には妙なことがある。最近出た新渡戸稻造博士の「東西相觸れて」の書名のことであるがこれは支那では俗語でトドンシ「東西」とはよく新郎新婦の婚禮

風俗・趣味

後などの話に出る言葉であつて品物と云へる義である。殊に甚だ穩かでない言葉を意味したことになるのであるから風俗上面白くない意味に當然とられる恐れがあるのである。まさかその邊のことまでをニトベ博士には御心配あらせられたのでもあるまいと察せらるゝが心すべきは支那語の通俗の猥談がかつた言葉であるが何とも厄介極まることなのである。かくて日本ではどうもないことが支那では却つて青年者流の間に變な意味にとられることになるのである。勿論その内容を見れば發賣禁止本なんかでないことは云ふまでもないのであるがかう云つたことが偶々書名や人名などの上に見出さるゝのである。言葉とか風俗とかの上には兩國の間にはかうした思ひもよらぬ間違ひやら行ちがひやらを生ずることがあるのであるから注意せんければならぬことである。しかしこゝにはどこ迄も風俗研究踏査と云ふことが一般の支那を了解せしめる捷徑であり又支那社會の内容を知らしむる上にせひとも理解させておかなくてはならぬことであるからこゝにそのことを述べて特に附言しておく次第である。

三支那の家庭生活

日本の家庭生活で萬事こまかく仕組まれてゐる現状に慣れてゐる者が支那に遊び支那の家庭生活の實地を見て來るときは少なからず驚かざるゝことがあるのである。常識の上から云つても日本人の最も普通に考へて居る衛生上の問題などが支那の家庭へ這入つて見ると、存外呑氣であり、主婦は固より家庭全體に殆んどその衛生に關した考へのないもの多しのに今更の如く感ずる。これは日本人が日本人本位に見てゐるのであつて支那の方の常識からすれば矢張り支那流の衛生がそこに別にあつて古來おのづから、その習慣によつて今日に來てゐるものであると云つた事情も理解されて來るのである。

支那と日本とはその家庭生活のうちで衛生に關する方面のみから考へて見ても、食べ物料理のとそれから廁ばかりの事だけでも、よく考へて見れば見るほど双方にかなり相違してゐることが多い。その衛生の問題になると熱烈に日本は支那のことを信用せず、むやみにくさして悪くいほうとする傾きがある。之に就いてはこゝに大いに述べておきたいことがある。それと又支那の家庭生活

ではその日常の家庭のうちに、殆んど日本人の氣のつかぬことで美點として數ふべき簡易生活のよく行届いて行はれてゐることがある。これは日本昨今の實際の傾向に照らして參考となり又大いに必要なことである。それから支那人の家庭生活のうちにはその如何にも毎日のことがつましくて物に無駄を作らずどこまでも細かくよく仕末しようとするあたまのよく發達してゐること、これらの數點に就いてこゝに大體を紹介して見よう。

十一 支那家庭の衛生思想

支那の家庭ではよく日本人も氣のついてゐるやうに日本と様子が變はり、その炊事場などを覗いて見ても實際家の男がやつてゐる。その御掃除のときに用ひる雑巾を洗ふ手桶やバケツなどで以つて米をといだり野菜を洗つたりしてゐるのである。さういつたことは平氣でやる。それも日本のやうに女子が炊事をやるのであれば細かい所に氣も附く事であらうが支那の習慣として女の方は一切料理の方に關係をしない。一切口をも出さないのである。男まかせでやるのであるから、ボーイだちと司厨だちとかが然るべくやつてゐるに過ぎぬ。そして買ひ出しから炊事からその方面のことにかけてはその一切をやつてゐる。されば人にもよるであらうが至つて大まかであつて平氣に物を切

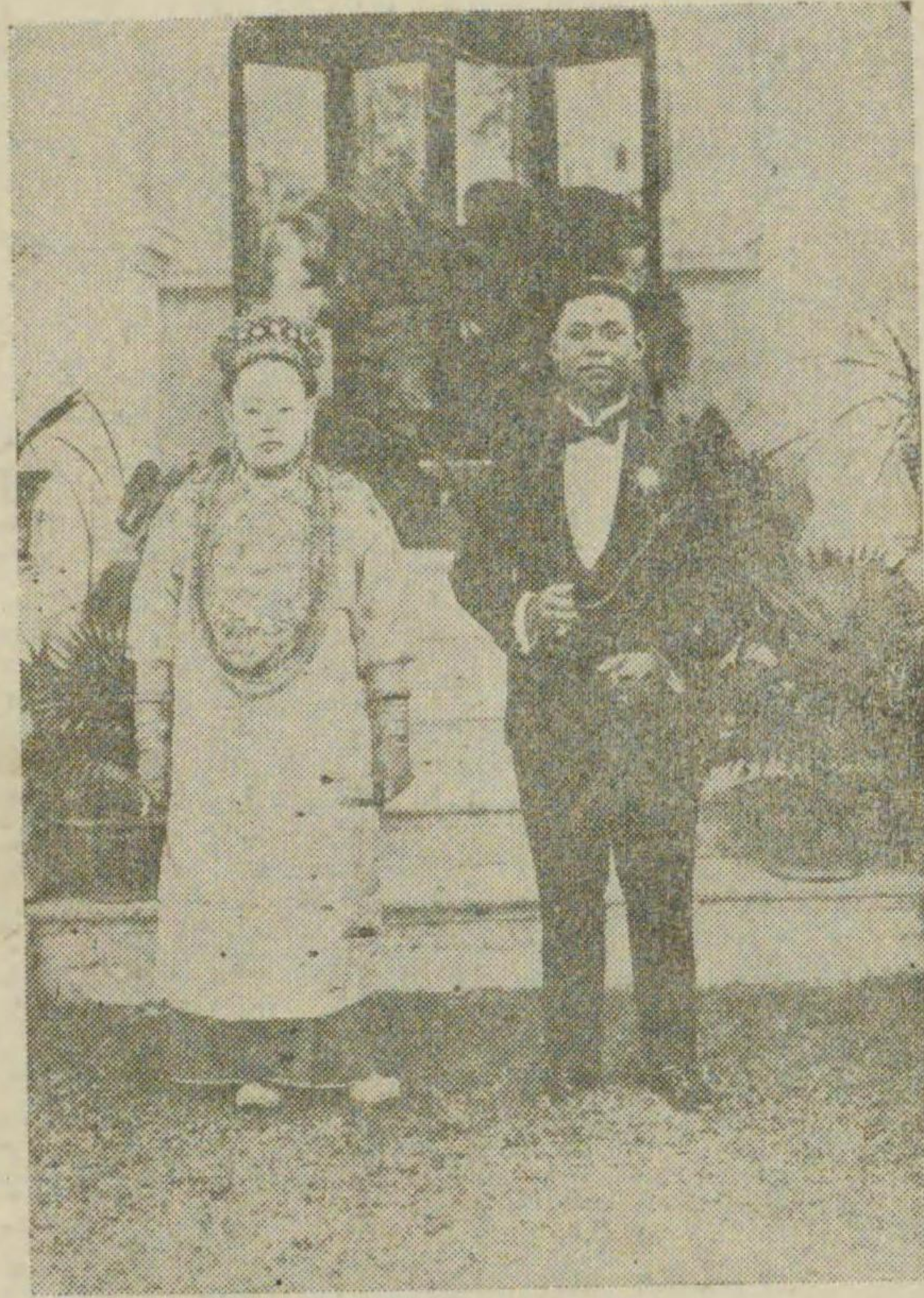
大支那系

りもりしてゐるのである。

支那は田舎に行つて見ると運河や小川の石段に出かけてそこに腰をおろし箆に入れた米を水邊で
といでゐるものがゐる。さうかと思ふとすぐそのそばで厠のマードン馬桶を明けて中をささらで以
つてゴシゴシと洗ひ清めてゐるやうな小景はいつも見られる。そのとき黄色いのが箆に這入つて來
さへしなければ構ひはしないといつた實に悟つた氣分である。又それを何とも思はず平氣でそのそ
ばの水を小桶に汲みとり天秤棒に力を入れて擔いで行つてゐる手合ひなどもさらに見受ける。大抵
の水郷には井戸がない。必ずしも別に井戸の設備が田舎にないといふわけでもないが、しかし先づ
かうした運河に來て煮焚きものを洗つたり飲料水に汲んで行くことなどは江南地方としては決し
て珍らしい方ではない。この間の消息が判つてゐなくては支那人の日常生活も理解されたとはい
へぬ。若しや支那の船頭たちと一緒にでも田舎の水郷を旅行しようといふときは必ずやその船板を
洗ふときの雑巾で以て食事用のテーブルが拭はるゝのを見て歩くところと食卓を拭ふものくらゐ
は區別をしておいたらよさうなものだらうといふのは日本人の潔癖性から來た考へであると評
せらるゝ。しかし日本の蒟蒻だつてあの通りでその製造中の有様を見るときは職工が足で以つてべ
ちやべちや踏んでねつてゐるではないか。それを見ないでゐるのが綺麗なのである。又手ばなをか

風俗・趣味

みながら菓子を作つてゐるやうな菓子師が又どれ位ゐるか判らぬのである。
固より支那では實地にあのひろい水郷連河の江上あたりを行つて見るとさうその不潔にも見えな
いのである。その水の量の十分にたくさんある處であるから毒になることもないだらうとこのことが



馬來彼南華僑の名家李氏の新郎新婦 (歳二十二)

を盛にたくさん用ひてゐる。又蠅がたくさんゐて砂糖製の白菓子の黒く見ゆるほどにたかつてゐる
所は特に毎年夏になると見る光景であるが一向平氣なものである。そこには十分に之に抵抗する丈

支那の家庭生活

大支那系

の衛生法の行はれてゐるものであらうとのことを今更の如く感じさせらるゝのである。
又支那人はあの通りよく熱茶を飲むことを好むのである。ホウツアー喝茶と稱しいくらでも茶碗に湯がささるるのである。盛に呑んで盛に新陳代謝をさせてゐる。それが十分その土地の衛生になつたやうに出来てゐる。そこへさしてあの通り精力剤に富んだ支那料理を旦夕とつてゐるのであるから元氣のつくことは一方でない。殊に老人には又老人向きの精力増進のよい調理法なるものが發達してゐるのである。

かやうなわけであるから始めその飲料水がどんな處から汲みとつて來られたものであつても問題でなくなる。支那の家庭では水甕水桶をよく見るのであるがこれ亦大ざつばなもので碌に蓋もされて居らずよい加減のものである。その杓にしても木を窪くくつた大碗様のものに短かい柄のついた太いのがその中に浮かせてある。水甕に蓋でもしてあるのがあつたらそれは珍らしい感心な方である。

支那の人はしかし食事でもとるときには大抵必ず手を洗ふ習慣になつてゐる。この點は日本人よりもよく考へられてゐる。しかし支那人はその廁に行つても洗つて來ない。それ故それを溜めておいて一時に食前になつて洗ふわけになるのであるとも云へる。日本人のやうに一々そのW.C.から出て來る度に手を洗はなくしてはならぬことにすると第一田舎などではそのはばかりのそばに手洗の水の用意がない。又北支那などでは水が少ないので不便を感じる。そればかりでなく又支那人からして次のやうなことを聞かれることさへあるのである。

「日本のかたは必ずこの度毎に手を洗つてゐらるゝがあれは一體手についてゐるから洗ふのですか……」



北支那の都會に見る中流家庭の兄弟、子供に油條を口にする

「手についてゐなければ洗ふことは要らぬぢやありませんか……」
と來る。風俗習慣心持ちを異にしてゐる支那人の人々からすればかかる質問の出るのは當然のことである、それに對して若し支那人の人々の

心にわかるやうに云ふとすれば

「日本人はあれはまぢなひのお被ひとして洗つてゐるわけである」

「とにかく洗つて出て來なくては人の爲めでなく自分に氣がゝりになつてたまらぬのである。」

風俗・趣味

大支那大系

「そこになると神經質に出来てゐる日本人は呑ん氣をきめ込んでゐるわけに參らぬのです。」云云。と云ふのである。

又とかくすると支那の人々の中にはかう云つた呑ん氣なものがある。近處のうちから失敬して取つて來たものを平氣で自分の居間の棚の上なんかに不用意にもおいておく。別段かくして之をしまつておく程の心もはたらかなないらしい。取られた方の先生は又遊びに來てそしてその品物の事に就いては挨拶をすることがなく無雜作に一寸失敬して取り返しだまつて之をポケットにでも入れたまま歸つて行く。それでよろしいのである。誠にその邊の事になると禪味があると云つてもよいくらいあつさりしたものである。されば飲料水がどこから汲み取つて來たものであらうが、又それで煮いた飯が鹽鹹く味がついてゐようが、存外、構ふ處はないのである。頓着しないと云つた氣持ちであるのである。實にあつさりしてゐて少しも物にこだはるところがない。北支那の田舎で家庭にはばかりの設けなく豚がその代りをつとめてくれてゐる珍談の如きはだれでも支那歸りの客の自慢話として試みる處であるが、これ亦たしかにその地方の自然の理法にかなつたやり方で、その豚犬に片付けしめてゐるとは考へたものである。而かもその豚は大牢の御馳走として三千年の昔から重んぜられてゐるのであるからよほど面白い。しかし支那を笑つてはいけぬ。日本でも今日そのは

風俗・趣味

かりが一週間も二週間も百姓のとり來られない事があつたりして閉口させらるゝことがある。支那の田舎ではかく豚が片付け即座に始末をしてくれるし、又南方にはマードン馬桶なる桶が設けられてあつて毎日毎朝必ずどんな事があつても洗ひ清められ、そしておまけに香水の如き芳香までも入れられてゐるのである。さればどのくらゐ支那の方が衛生的であることか判らぬと云ひ得るのである。

十二 支那家庭の簡易生活

支那の家庭を訪ねて日本人の異様に感ずる點はそのいかにも簡單なる點である。そのどちらのうちを訪問して見てもわかるのであるが、家の内部がガランとしてゐて室内と云ふ室内殆んど道具は少なく、天井は高く壁は廣く、そして卓と椅子と茶碗に臺所、先づこれくらゐのものしか見當らないのである。いかにも化け物屋敷にでも訪ねて來たかと思ふくらゐ家具の少ないことに氣がつく。中流以上のうちになると、まさかさう計りとも云へぬが、しかしそれにしても概して道具は少ない方である。日本人の家庭のやうに餅を舂く杵に臼から鮎を作る大盤盆の如きものに至るまでを用意してゐると云つたのは支那から見ると誠に不可解のことである。料理屋か餅屋に備へてあれば

たくさんであるやうなものまでうちに備へてゐるのである。それ故に日本のうちには借家建てのうちにしてもちやんと之に物置がついてゐる。ガラクタ入れの物置場である。その上に各室は又押入れなるものがついてゐる。總體で押入れの数も馬鹿にたくさんあるうちがある。而かも尙借家人の言ひ草を聞いてゐると家は氣に入つたが押入れの数が少ないので氣に入らぬ。押入れの不備を理由に中止せんとするものさへもある。かくしてガラクタをどこ迄も持つて轉宅をして廻つてゐるのである。甚だしいのになると、御苦勞にも全く支那三界にまで來てゐる手合でその奥地に行くにもその疊を必ず携帯して行かなくては住めないといふ云つて之を運んでゐるものがある。

支那の人々はそこになると永年簡易生活に慣れてゐるので、どうかすると箸や茶碗さへも持たずそれらは皆マーケットの食堂に朝早く出かけて行けばあちらに用意されてゐるのを承知してゐるうちもある。又近處の路次へ出かるとそこにはお粥からおつゆものから何から何まで食器もすつかり揃つて全く世話なく安くたべさせてくれる。一つでも物は少なく減らしてそして唯氣らくに又手軽く生活をしようと云ふのが根本精神となつてゐる。誠によろしい事である。日本人とちがひ支那の人々はそこになると徹底してゐる。と云ふのは又半面から見るとさう徹底せざるを得ない丈の理由があるのであると解せられるのである。曰く、

一、支那は國柄があつた通りで少しも安心がならぬ。いつ何時家宅に侵入せられ掠奪の悲運に遭ふかも知れぬ、そしてその覺悟をいつも自分で怠るわけにまゐらぬのである。

二、家具の殖やすかねがあるくらゐならそのかねは秘藏しておきいざと云ふとき持ち出し易いものにしておく、家具はそれから云ふと厄介なもので大きく不便である。

三、家はいくらガランとしてゐてもよろしい。なるだけ物持ちでないやうに見せかけておくことが何かにつけて大切である。ブラック・リストに載せらるゝ如きことがあつては一大事であるかやうな事情の下に氣の毒にも支那の良民たちは出来るだけ簡瞭にして手軽く毎日を暮らさうと考へてゐる。實際又支那家庭を訪ねて見るにかなり土豪と云はるゝものうちでも相當殺風景なうちが多いのである。應接間ばかりでなく奥に入つてその主人の室や寢臺のおかれた室に通つて見てもさうである。中流以上の細君の寢室にも時折り通されて行くこともあるが誠にあつさりしたものである。そしてその細君と語り合つて見る。試みに

「お召しものなんかはどこに……」
と打開け話などして見ても唯細君は室の一隅を指して
「あの紅い皮箱（靴）三個に皆這入つてゐるのです」

「いざと云ふときはあれだけ持出せばよろしいのです」云々
と云つてゐたのであつた。丸で泥棒に襲撃せらるゝ場合のことを豫想に入れて生活をしてゐるやうな風にも考へられ氣の毒に思はれたのであつた。家庭でも用心のよいうちあたりでは地下に秘密部屋の出来てゐるものがあつたり、又穴倉式によく出来てゐるものもあつたりして、そこに家寶を隠してゐるのである。秘藏と云ふよりは死藏になつてしまふわけであるが、これ亦止むを得ないのである。

支那はその國柄から云へばどうしてもシンプル・ライフをとらざるを得ないやうに出来てゐる。これは人生を送る上にもよろしい事である。無暗に物欲を恣にしてガラクタを澤山あつめて見たとてよい加減のものである。集めてゐる最中では夢中であるからよろしいが、あとになつて後悔する者が多い。その特に趣味を有し深く之を集めて愛玩でもしようと思ふものは別である。しかしそれにしても際限のあつたものである。支那ではともかくもあまり家具その他の代物を殖やす事は考へるものであると云つた考へになつてゐる。又事實悟つて見るとその方がよろしい。一々死後持つて行けるものではないし、その邊に心を配つて見ると社會的にあまり集め藏することも考へものと云ふことになる。支那の一般社會にかく家具の少ないのを好む習慣のあるところへその反對に玉である

とか寶石であるとか云ふ物がかなり集められその方面にあたまが進んでゐるのを見る。これはどうしたのかと思はるゝであらう。これはいざと云ふ時の事を考へてなるたけその多く身の廻りにつけていつ何時でも持つて行かれる様なものにしておきたいと考へられてゐるらしく解せらるゝのである。

一體家庭のうちに道具の少ないくらゐ間の抜けたものはないのであるが、そのやうに考へるのは日本人の考へかたである。従つて物がなければ殺風景にも見える。けれどもその物のない處に氣樂なところが又その最少限度のもので何でも間に合はせると云ふことも起つて來るのである。一つのバケツが雑巾桶にもなれば又米を洗ふ桶にもなると云ふのもその邊の事情が手傳つてゐることと察せらるゝ。實際支那家庭の臺所司厨部屋あたりに行つて見るとあれでよくもあれだけの複雑な料理が出来るものかと不思議に思はれてならぬのである。それくらゐ總て簡易に出来てゐるのである。空竈と鍋に又庖丁と藥味の數點があると云ふ位で本當にいくら物もない。日本人は日本のこま／＼した物のみ多く陳べてゐる臺所を見てゐるのでそのあたまで以つて支那の臺所を覗くときには異様の感に打たれる。しかし少なからず参考になることが多いやうに思はれる。日本に來てゐる多數の支那料理人の臺所を見ても大體は判るのであるが、純支那式にやつてゐるところの支那の

大支那大系

田舎に行つて見ると云ふと、その驚く可く簡単に出来てゐる様子が判るのである。

日本では臺所でもどこでもやゝもすると細かく使ひわけの出来るやうにと複雑に作り物を多く殖やすことばかりが進歩でもあるやうに考へられてゐる傾きがある。されば

一、皿にしても大皿、中皿、小皿とあり、井にても大、中、小があり、庖丁にしても大、中、小何から何まで區別をむやみに細かくして品數を殖やしてゐるのである。

二、又新しいものを用ひることに急に於て舊式の古いものは之を廢棄して使はないと云ふ傾きがたしかにある。そして何でもモダンとか文化式で以つて行かうとするのである。

これも進歩的で結構なことには相違あるまい。がしかし支那流の行きかたで物を少しでも減して行くと云ふ簡単な行きかたで行くことは時節柄大切なことであると思はれる。部屋の簡單なるが如くに又その家具や炊事道具の方も何もかも少くなくへらして行く運動を試みて見たらよからうと考へる。少なくとも今日の日本の時勢は將にそこに來てゐることを裏書きしてゐるのではないであらうかと思はるのである。

十三 家庭生活に戒めらるゝ無駄

家庭生活に日常考へのない無駄をしてゐることくらゐ恐ろしい惡結果を生み出すことはない。殊に家庭内であるこまごました目立ぬもので、節約をしようとするれば出来るものを、それを無關心でゐるくらゐ勿體ないことはない。無駄は之に心を配らなくてはならぬのである。支那の人々はその點に天才的のあたまがあり機敏に生きてゐるが、それは永年の習慣で今日迄養はれて來たものと云へるのである。

風俗・趣味

廢物利用の點から云ふと支那くらゐよく築てゐるところはない。殊に家庭内にありては、一家のもの全體が心からその考へになつてゐるので、萬事よく注意が行渡つてゐる。例へばその密柑をたべるにしても、その皮を棄てるものがない。まとめて取つておき、之を乾してチンピ（陳皮）となし、藥用に供せられてゐる。漢方の方では陳皮は胃の藥として良劑に見立てられ、支那人生活には日常大切なもの一つとなつてゐる。支那では日本人のやうに態々別に食後にタカチアスターゼやピオヘルミンをたかいかねを出して求めなくとも、その密柑の皮のあまりもので十分である。それを乾燥させたものを打碎き、又藥研で以つて引いて置けばよろしいのである。日本でも昔はかうした漢方風の事を家庭でもやつてゐたうちもあるにはあつたが、近來はそのやうな古風なことをするのは面倒だと云ふので、今では之に考へつくものさへなくなり、密柑はたべたら皮は塵芥箱に

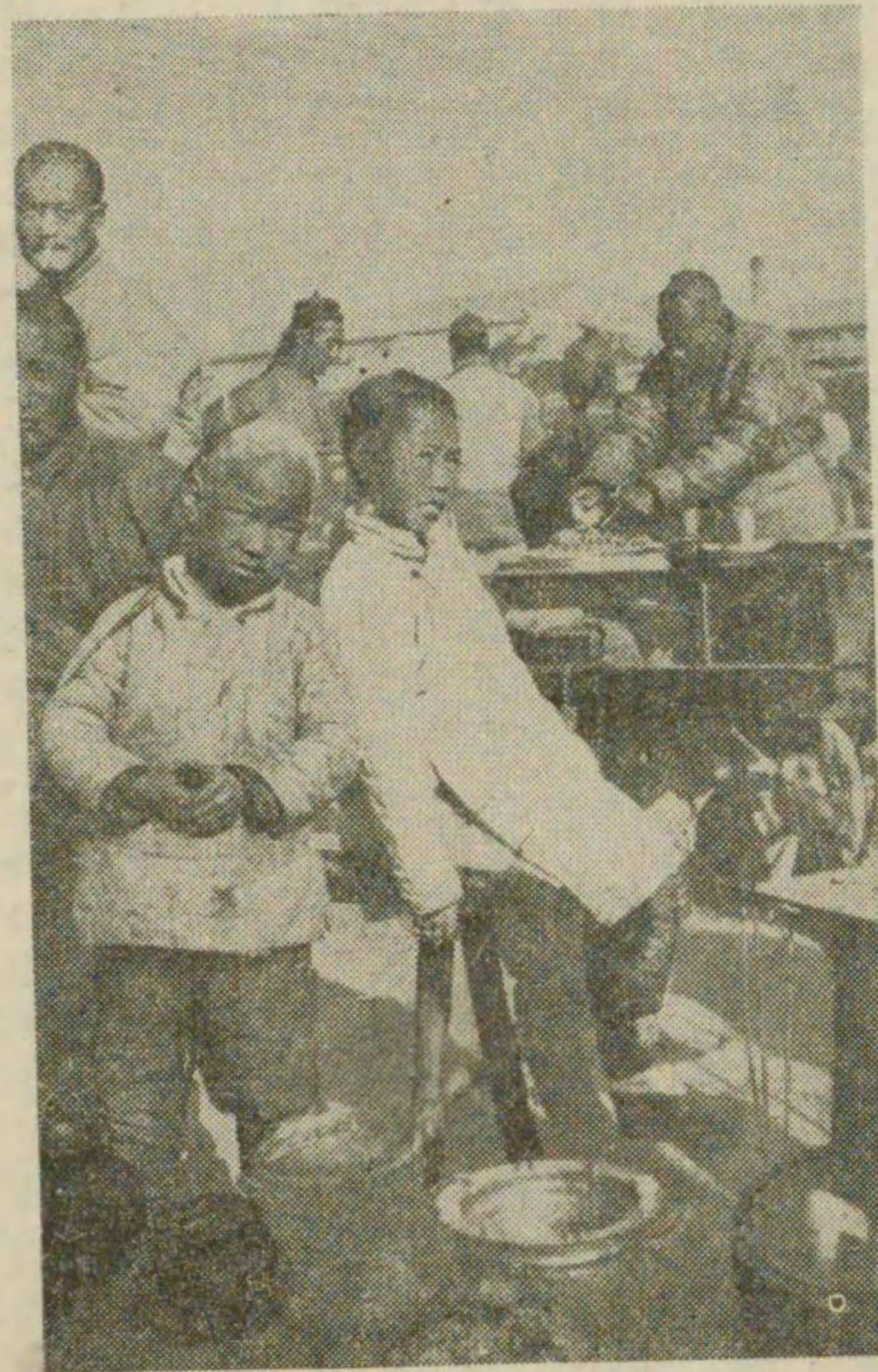
系大那支大

打棄てるにきまつてしまつた。女學校あたりでも學生に教へるにかくの如き點にまで行届いて教へてゐると云ふ話は聞いたことがない。支那はこの田舎でも、都城でも、路傍に密柑の皮の棄てられたのを見たことがないが、この一事を以て見てもいかにその家庭生活のよくつましく考へられてゐるか察せらるゝである。

尙支那の料理の時に出来るコワヅル瓜子兒即ち南瓜のたねや、西瓜のたねのことであるが、このたねも又然らば廢物利用の方かと云ふと、これは廢物どころか態々その目的で始めから畑で作りあげられる。そのたねを用ひるの目的で以つてよく十分に實らせる。これは瓜子兒を専門に作るのであるから必ずしも廢物の方と云つてしまふわけにも行かぬが、しかし家庭では之を取つておいてそれに使つてゐるうちもある。又家庭や料理屋の方でもその内幕を見てゐると客のあまりませた皿の餘りもの大井のつゆものと云つたものは、之を棄てるのは勿體ないとおつてすぐ之を炊事場の方で大鍋の中に打込んでうつしてゐる。かゝる事をするのはいかにケチに見ゆるのであるが、それは勿體ないとして交ぜるのである。話はちがふがよく支那宿にとまつてゐると、前夜飲んだ支那酒のあまりをばたとひ少量であつても、翌朝必ずちやんと自分の卓上にもつて来て、酒壺のまゝおくことがあるのである。自分は「今朝は酒を命じやしなかつたのだ」と云ふと番頭は云ふ。「いやこれは昨晩閣下がかねを拂はれて買ひ求めて来たあの酒のお餘りなんですよ」と云ふと正直なところを云つて来る。

かやうな風で、ともかくも物は一切無駄にせず、いかなるものでも細かく明かにする。インキの

味趣・俗風



北平城内細民の娛樂場に見る
下層社會の少年たち

空罐の如きも之を棄てないで、之に石油を注入し、口がねをつけてカンテラの代用にする處がある。或は又机上の文房具、墨、床などの彫刻物の上に持つて行つて穴明錢を四五個嵌め込み、面白い圖案に現はしてゐるものを見ることがあるが、これなども面白い。次第

に穴錢の珍らしくなつて来る時代であるからかう云つた處へ之を利用するものもよい考へである。又家庭では庭の通路歩道へ持つて行つて、燒物の割れたもの計り集めて来てよくモザイクの蘭や梅の鉢植の圖案、その他、山水などの色々のデザインを現はしたものを作る。これは全く割れ物ば

六〇
かりの破片を集めて来たものである。そのうちのものばかりでは勿論足りないもので、外所のうちからも集め取寄せて来たものであるであらうが、かくの如きは珍中の珍なるものである。路の中央を少しく盛り高くして風流なモザイクの道路を作ると云ふのはよいものである。これは半ば技術を要するものなること勿論なるが、いかに平素支那家庭の廢物利用を留意周到に考へてゐるかが之によつて察せらるゝのである。

又自分たちが支那の老紳士をその邸宅に訪ふと云ふやうなときその看門（門番）が奥へ取次ぎ自分の名刺を持つて行く。そのとき、奥に在宅のときはツァイチヤ「在家」と云つて氣持ちよく取次ぎをして呉れる。そしてやがて「よろしいからどうぞ」と云ふ返事があるのである。奥へ通されて主人の室に行つて見ると云ふと主人は立つて恭しく挨拶をする。そして云ふに「此の名刺は御返しいたします」

とちやんと丁寧に返してくれる。あまりこれ迄名刺の返されることに慣れてゐないものは變な意味に取るかも知れぬが、實際名刺と云ふものは唯ホンの取次ぎの間の方便に過ぎぬ。それと判ればあと名刺は不用で返すのが當然だと云ふ考へなのであらう。うちにおいておいても溜まるばかりであるから實を云ふと返してしまふ方が整理ができてよろしい。その場で片附いてしまふわけだとも考へられるのである。中には受取つた名刺を態々應接室の姿見の鏡面へ持つて行つて、ペタ、ペタ貼りつけ、それによつて自分の處へは斯く斯くの名流が見えたと云ふ事を人に見せると云ふ誇りの心から來訪客に宣傳せんとする目的に利用してゐるものもある。どちらにしても之れを無駄にしないやうにする處は日本人の考へ以上に進んだ處である。日本でもたまには主人から名刺を返してくれらる處もあると云ふことであるが、日本のやうな無駄をやることを誇りとしてゐる處では名刺の一枚くらゐは取り容れておいてもらふ方が何よりの幸せだと思ふ傾きがある。返へさるゝなんてこちらをケチくさく見てゐるのか知らないと氣を廻して來る。宿に泊したときの茶代のことと云ひ、何と云ひすべて成るだけ無駄をたくさん平氣でやれることが氣まへがよいと云つた風に考へられ、又賞せらるゝのが日本の現状なのである。

そこで支那家庭では又その家庭につとめてゐるボーイだちに就いてその身上を見てみるに、例へば月十元の給料をもらつてゐるものに向かひ、君はその毎月の貯金はどれ位してゐるかねと聞いて見る。すると、貯金は十元は必ずすると云ふのである。主人の方でたべさせてもらふのではなくして自分自身でたべることになつてゐる習慣の支那ではその給料としての十元はそのうちがいくら減じなくてはならぬ譯である。ところがその減らすどころか全額を残して之をそつくり溜めて行くと

大支那系

云ふのであるからその邊の心づかひのつましい事は察するに餘りがあるわけである。一パイ一パイにやつて汲々としてやつてゐる日本人の手合を考へて見るとさすがは支那ボーイである。そしてその溜めただけのものは將來どうするかと云ふと總べてこは十年後、又十五年後に自分で妻を買ふとき資金となすわけなのである。その目的に向かつて全力をこめてゐる。その目的の爲めには何事も犠牲にして我慢もして一生懸命専念するのである。そこに偉い力を現はして來るのである。

かやうな式にすべて主婦から家族、雇人に至るまでが全部擧つて物の無駄をしないやうにと心がけこまかく考へてゐると云ふことが支那の家庭生活の實際の處なのである。日本では口先きばかりの廢物利用や無駄の廢止はよく聞かざるゝが自分々々が思ひ切つて純な心から之が實行をやらうと云ふものが出ない。出たとしても少ない。人からとやかくと噂さるゝことを氣にしたり、いざと云ふ時になると勇氣が出なくなつたり氣が迷うたりして結局は何も出來ぬのである。そしてたゞ從來通りの無駄の多い生活をくり返して支出難を叫び之に思ひ悩んでゐると云ふのが日本の今日の實際のところと云つてもよろしいかと思ふ。

十四 家庭生活の内部

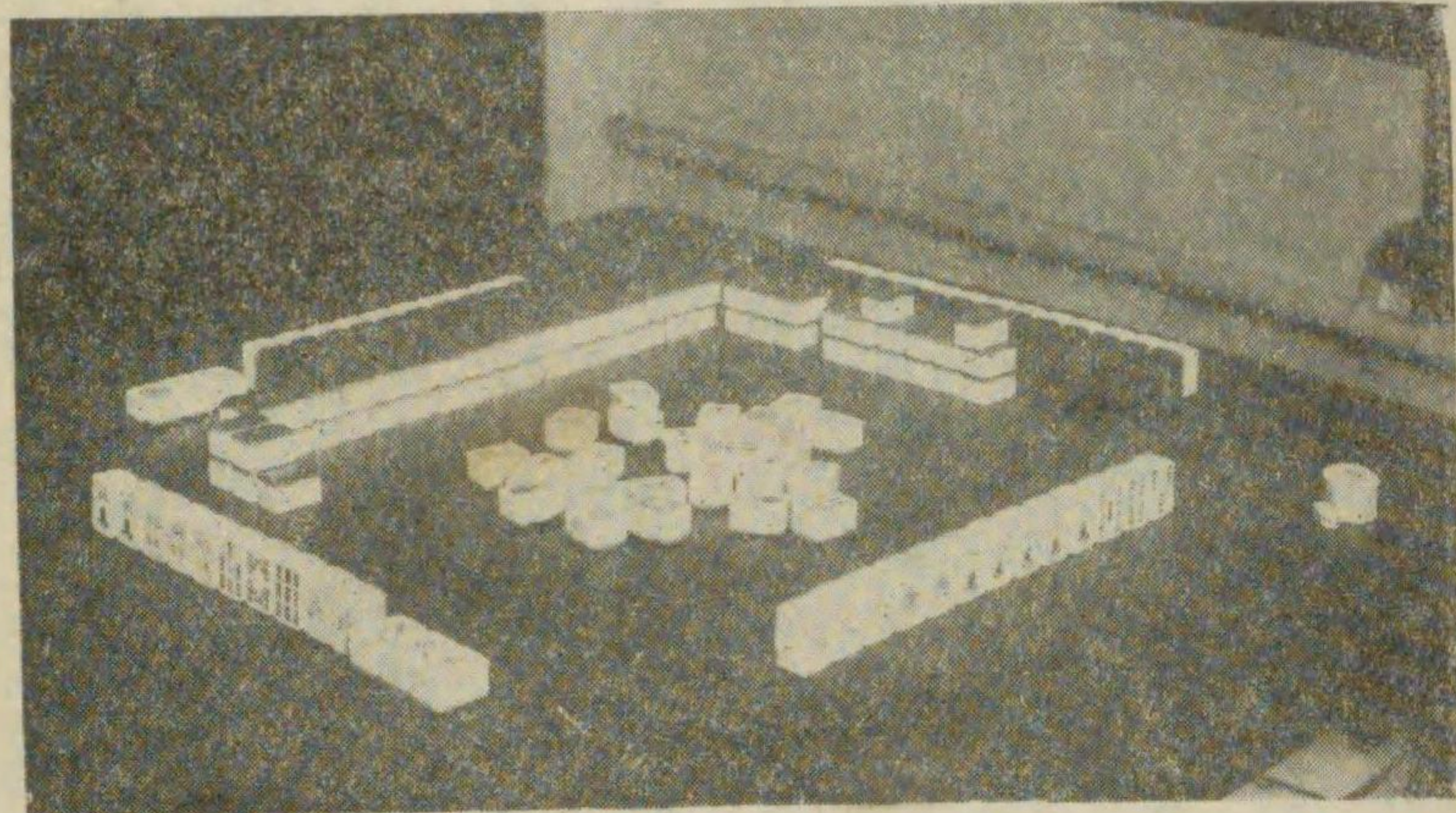
尙支那の家庭生活の内部について一言附け加へておきたい事がある。それは日本人のあたまで想像のつかぬところが尙支那の家庭には色々あることである。

先づ都會地に於ける支那の家庭であるとか又田舎でも相當な舊家で大きいうちであるとか云ふときは總體にその家庭の内部は外からは窺ひ知ることが出來ず、又之を知らせないやうに秘密に出來てゐるのである。と云ふのは

第一その家の構造からして周圍に高壁がありそして家室の窓は小さくて高く加ふるに家の戸締りと云ふものは頗る嚴重である。それに家の門は常に鎖ざされて開かれてゐない。特に主人の御歸りのときとか來客のあることの豫めわかつてゐるときですらも開け放ちにすることは決してないのである。

第二大家のうちになるとうちがひろく室や廊下がやゝこしくいきなりすぐそのうちに這入ることも許されない。外から這入

風俗・趣味



支那流行の麻雀の列方

つたものは面喰ふ。先づどのうちでも庭石のインビ影壁と云ふ衝立やうのものがあつて中が見通

支那の家庭生活

大支那系

されないやうに出来てゐるのである。これは住宅としては大事なことなのである。
第三それに内部の血族關係親族關係と云ふがかなり、又やゝこしくて判然としなないものがある。
ましてその間の子供の所屬系統などになると、あまりつき付けて根ほり葉ほり聞かれぬ事なども
ある。

かやうな事情からして大體判定せらるゝでもあらうが、支那の家庭は大きくなればなるほど内部
が判りにくいのである。そこへ持つて来ていくら息子が家を新たに持つたにしても日本のやうに之
が爲めに別に小さい借家をさがし求めて之に別居をさせると云ふ風に小家庭の分離を見ると云ふ策
がとられてゐない。どこまでも大家族主義で來てゐるものであるから一つの門内に住まつてゐる陳
なら陳、鄭なら鄭と云ふうちその家庭内と云ふ者は、餘程大任掛けなものとなるので、中には二
百人からのうちもある。家族主義もかくあまり大きくなるときは振はなくなるのであるが、これは又
支那の社會政策的にそこがうまく出来てゐるのである。その邊の問題は別に述べなくてはならぬこ
とになるのであるが、とにかく大家族主義の行き詰りは結局の處他のものの方へ中心が移つて行く
やうによく出来てゐる。つまり天下は廻り持ちと云ふことが支那はよく自然に出来て、昔からその
主義原則で出来てゐると云へるのである。

風俗・趣味

かくの如くして大都會や又田舎の舊家のうちの眞相が雲深くして、その邊の實狀のよく判らない
ものが多い。そこどころが面白い。ことに都會でも、田舎でもその商賣を營んでゐる方の大きな
問屋、行家のうちあたりになると云ふと、そこは又呑ん氣に又實に大まかに出来てゐる。家のうち
の秘密も何もありはしないで明け放して何とも考へられてゐない。實に開放的である。自由なもの
である。支那はかくしてそのあまりに矛盾した事の多いのに驚くくらゐのものであるが、こゝに支
那の大きい處が認めらるゝやうに思はれる。尤も大家の店の方も奥の臺所の方も又雜貨商ならば雜
貨のストツクのおかれてあるところもかなり奥の方に這入り込み、料理屋なら司厨部のあたりにし
ろ、どこにしろ、その奥へつかつか這入り込んで行つて見ても、誰も何とも云ふものがゐない。む
しろニコニコ顔で以つて愛嬌をふりまいてくれるくらゐのものである。若し趣味を以つて質問でも
しようものなら、直ぐ親切に答へてもくれるし、氣持ちよく相手もしてくるのである。そこに日
本人のやうに、「何か御用ですか」「御用のないかたならそとへ出て行つて下さい」
などと云ふやうな無愛想極まることは云はないのである。來たる者は拒まず去るものは追はず式で
迎へてくれるのであるから氣持ちがよろしいのである。家のうちがどう見られようが邪魔になる人
がゐるやうが何とも云はないところに大きい處が見出される。そこにはたしかに懐かしい處があると

大支那系

云へる。それであるからいかに排日はいにちのときや又五卅記念ごさつきねんの日などに自分共じぶんどもが支那町しなまちをあるいてゐても別にどうと云ふ事もなく、むしろ愉快ゆきわいに遊んで來ることが出来るわけである。それであるに之を唯ただむやみに日本人にほんじんや外人がいじんは恐れてばかりゐる。こちらに悪い心わるいこころのないものを向ふから害がいを加へることなどは先づないのである。そこに日本人にほんじんは自分自らの心持こころもちを以つて相手あひての心を察し疑心暗鬼ぎしんあんきの島國的とうこくてきの氣持きもちでゐるところがたしかにあると云へる。

自分たちはよく支那街しながいで道の迂回うきわいして大廻りおほまはをさせらるゝときは近路ちかみちをするために隨分老舗ずいぶんらうまのうちを表手おもてから裏口うらぐちへと失敬しつげいして通りぬけて來ることがあるがそれで一度も誰何たれなにせられたことはない通りぬけても別段べつだん之をわるい事こととは思つてゐない。先方せんぱうでも人が中なかを通り抜けたつて別に土が滅るわけでもないし、何とも思つてゐないらしい。とにかく双方共平氣さうほうともへいきでゐるのであるから、御互おたがひに世話せわはないのである。こゝに支那家庭しなかと云ふものゝうちにも大變氣樂たいへんきらくなところのあることを發見はつけんするのである。つまりこの間の心理しんりは通り抜ける人間にんげんは通り抜ける人間にんげん、自分は自分であるとして我れわれ關せず焉せんの態度たいどでゐらるゝとの風懷ふうわいが然らしめてゐるものと察さつせらるゝ。さう云つた呑氣おんきなところのあるのは今日こんにちなつかしい。いつでも唯、のほせてゐて神經質しんけいしつてきの人に誰何たれなにすることをのみ考へて少しも伸のび伸のびした氣持きもちのない人は氣きの毒どくなものである。支那しなの商人しやうじんはそこになると大いに話はなせ

風俗・趣味

と云ひ、そしてその這入はいつて來れば、自分共じぶんどもの間にわりこませ箸はしを出して共に御馳走ごちそうをつゝかせるのである。そればかりでなく時ときとしては街上がいじやうに卓たくを持ち出してやつてゐるうちさへも田舎いなかにてはよく見るのである。

この邊へんになると尤も開放かいほう的なものの一例れいになるのであるが、かゝる習慣しよくわんは決して支那しなの家庭生活かたいせいかつには珍めづらしくはない。甚だ矛盾むじゆんのやうではあるが、しかしこゝに支那しなの家庭生活かたいせいかつの半面はんめんが見えてゐて面白い。されば支那しなの家庭かたいも之これを研究けんきゆうして見ようと云ふには色々の場合ばあひに、色々の地方ちほうの事ことを併あはせ考へて見るやうにしないで本當ほんたうの事は判わかるものでないと思はれるのである。

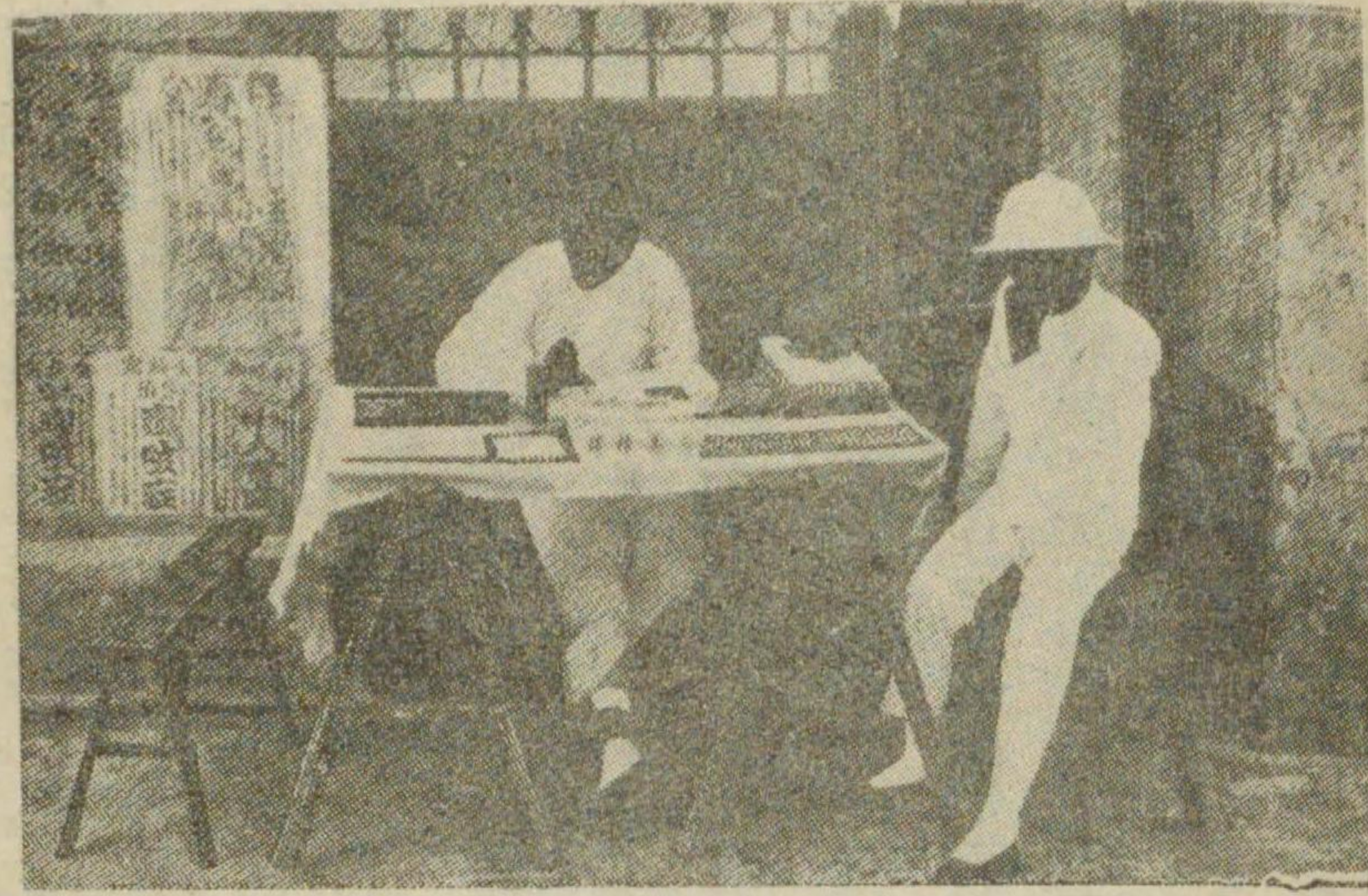
請來オナライ、請來オナライ

四 支那男子の風俗秘話

日本には支那の婦女子に關する特殊風俗のことは固より男子に關する方のことも殆んど知られてゐない。これは研究者が居ないと云ふわけではなく、たとひ研究はそれ／＼出來てゐてもその發表がとかく差控へられその爲め存外知られないでゐることゝ察せられる。西洋のこの滔々として發表せらるゝに反し東洋方面のことゝなると兎角暗から暗に葬むられてゐる傾向があり又卑近なことでもそれを知ることが罪惡でゝもあるかの如き囚はれた思想も手傳つてゐるのである。支那の婦女子に關することは面白いことも多々あるが際どい話になるので之を遠慮した方がましだと思はるゝ節もあり又話の性質上支那婦人のことは自分としても公にしにくい點もあるからここには單に男子の秘話に屬する方面のみにつき二三述べて見ることにする。

十五 支那の男子は腰に褲子を纏ふのみ

支那では昔から積鼻禪とか禪襠とか云ふ語のあるのでも知らるゝ如く古くは男子はフンドシを用ひてゐた。そしてそれには美しいものを用ひてゐたものと見えて紅禪、緋禪など云ふのも見えてゐる。無論その蔽禪のほろも見えてゐるがともかく男子の風俗にその下帯の習慣のあつたことは事實だと思はれる。然るに今日の支那の習俗はどうであるかと之を注意して見るに南支北支共に未だその禪をやつてゐる男子を見たことがないのである。固より事頗る秘密に屬し一々之を各地各人に就いて實際を突き止むることも徹底的には出來ない相談であるから大體吾人の注目し得たる範圍内に就いて云ふのであるが實際支那の人は日本人のやうに何かそこに或る引締めたものを纏うてゐなくては氣持が悪いと云つた如き感じはないらしく思はれる。日本人はもと南洋にその先祖のゐた元始時代からして一種のフンドシ



王文王命看板的下民衆の心を自由にするべし
ト笠師、上海城内所見

を纏うてゐたものゝ如く、今日の南洋人を見ても依然之を着けてゐるのである。ところが、支那大陸

支那男子の風俗秘話

大支那系

は別である。今日の支那人はそれを有してゐないのみならず、その必要をも感じてゐないやうである。西洋人は單なるワイシャツで包み済ましてゐることは云ふまでもない。同じ東洋に國をなす支那人が日本流であらうとはよく傳ふる話であるが決してさうでないのである。東洋では一帯腰を締めてかゝることは男子の事に當たつて緊張振りを示す語ともなつてゐる位に考へられてゐるも事實は支那人はそのだらつとした縮まりのない様子でゐるのである。そして男子は地下にクーヅ（裤子）と云つてズボンを着いてゐるのである。云ふまでもなく近來の青年學生連はズボン下メリヤスなどを用ひたるもあれど多くはいきなり裤子である。夏などは殊にそれである。

支那男子の兩脚に穿く裤子は大變ゆるく大きく仕立てられ、その上部腹の周圍を纏ふあたりは普通二人前の大いさを有してゐる。俗に別に一人美人を容るゝに足りるほどのゆとりを以て仕立てるが原則であると稱せらるゝが自分共の不斷用ひてゐるのも正にそれ位のゆとりを以つて作られてゐる。それから兩脚の股のところは殊に又大きくゆるやかに出來てゐて餘程下の方に行つて分れてゐる。だぶ／＼してゐて見た恰好は涼しらくはないが之を穿いてゐる當人の兩脚の工合は大層よろしい。夏はとりわけ涼しくて汗ばまない。よく支那人どもの裤子のゆるやかなのを穿いて歩ける後る姿を見ては何れかそこへ物を入れて歩いてゐるやうにも眺められるのである。が股を開けて歩

風俗・趣味

いてもそのだぶ／＼に出來てゐるのが洵に好都合に感ずるのである。その恰好など香ばしくなくともその上に紳士は必ずタコワール（大掛兒）又はパオツ（袍子）を着流がすのであるからすつかり隠れてしまふのである。

これは日本人が洋服のズボンを穿いてゐる感じに比して如何ばかり樂なことか判らぬ。殊にその下に色々のものを穿いて身を固めてゐるところの氣分に比べ支那の方はよほど呑ん氣に氣樂に出來てゐるのである。支那の裤子は之を穿くとき前方はたゞその違へ合せたときのみあまつた分を疊みかさね之を紐で締めるのであるが、その爲め前方から見た恰好はゆとりがありよく納まつてゐる姿に眺められる。ズボンでボタンどめにきちんとした姿とは異なりいかにも優美に見えるのである。又不便の點から云つて支那の方が不便であらうと云ふ者もあるが平生自分共は何等不便不自由を感じてゐない。一々ボタンを外す西洋のズボンの方がどれ位厄介なことか判らぬのである。

洋服の仕立てかたが脚や腰にびつたり食ひついたやうに出來てゐるのは一旦支那服の味を覽えたものにはどうしても窮屈でしかたがない。カラー・カフスと云はず胴衣と云はず何様再びワイシャツに手を通さうなど云ふ氣にならぬのである。脚のズボンに於いて殊に然りである。そして裤子は夏の涼しい地質は云ふまでもなく冬の眞綿の入れられたものなどは又非常に暖かく、底冷のする地方

大支那系

ではとりわけ歓迎せらるべきものと思ふのである。

十六 禪なきは衛生に叶へるか

衛生と云へば支那人ぐらゐる衛生のことをよく考へてゐる者はないにも拘らず世間からとかくの寛罪を蒙つてゐるから聊かこゝに辨じておきたいと思ふ。

支那では婦人あたりでも日に四五回も腰湯を使ふものがある。男子も熱湯を用ひよく全身を拭ひ又顔や頸、手は日に幾回拭ひ清むるか判らぬ位である。そして一週間一回位は澡堂と云つて風呂屋に出かけ徹底的によく磨り洗ひ落して歸るのである。その特に衛生と云ふことは力説しない。けれども古來衛生の道に叶つた方法を自得してゐることは驚く位である。支那江南の洗湯に行つて見ると三助に流しを取らせるに必ずその背を流した手拭以外に下の方を洗ふ手拭を別に要求する。かう云つたやうな几帳面な清潔法は日本でさへも見ないのである。古來永年の間に發達した支那の社會と云ふものは存外これで案するやうなものではないのである。

腰に猿又をまとひ又へこを纏ひツボン下をまとふと云ふ日本の習慣は支那の褲子一枚式なのに比しどれ位空氣のむれて悪いことか判らぬ。習慣はすべてに打勝つものであるとは云へ之が支那流の手輕いのに若くはないのである。論者或は支那の方は不用心でないかとの注意もあるでらうが、婦女子なら知らぬこと男子にかゝる心配は無用であるのである。

然かし更に支那人が禪なくたゞ褲子一枚主義であると云ふことは田舎などでその茅厠に臨み共同の丸太に腰を据ゑ大陸的態度で以つて悠揚迫らず用足しをしながら左右兩隣りの同じ連中と四方山話をしたり、行人をつかまへて話しかけてゐたりするところ邊りは萬事簡便主義で實に開けたやりかたのやうに眺められる。その手輕く譯ない様子で片付けて行くところなど洋服黨の目には無雜作に見えてうらやましいことであらう。その衛生的にして便利の上もないと云ふが何よりの眼目となれるわけであらう。

風俗・趣味

尙吾人は立入つて支那人の男子がなぜかくだぶ／＼した衛生的の寛禪を腰にまとはなくてはならぬかの理由を秘密裡に考へて見たいと思ふ。これは別に差し障りのある問題でもないが、日本人の一般と著しい事實上の違ひを有してゐる點にも大なる關係がありはしないかと思ふ。或はそれは理由にはなつてゐないかも知れぬがこの實支那の男子は概して云つて見ると北支那は六七割また南支那は殆んど全部と云つてよい位にその持ち物の包皮なる者を見るのである。これは自分たち別に統計的に示すわけにもまゐらぬが在支醫者の話によつても立證せらるゝことであつて日本あたりと

大支那系

は全然反對の現象で物珍らしく感ぜらるゝのである。肥滿せる絶大の體格を有するものなどは殊にその方の例に洩れないのである。これは如何なるわけに依つて然かるかその間の消息は人種學上何かり由のあることかも知れぬがよくは判らぬのである。

支那の田舎の運河を民船で行くとき又汽船で行くときなど地方土民のあたりかまはず舷頭に出て筒を平氣にどの方面へでも向けてやつてゐる如き場合、又支那風呂、共同湯などでも殊によくそれを裏書せる材料が獲らるゝのである。まさか支那人の顔さへ見ればそこを聯想すると云つたまでに考へてゐるのではないが事實あまり例外的なものには自分ながら一種の概念的結論を得た如き心持ちがするのである。そしてその例外と云ふのは次に示す回教徒の割禮を行へる男子のことを指す位のものである。

この邊の事實に就いては支那人自身は之を口にすることを好まず又之を口にせしむべく餘儀なくするにも及ばぬことであるからこの邊のことは全く秘話として吾人の見聞せる所をもとに述べるに止めておくのである。固より國々の人情は違ひの甚だしいもので支那は隣國であるとは云へ随分日本で考へて居る気持ちと支那のそれとが全然異なる場合もあるのである。それは支那下層民などの大道の眞ん中にしやがんで朝早晩に又夕がなどによく町外れ、村外れにて用足しをしてゐるのを目

風俗・趣味

撃する。その時誰れ人も日本から行つたものはよく注意するやうにその子供なら知らぬこと、立派な大童にして路に當つて茅廁同様のものと心得てか堆いものを積み上げてゐるので一應その人間の無禮、無作法を戒しむるやうな気持ちと今一つは好奇心からその光景を眺めて見たいとの気持ちからその顔に視線を注ぐのである。すると當人は、にらみ殺すやうな目付きをしてそして「俺はなすべきことをこゝでなし遂げてゐるのである。こちらを眺むるなど怪しからぬ。こちらを見ないで行つたよからう！」

と云つた偉い權幕を顔面に漾はせて、とにかくこちらをにらみ返すのである。そのとき構はずこちらは研究の爲めにその序にその研究物に目を注いで見るのである。これが案の條、例の通りであり、且つ又大きい。頗る珍材料となるのである。向ふが向ふなら、こちらはそのうは手を行くと云つた態度でゐると中々資料は手に入られるのである。

支那では尙四百餘州の便所の構造とか便所を中心とした風俗とかには各省各地大分變つたものが見出さるゝのであるが、それに關聯して人間本能の方面の物の研究にも又無限の興味湧き出るのであるのである。支那の男子相互の間ではその包皮に就いて之を侮るとか之を耻づるとか云つた風習のあるかないかは未だひろく當つて見ないのでよく判らぬ。けれども日本人の考へてゐる如き

大支那系

傾向は見ないやうである。たゞその衛生上から云つてよろしくない丈のことは肝銘してゐるものらしく取られるのである。それは宗教上の信仰にまで結びつき幼児のとき之が切開を斷行して汚物の溜ることを除き之を清淨にすると云ふ點にひどく注意するの美風が認められるのである。そしてこれらの間には談佳境に入れば何等きまり悪い顔色も見せずニコ／＼して之が實物を見せるまでのことを敢へてするのである。けれども一般には之を秘し明示したらないのは云ふまでもないことである。唯自分はそのかれらの信仰が何であるにせよその局部を清潔に衛生に叶ふやうにしてゐる事が動機の一つとなつてゐることは蔽ふべからざる事實と思ふ。その他にもつと大きい動機もあるがそれはこゝに述べない。で讀者の推讀にまかせておく。

十七 支那回教徒の局部の小淨

支那全體に亘つて甘肅、陝西、山西、廣東各地に約五千萬の信者を有するマホメット回教は熱烈なる意氣に燃ゆる信徒を有するだけに支那社會の半面に恐ろしい強い底力を植付けてゐる。わけでもその職業の澡堂、茶館、翡翠老舗、剃頭的の何たるを問はずすべてその信徒相互の間に存する一致團結の力と、またその各信徒の有する潔癖性とは殆んど驚く可きものがあるのである。

風俗・趣味



北支那の路傍に見るガス止め屋の様子

禮の行はるゝ光景である。

支那男子の風俗秘話

かつて天津の租界にあつた支那人經營の漢字新聞が回教徒の豚肉を食はざるは蓋しその先祖が豚から生れ出てゐる爲めであらうなど、揶揄的筆を弄したるを誦み直ちに同社を破壊し印刷機械を打毀ち再起する能はざるまでにやつ付けて了つたのである。又かれらの職業の種類如何に拘らずその回々とか西域とかアラビア文字とか又宗教儀式に用ふる冠や湯瓶の如きシンボルを必ず用ひてその表象となせる所などそこに一致團結、事に當たるの用意周到なるものあるを見るのである。かれはその住宅の界限に清真寺なる回教寺を建立し之を中心に宗教的の勤めをなす爲め毎日集合するをきまりとなしてゐる。回教寺にては教長アホンを中心に莊嚴裏に朝夕儀式が舉行され禮拜念經が行はるゝのであるがそのうち寺内にて見る最も風俗の變つたのはその浴槽に於ける大淨、小淨と稱する沐浴の

大支那系

回教徒は神に仕へるに身の清淨潔白ならしめんことを念じ努めて沐浴齋戒を嚴重にするのである。こは初め清真寺内に設けられたる神聖な井水を汲み熱湯に沸かし、水注様の手のついた桶に入れおくのであるが信者學生（小僧の義）には豫めそれく定められたる水注がある。信者たちはその朝夕毎日五回づゝ必ず之が湯を用ひて全身浴を行ふ。そして更に又身體の部分々々を洗ふことこれ亦五回に及ぶのである。その全身のものを大淨と云ひ、局部的のを小淨と云つてゐるのであるがその之を行ふ寺内の場所設備が頗る振つてゐるのである。その全身浴を行ふ部屋とても低き扉を有する四五尺平方の小室いくつかに仕切られ天井はすべて高く共通に仰がれるのである。高き棚に水注様の桶をおき立つたまゝ湯をあたまからかぶるやうに設備されてゐる。ところが次の小淨の局部を洗ふ方の小室になると之と同じやうに設備されたる低い扉の内に身をかどめしやがんだまゝ例の水注様の手のついた桶から湯を注ぎ出し、かなり念入りに洗ふのである。殊にその小便後の如きは約三十分間も左手を局部に當てしきりと一滴の残りもなきまで注意をして、つけ根のところからしごき伸ばせるのである。こは云ふまでもなく尿道の淨化を行ふ意味であらうが、ともかく丁寧を極めたものである。

尿道の淨化をやつてゐる間は知らぬ參觀者たちはいつまでもその左手をツボンの中に入れて切り

風俗・趣味

出さないで何かしてゐるか變なことなどを怪しむのである。さて十分にしごき終ればこゝに始めて左手を出し例の湯で以つて盛に洗ひ清める。掌から指と指との間を隈なく淨化する。それから腕を洗ひ清め顔を洗ひ目から耳の孔から鼻孔とあらゆる窪まりたる處を残らず洗淨する。尤もこの時は共同の洗ひ場に出て来て腰をかけ溝の前に多勢同じ方向に並んで洗つてゐるのである。溝を隔てて棚があり、そこへ例の桶をおき腕をまくり、ツボンをからげなどして又足を洗ひ趾の間からどこからどこ迄も残らず洗ひ清めるのである。かやうな洗ひかたをするにも必ず口にはアラビア語の經を念じつゝやるのである。

かやうなわけであるから回教徒の男子がその寺に來たつて陰部を清淨にすることは非常なものであつて洵に至れり盡せりである。かくして小淨の儀式を了するのであるが、その間自分の參觀してゐた間は三十分以上を要したのであつた。何にせよかうした小淨が毎日五回と云ふのであるからビジネスのある者はやり切れぬ。住まひの寺から遠い者も大變である。しかし自分の視察した北京の東大寺や西大寺にはその商賣の方などを犠牲にしてまでもその定期の時刻にはちゃんと來て學生共と一緒に勤めをしてゐたものもあつた。若し、やむなく午前十時のが出來なかつたとすると午後後の分と一緒にあとへ取つてそれだけ時間を長くやればよろしい内規になつてゐるとの事である。

大支那系

何れにしても前にとつて一緒に三度分やつて出かけるとか一度分だけ失敬して止しておくなどは絶對に出来ぬことになつてゐるのである。

尙包皮のものは幼児のとき回教徒である以上すべて割禮の洗禮を受け四種の皮の切り方のうちの何れかの方法でやられてゐるのであるからその點は實物を拜見さへすれば回教徒であるや否やは鑑定がつくのである。自分は現に北京東單で姚と云ふものゝそれを鑑定したことがあつた。論より證據そのものは確實なるものであつた。

支那清真寺の男子の方へは女人は禁制であつて絶對に這入らせない。之と反對に又女子のみの大淨小淨を行ふところは絶對に男子は這入れない。しかし婦女子の方は婦女子だけに又かなり際どい話も聞いてゐるが、これ亦儀式的に念經しつゝ舉行するものであるとの事である。

すべて以上の如き支那回教徒の間に見る潔癖性の習慣は之を回々教徒を離れて考へて見ても必ずあることである。むしろ道教の思想から不潔を嫌ひ悪魔を拂ひ奇麗さつぱりとしておくことの考へは古くからあつたものである。儒教の方でも周代家庭にて中庭の中留を祀るの風習のあつたやうなこともすべてこれ不衛生を戒しめ汚水の掃除を八釜しくしてゐたことが想像されるのである。特に支那の男子が風俗上や宗教上の秘事にのみ清潔を尙んでゐるのでは無論ないのである。

唯天は幸いするとも云はんか、支那内地は殆んど古來清潔法を行つたことなく下水水溜まりそのまゝに打やつてこゝに教千年と云ふ星霜を経て來てゐるがその割に疫病とか何とかの災の少ないと云ふのは何と之を説明すべきであらう。永年支那民族はつまりその土地の風土に慣れ自然の衛生に叶つた行きかたをそのまゝ襲踏してゐる結果と見るべきものであるかも知れぬと云へるのである。

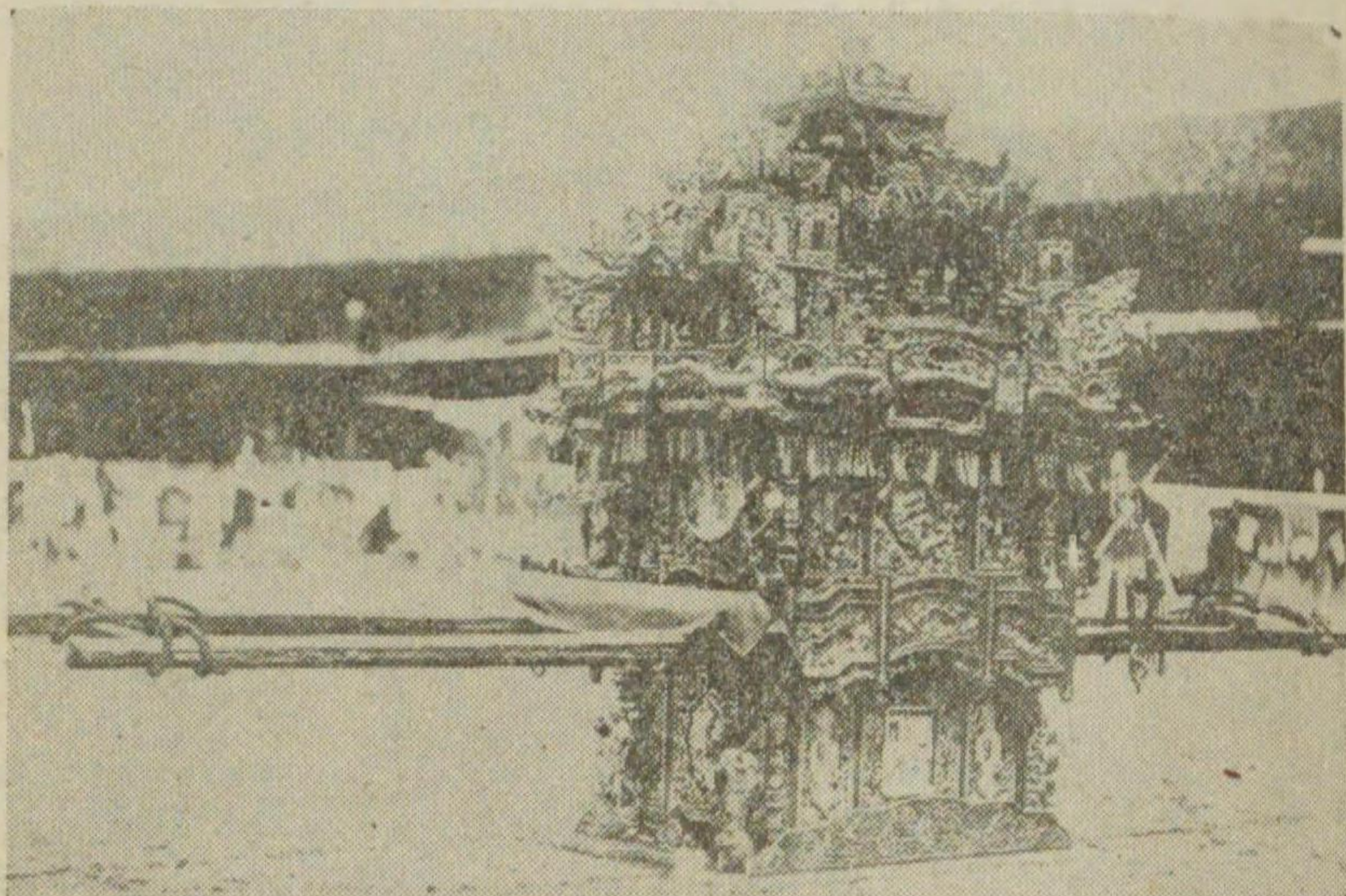
風俗・趣味

五 支那の第二夫人観

十八 人は人、我は我

支那の人は何と云つても大國民としての資格があると云へるか、他人の事なんかは氣にやまぬ。人は人だ我れは我れだと云ふ考へが強く、つまらぬ事に心配をしたり、人の身邊のことを噂して快哉を叫ぶと云つた小國民のところはない。わけでも日本人から見ても感心に見らるゝ點は人の家庭に入つて批評などするものではなく、人の家庭に奥様が何人あらうが、どうであらうがそのやうな問題になると殊に我れ關せず焉の態度を取つてゐるのである。

支那の人々は人の事を噂するなどは、あとが五月蠅いとか、自分で氣がやけるとか云ふ氣分を押へてゐるわけでも何でもない。人の事だから、之に觸れないでゐると云ふ丈のことである。つまり自分に關係のない事であるからそれには見向きもせぬのである。これが自分の人生觀でもあり、道徳上の氣分でもある。又平素さう云つた風に習慣づけられてゐるのでもある。西人はその點に於いて支那人と似かよつた處がある。船中の長い航路などで色々日本人の間では



北平の上流家庭に見る婚禮用の花轎、紅錦の彩色目眩をもるものあり

取沙汰される事柄があり、時には日本人であると大問題にし、だまつて黙過することの出来ぬ事件がどつさり起ることがあるけれども、西人であるとならばそれを決して取りあげない。人の事は人の事である自分はその事について知らないで居る方が道徳的にもよいのだと云つたやうな氣分で殆んど無關心である。西人や支那人は世間狎れてゐるし、世の中がわかつてゐるから野暮なことを考へたりせぬのである。譯の判つた人はそこに來るべきである。これは明々白々のことであるが、しかし日本人は支那人や西人の氣分になれぬのである。つまらぬ事とは知りながら餘計なことに氣をやむのである。一には興味本位に失禮をも構はず探偵的に追及しようとする心が盛である。

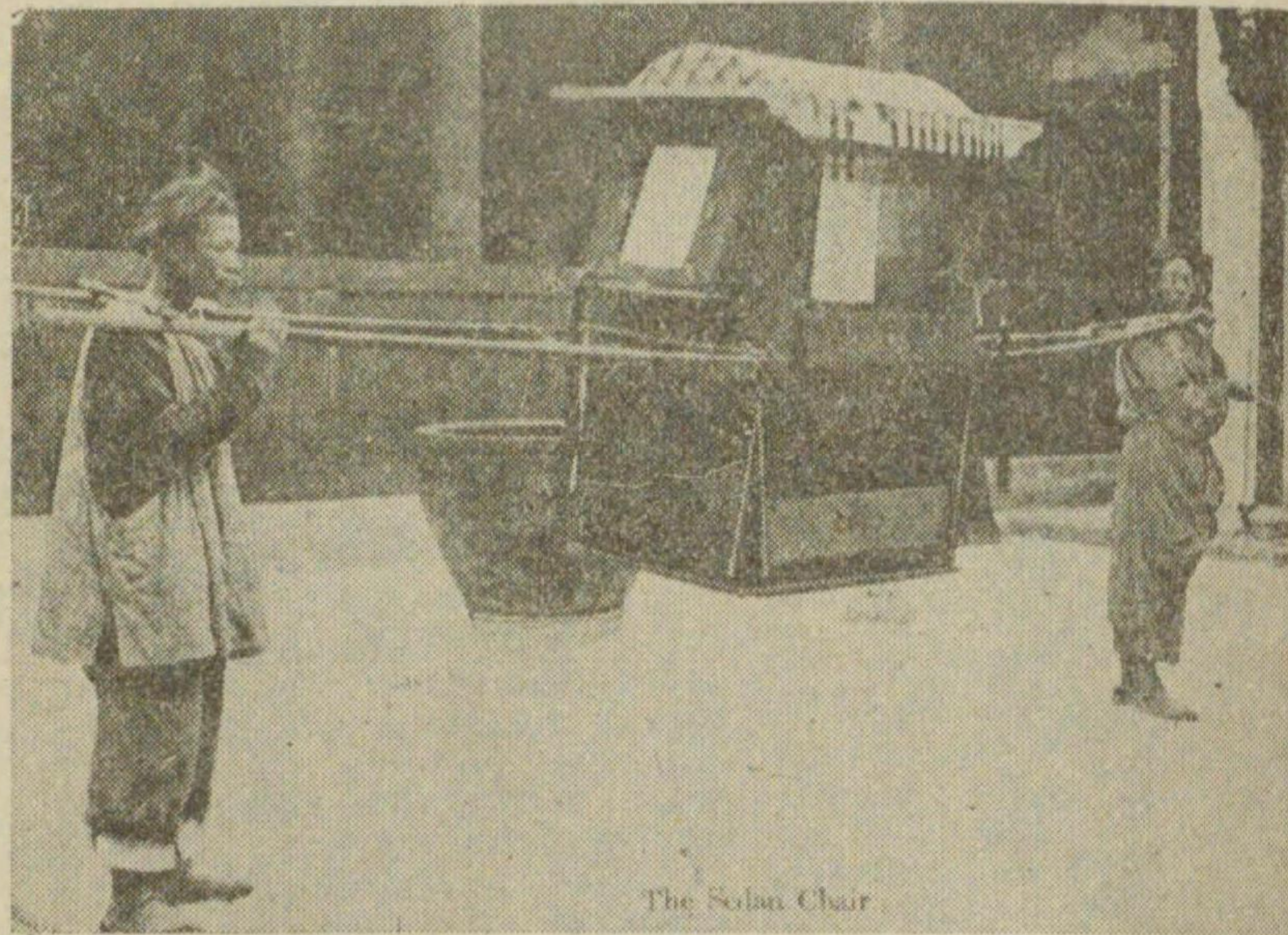
二には自分自身にもやつて見たいと云ふ本能的慾望のある爲めであるが人のそれを實現してゐる

大支那系

話などを耳にする時は只ではおいておかぬとの焦けた気分がむら／＼と起る。
三にはその他人の身上の事を人に告げ世間に知らしめることによつて自分だけの心の満足を買はんとする。人にも知らせ、當人をいやがらせる事が幾分自分の慰めにもなると考へてゐる。つまり人を下げて自分が獨りよがりしようとするのけちな考へのあることは事實である。かう云つた心理作用がはたらいて來るため人の事をたのまれもしないのに勝手に頭痛に病むのである。

支那の人々は趣味は廣いが、かくの如きつまらぬ事に喜ぶやうなことはしない。喜ばないのが本當である。大陸的情趣からすれば人の身上のことなど始めから問題にしないのが本當である。支那では最近でこそ、その生活問題から餘り多くの夫人を兼ね有することは考へられて來た。一夫一婦主義となつて來た傾がある。けれども實を云ふとその實力のあるもの、富を有する者は當然社會的地位に比例して幾人かの夫人を兼ね有してゐるのである。或はむしろそれが自分の腕前を示すシルシとも見られてゐる。又相當高貴の暮しをしてゐるので夫人一人のみの家庭生活を送つてゐるなど云ふことは事實甚だ少ないのである。自動車、自動車の運轉手連中でも主人の宅の屋敷内と、それから自室の方と双方に別々に抱へてゐる。

風俗・趣味



南支那に見る上流家庭の用子轎

ると云つた工合に頼るその間の使ひ分けは巧みを極めてゐるのである。支那家庭の習慣を考へて見ると永い間の歴史的習慣もあり別段異様にとも考へず又家庭内部にて兒女だちも之を怪しんでゐるわけでもないからすべてが天下公認で公明正大に行はれるわけである。支那人の支那流な氣分で納まつてゐる處は正にこゝの處にあると考へるのである。
ところで支那の家庭に第一夫人があり第二夫人があり第三第四があると云ふことは非常に家庭内を複雑化せしむるものと想像せらるゝが事實は必ずしも然らず、家庭内部にありてもそれが常態となれる爲めか、又は人たり自分は自分たりとの考へがしつかりしてゐる爲めか、存外無事で居られるのである。人の事を氣に病むと云ふは一見親切の如くなるそれが愷氣から出てゐる場合の如き最も注意を要する

支那の第二夫人觀

のである。又戒しむべき事でもある。支那人は大家族主義で大きく家族をまとめ數十人より百人二百人と云ふものもあるが従つてその夫人の數なども大變多くなる。傾を有して五人八人から十人二十人と云ふ夫人を蓄へてゐる名家もある。日本人はよくかくの如き大家族主義の家庭の話をきくに際し、どうしてかやうな家庭が圓滿に行くのであるか不思議でたまらぬと云つてゐる。

人のことが氣になる癖を有する日本人にはどのやうな場合でも圓滿を期することは困難である。仕舞には思ひ詰めて神経病などにかゝるやうなものを生ずる。支那人はそこまでは考へ込まぬ。又神経病になるまでも窮することなく呑氣にやるのである。元來支那には人のことは存外寛大に取扱ふ習慣があり、又そのやうな氣分もある。同時に自分のことも存外平氣でゐられる習性がある。よく家庭で見る事であるがボーイが主人の愛してゐる花瓶を棚から落として割つてしまつても決して自分が悪かつた、粗勿をしたとは云はぬ。誤まる氣分は更になく、そして嘯いて云はく

「掃除をしてゐたら花瓶が自分で落ちて毀れたのです」

地球の引力で落ちたのでもありそれ自體の重力によつて轉げ落ちたのでもあるからその答辯も間違つてゐるわけではないから追及は出來ぬかも知れぬが大體かやうな態度で平氣に構へてゐるのである。實に寛大そのものであると云つてよろしからう。かやうなわけであるから第一夫人が第一

見るにしても存外平氣で人は人たり、自分は自分たりと云つた考への強いことは意外なものであると見られるのである。

又その第一夫人が主人公に對するすべての方面に就いてその心理作用はいかにはたらくものなるかと見るも、これ亦存外大陸的と申すべきか平氣と云ふべきか、自分一人でモノポライズしてゐると云ふやうに固く考へ込んでゐない。その點は隨分呑氣に大きく考へてゐるものが多いやうである。固より支那は云ふまでもなく主人よりも第一夫人の方が年齢が二三歳上であり、又世間のこととも増せてゐるのであるから時々高飛車の態度に出て亭主の面子のなくなる位叱りつけてやるやうな場面もよく見出すのである。けれども大體から云つて支那家庭の第一夫人は人たり我れは我れたりと云つた氣持ちでゐらるゝものであるから或る程度以上は悟つてゐて決して深入りをしないのである。従つて第二夫人は、よほどやりやすいのである。あれで一々やん／＼やられては第二も第三もたまつたものでなく一日も寧日はないのである。その處は第一はよく練れたものと云へるのである。

十九 第二夫人の氣分

支那の第二夫人觀

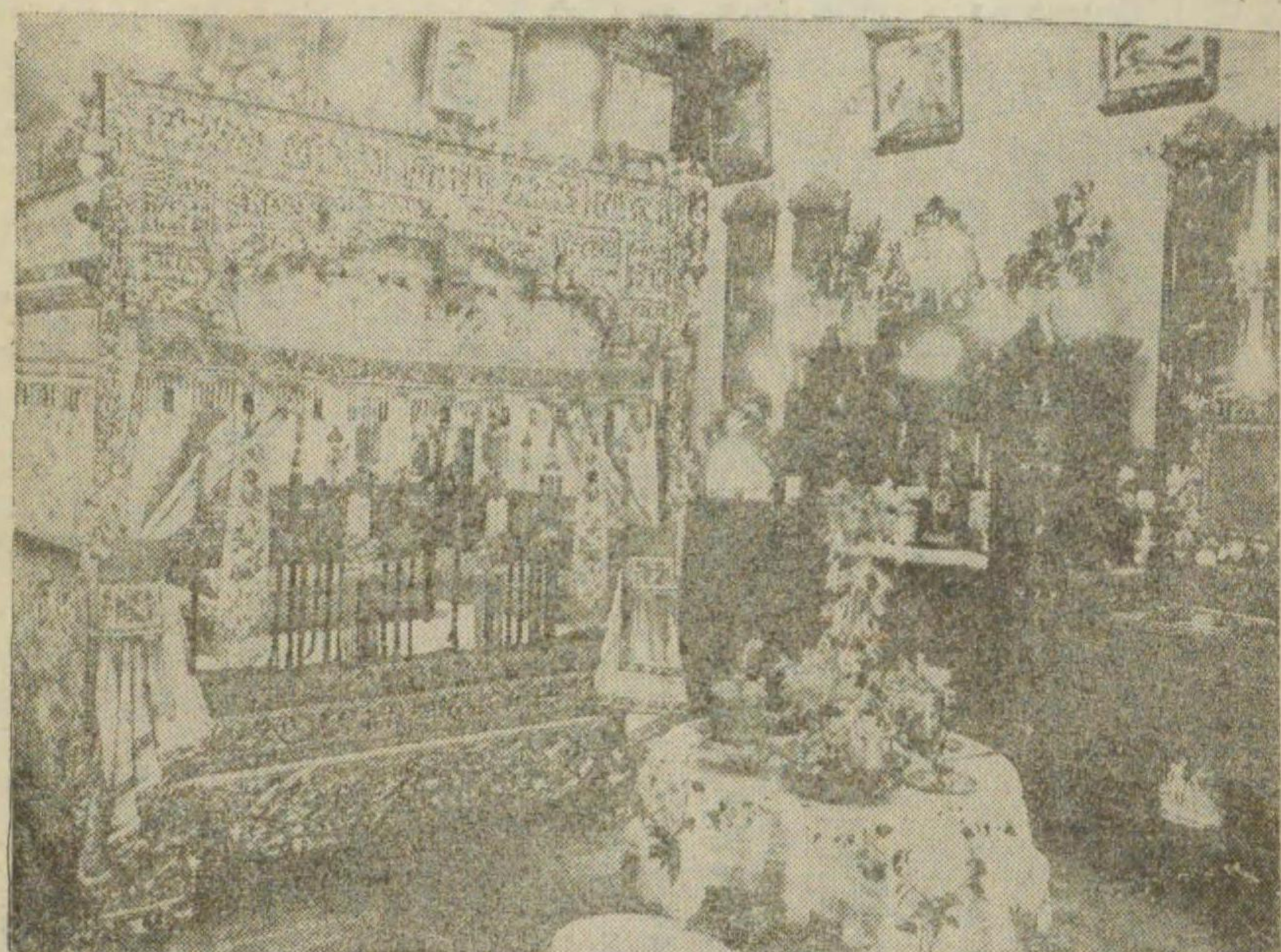
大支那系

第一夫人は多く年齢が亭主より上である關係上亭主の方で或る時期になると第二夫人を家庭内に入れる。その時、日本のやうな波瀾重疊したり亭主が氣兼ねしたり第一があたまから恐ろしい角を出したりなどすることは決してない。氣分よく了解もし又第二第三をたくさん持たせる方が亭主の腕を揚げさせる所以であるといふ。又澤山持つ方が實力のあつて持つ以上はたしかに社會的にも地位が安心して第一に相談をかける。あがつたことになるわけでもあるから至つて家庭内も圓滿に進行するのである。日本では、しかし家族制度もちがひ社會の風習もちがひ、又氣分もちがふのであるからしてかやうなことが若しあつたら大變な騒動になる。よほど判つた奥様でなくては第二を家へ入れるなど云ふことはむづかしいのである。その噂を聞くとか、その香を臭ぐとか變な年始狀が舞込んだとか云ふだけでもえらい騒動を起こすのである。ところがそこへ行くと支那では慣れたものである。例へば、

一 家庭の子供にしても第二第三第四と母の違つた母親が入つて來ても何とも思はぬ。異母に過ぎぬと見てゐるだけで繼母と云ふ考へもあまり甚しく活いて來ないのである。

二 亭主の方でもあまり第一第二第三の間に對して特別の等級をつけぬ。勿論實權は第一に認め第一のお眼鏡に叶はぬものは始めから家庭圓滿の爲めに入れぬことにしてある。入れる以上は第一が認めて入れるのであるから至極穩かに行つてゐるのである。

風俗・趣味



廣東人富豪華僑家庭庭に見る優雅な寢臺

三 第二夫人はその家に來るときから多少氣が引けてゐるわけである。その家に嫁ぐとき既に正式の紅轎に乗つて來たわけではなし、ちやんとした媒酌人があつて來たわけでもなし、唯々第一の御ゆるしがあつて這入つて來たわけであるから萬事につけ第一に對し從順に出來てゐるのである。若し第二が日本人などである場合は猶尙第一におとなしく従つて云ひなり放題になつてゐるのである。これが最も大事なこととして若し第二にして一々角を出して第一を凌がんとしたり、あまりテキパキした考へを以つてゐるときは衝突は免れぬのである。そこはよくしたものである。

四第三第四以下いくらたくさんの夫人がゐても、すべて皆之に倣ふと云ふやうな事情であるから比較的圓滿に云ふことも少なくて行くのである。

つまり支那人の妻になるものは皆その自己の人生觀なるものを立て悟つてゐるのである。細かいくだらぬことを云つて見たつて始まらぬと云ふこと位はよく心得てゐるのである。

日本の夫人であると別にやく譯でもあるまいが兎角揉めごとが多く、云ふことも多く自分でどこまでもモノポライズせんとするの心持ちが濃厚である。それでこそそこに貞操觀念や道義心や自責の念も出るのではあるが、しかしその點をあまりに小さく堅くそして融通のきかぬやうに、せまく考へ込んでゐるのであるから、結局自分で舌を咬んで自害したり、狂人になつたりしてしまふのである。日本の婦人のよい處はこゝに在るのであるが同時に又その爲めひどく損をするわけでもある。しかし、日本女鑑の花はこゝにあるので在つて若しそのモノポライズしてゐる考へがゆるむ時は婦道の根本精神の亡くなるときであるからこゝの處は大事なところであると思ふ。

ところで支那の第二夫人の氣分は日本の妾とはちがひ飽くまでも妻である。妻ではあるが正室でなく側室である。偽物ではなく本物である。本物ではあるがナンバー・ワンではないと云ふまでである。その處で當らやさわらややつてよい加減にやつてゐるのである。支那夫人のあたまたまられば八軒長屋で労働者風情のカミさんなんかになつてゐるよりか堂々たる羽振りよき人の側室となつてゐる方がどの位よいか判らぬと考へるのである。之に反し日本人のあたまでは、たとひお粥を分けて啜つても他人入らずの二人めうとで暮したいと云つた潔癖性を發揮するのである。支那人の間にはさう云つた窮屈な考へなんかもつものはあまりあるまいと思ふ。

これはつまり日本では女が純な心から貞節を以つて盡さうと云ふ決心の固いだけ、それだけその亭主も一人で専有してゐたい。若しその原則が破らるゝならば殃々として樂しみます不愉快でたまらぬ。仕舞には戸に釘を打ち込んで呪咀すると云つたやうなことまでやるやうになる。かやうなわけであるから支那の第二夫人と云ふものは存外呑氣で悠々たる風懷を有してゐられる。亭主も亭主だが第二も第二である。一體又大家族主義の支那の家族ではこれではなくては保てないであらうと思はれるのである。

二十 第二第三は分業的専門にて納まる

一國の政府に大藏、外交、文部、農林、陸海軍と分れてゐるやうに支那大家族のうちにもその夫人が澤山あればあるほどその分業的専門が色々に分掌されてゐる。その辯舌の巧みでよく切れる夫

系大那支大

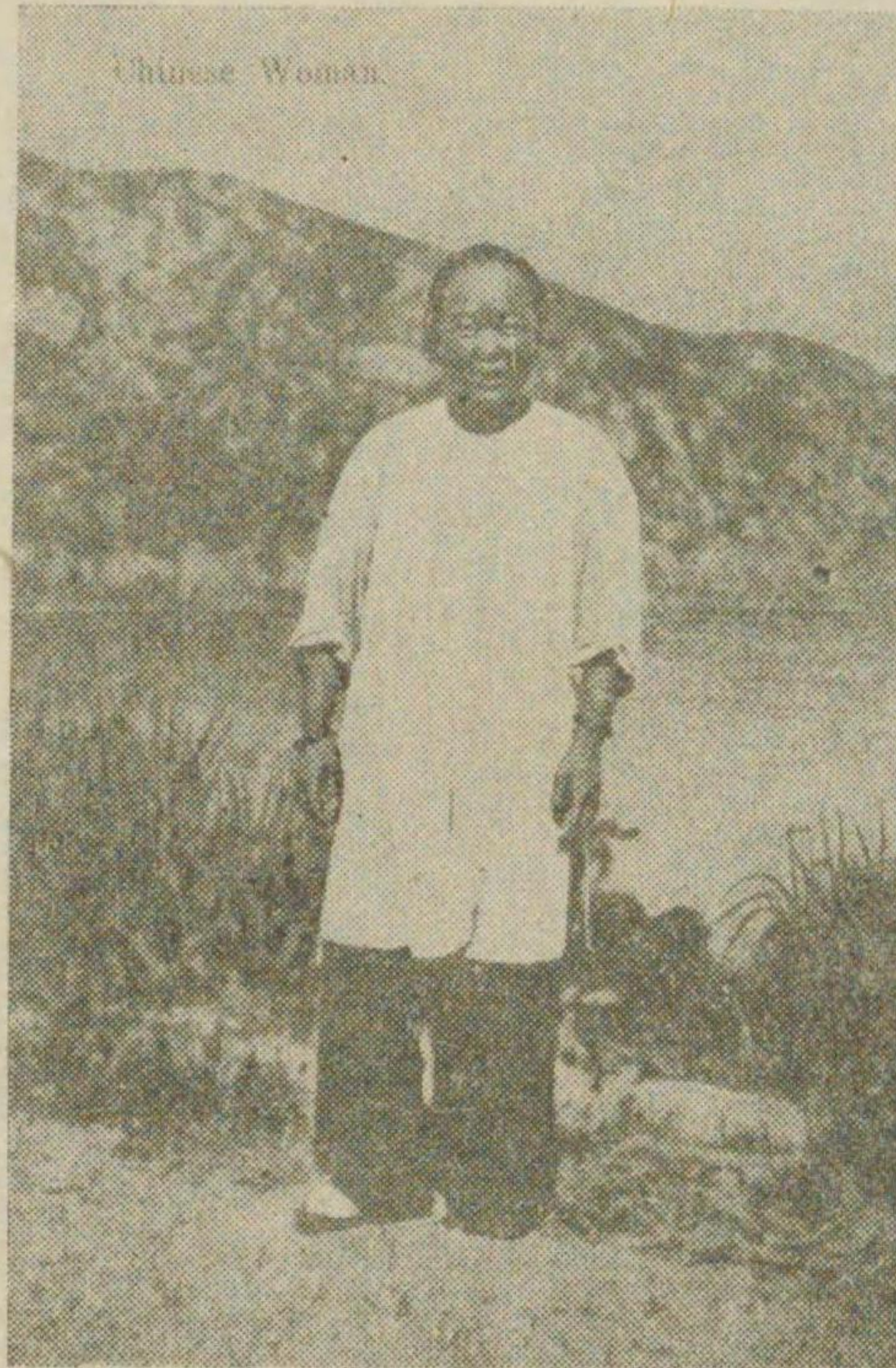
人は外交をやり理財に長けたものは財政をやる。殊に第一夫人はこの財政の方をやつてゐるのが多い。かう云つた分業的専門のあることは家庭を圓滿ならしむる上に大事なことである。

そして第三でも第四でもたくさんゐればゐるほど主人の社会的地位を高めさせて行くのであると云ふ考へが固いから何れもよくいそしむのである。従つてその側室の多いほど主人自身も得意でゐられるわけである。日本のやうに一々やかれては亭主の方でも気がくしやくするものであらう。つまり支那は責任がそれぐ別になつてゐるから大變相互間の氣持ちが樂である。その上、例によつて人は人、自分は自分主義であるからしてその間がうまく呑ん氣にをさまつて行けるのである。

日本の家庭のやうに家の主婦が一々三度々々の食事に口を出すと云ふことになつてゐるのであると、これだけでも大變であるが支那の上流中流では決して奥様が食べ物に口を出すことはせぬ。唯當てがはるゝものを黙つてたべてゐればそれで評判がよいのである。正妻も側室も何れもこの食事のことには一切口を出さぬのが例である。これは日本人として頗る物足りなく思はるゝのであるが事實自分の知つてゐる範圍内には多くの家庭はさうである。事實又、司厨なりボーイなりがその事に關係し野菜から豚肉、鶏骨、饅頭なりすべてその買ひ出しに至るまで一切をやつてゐるのであるから、そこに口錢の楽しみもある。そこへ若し妻君たちが言葉を出して來ては妨げにもなるのである。

ある。

然らば第一第二第三などの婦人連は家の中で毎日主なことは何をしてゐるのであるかと云ふとビジネスは兎も角もその趣味としては次の如き事をしてゐる。



着夏の婦主る見に庭家の東廣

一自分の穿く美しい靴の刺繡などをする
支那美人の靴と云ふのは美人自らが之に美しい趣味的の圖案を施し自分の氣持にあつた飾りを加へるのである。
これはかなり立派な家庭の夫人にして
もたしなみとしてやつてゐるのである
二自分の身の廻りの寶石であるとか或は
お化粧であるとか、好きなことに毎日

味趣・俗風

時間を消してゐる。全く家にあつて夫人は飾り物見たやうなものであり亭主もそれを承知して
もらつてゐるのである。速く云へば亭主の玩弄物の如き觀を呈してゐる。
三夫人連は家庭の一室に集まりかねを張つて麻雀をやつたりしてゐるものも多い。そして終日終

支那の第二夫人觀

夜それにくらしてゐるものが多いのである。日本で云ふと之を博徒の如く見るかも知らぬが支那ではその意味にはならない。全くの道楽で遊戯としてやつてゐるのであるから八釜しくとがめてはいけないのである。

九四

四 ハイカラな新しい女は別であるが多くは主人が外出につれてあるくやうなことはなく夫人と云へば室を守るものに相場がきめられてゐる。上海、天津、北京あたりは特別で田舎の町に行つて見ると上流中流では決して女は外に出さぬ。古習のまゝを今でも守つてゐるのである。近來モガの斷髪を見ることも多いが、それは開港のみの話であつて一般の支那はまだそれほど開けてゐるのではない。

支那の新人社會では第二夫人の話などをすると寧ろ快く思はない。生活問題の事もあり又主義として持たないのだと云つてもゐる。しかしこはかねの出来ない間の境遇を云ふに過ぎぬ。功成名遂げて思ふやうな生活がやれるやうになると、いつしか第二第三第四を蓄へるやうになる。又自分には要らぬと嘯いてゐても、はたから持たせるやうにすゝめて來るのである。悪くないものであるからツイ云ひなり放題になる。これは阿片の問題とよく似てゐるので人間の弱點はこゝに在る。蓋し支那ではこれも出来る身分になればやつた方が得だと考へてゐるものが多いやうである。

日本人は支那の家庭のこの第二夫人觀の事に對し先づ第一に家族に對してよくないと考へる。又子供の教育にならぬとて心配をする。日本では勿論さうである。ところが支那は國情が國情であり料理があつたの料理であり又昔からこれがあたり前の習慣となつて世間にいくらでもその實例が見せつけられてゐる。たとひ自分の家でそれを慎んでゐても外のうちにいくらでも例が見えてゐるから子供もよくその間の消息を知りぬいてゐるのである。つまり社會を擧げて全體がそれであるから全く教育問題などは超越してゐるのである。

されば支那では倫理觀の道德觀のと云ふことでなく唯誰れ人でもそれをやる丈の實力が出來たらやればよろしいのでやれない甲斐性なしはやれないのであるとだてと極めてあつさり考へてゐるのである。日本のやうにやれる力があつてもやらずに我慢をしてゐるのが道德的だなど云ふやうに固く考へてゐるものはゐないのである。こゝが支那人の第二夫人觀の氣樂なところであり、容易に之を日本に取り入れることの出來ぬ點でもあるのである。支那はあの通り儒教の何のとやかましく一方に云つて男女七歳にして何とやら教へてゐるが、しかし事實は七歳以下にして席を同じうしてゐる場合が甚だ多いのである。八釜しい論語はあつてもそれはペーパーの上の論語であつて實際の支那は支那である。すべてに亘つて支那は融通が利いてゐるが又支那人の呑ん氣なところ又支那人

の人生觀 又その歡樂生活で一生を了へんとしてゐるところなど、その間の消息を考へて見ると
いかにもよく了解されるのである。

日本でも若し人から批評せられないこと、又自分に力が出来て来たとしたならば、この二大條件
の下に随分やりかねまじきものが多いこと、思はるゝが幸か不幸か日本人は人の事を氣に病み世間
の口が五月蠅いのでよい鹽梅に制肘されて行つてゐるのである。この點は人の口のうるさい爲めに
よく調節せられてゐるわけであると斷じてよろしからう。要するに支那と云ふ國、又支那の社會
は第二夫人又第三第四をおくことを何とも窮屈に考へず自然のまゝに任せて少しも之を意に介しな
い。その爲め自動車の運轉手あたりでも第二をおいて奇數の日と偶數の日で居處を別にしてゐるく
らゐるものである。至つて氣樂に考へ倫理問題や教育問題にこだはらないでゐることがよく判るの
である。外交問題でも何でもすべて支那人のすることは型を超越して思ふがまゝにやつて行くので
あつてそこに支那人の精神生活の特色が見られるやうに思はれるのである。

六 支那家庭に見る兒女の生ひ立

二十一 支那の子供

日本には支那の社會のことや家庭のことゝなるとその内部の様子がさつぱり傳へられてゐない。
従つて支那人の日常生活の背景をなしてゐる風俗のことなどゝ來ては殆ど判つてゐない。本當に
支那を知らうと云ふには支那の家庭のことが先づ判つてゐなくてはならぬ。そのうちでもその兒女
の生ひ立ちがどんな風に向かつてゐるものであるか或は親の心は子供に對してどんな點に注意が向
けられてゐるか。又その少年少女は毎日如何なることをして過してゐるのであるか。又家庭以外
では社會からの影響をどのやうに受けてゐるのであるか。それに就いて如何なる美質を子供たちは
有してゐるかなどゝかなり興味のある事柄がたくさん見出さるゝのである。こゝには自分が平素支
那で實地に見聞した範圍内で興味のある方面から少しく左に紹介して見よう。

いづれの國にしても人情に變はりのあらう筈はないが支那は特に各地方ともその家庭にてはその
親の心の暖かい氣持ちの下に可愛がられつゝその兒女の成長してゐる様子を見受けるのである。殊

支那家庭に見る兒女の生ひ立ち

大支那系

に支那の子供の生立と云つたら昔しから唐子の繪に見ると寸分變りがなくその罪のない丸顔をしてあたまの左右には總角(頭髮を少しく圓形に剃り残してゐるものを)一二寸細かく編み之を紅絲で以つて撚り付けてゐる様子など畫そつくりである。その母親に可愛がられ日夕抱かれて門前あたりはその玉の如き姿を見せてゐる光景と云つたら支那都鄙いづれで見ても一幅の畫題をなしてゐるのである。或はその誕生頃の少兒(子供)であると云ふと銀の頸飾りへ持つて行つて「富貴長命」だとか又は、「一品當朝」だとか云つた縁喜のよい嘉句を入れたのを掛けて美しい帽子までかぶらせ嬉しげに抱き上げてゐるのを見る。一品當朝とは今日は時代が變つてしまつてゐるが矢張り舊時代の正一位の高官まで出世するを祈り祝つてゐる心持ちから出た句であると思はれる。今でも田舎に行つて見ると依然としてまたこの文字が目につくのである。又子供の帽子のことであるがこは虎の子の飾り鳳凰の飾り花飾りなど、色々五彩うらゝかに施されたものをかぶらせ見るからに鍾愛の氣持が溢れてゐる。これは上海の大馬路、畫錦里あたりの衣裳屋や化粧品店のショウ・ウインドウなどに陳列されてあるところを見れば一見してすぐ想像のつくものである。そこには母親などがこの畫錦里の店頭で子供の祝ひに買ひ求めてゐるところを見てもよく判るのである。尙又その衣裳にしてもさう云つた祝ひの時などは色の美しい服の色が用ひられてゐるのを見れば判るやうな判つきり

風俗・趣味



北平城内に見せるイハ少兒の日向つこ

かせ子供靴をはかせることは云ふまでもない。玩具にはデンデン大鼓(豆大鼓)始め色々あるがそ

支那家庭に見る兒女の生ひ立ち

のたよりなさうな紅葉の手に軽く持つて振つてゐる様子と云つたらない。若しその子供をしばらく貸してくれるなら借りて来て一寸でも抱き上げてやりたいやうな氣持ちがするのである。それから阿媽と云つて子守をする者が大抵の家庭にはゐることになつてゐる。阿媽は昔から云ふ例の襦袢で以つて背に子供を負うてゐるがその様子はこれ亦畫にある通りである。それから江南地方の田舎に行つて見ると木の桶又は藁製の桶のやうな屯座の中へ底を高く作り上部をほそ目に底の方ほど大きく廣く拵らへたものを庭先などにおき之に幼児を容れて遊ばせておくやうなことをするのである。或は又丸竹で赤ん坊の二三歳のものに腰をかけさせるに都合のよい兒童椅子とでも云ふべきものなどの出来てゐるものがある。上海杭州あたりによく見るが何れも手丈夫に出来てゐて雅致にも富んだものである。

支那の子供の生立ち工合はその農家や商家、勤め人の家庭と云つたやうに色々そのうちの職業の異なるに従つて様子のちがふべきは當然であるがさうそのこまやかな神経質なところまで行届いたものではない。衛生方法などの講ぜられてゐるうちと來たら誠に少ないやうである。これは醫學衛生などの考へが今日まだ古代のまゝの状態だ幼稚なところであるから何とも思はないわけである。しかし子供の健康に就いてはその間に自然の環境が如何に生かされてゐるかは世に於いては

ある。又生れつき抵抗力の強くないやうなものは自らどん／＼まゐつてしまふ結果になつてゐる。その爲め支那は存外乳兒や幼兒の亡くなつて行く率は多い方ではあるまいかと思はれる。勿論こゝに之を統計などで説明することは出来ぬにしても恐らく事實さうではないかと察せらるゝ。と云ふのは田舎の墓地に行つて見ると特にそれを肯定する子供の小棺が多いことである。それによつて見ても大抵わかるのである。

支那社會の奇習の一つとしては支那町の或る方面では又子供の賣買の行はれてゐることは實際の事實であるがこれは子供の夕方戸外であそび戯れてゐるやうなときを狙つて人攫ひが來て之をさらひ持つて行つてしまふ。それを構はず他の地方へ持つて行き籠に入れて賣りあるるのである。三四弗から五六弗までの相場で値引きをするとの事に噂されてゐる。嘘のやうな話に聞かるとであらうが全く本當にある話で現に上海あたりでもよく見聞するところである。

二十二、中流家庭の少年少女

支那の子供は西洋の子供や日本の子供とちがつて又一種特別の趣がある。その可愛いさのほひが一種別なのである。その天真爛漫なところ又そのゆつたりした處は血統的に又世襲的に受けて

支那家庭に見る兒女の生立ち

大支那系

来てゐるところであらうがそこに興味深いものがあると思はれる。それに付けて上流は上流なりに、下層は下層なりにそれ／＼特色を見せてゐるのである。その中間の中流社会は極めて少なく、殆んど成立つてゐない位少ないのであるがその階級のものに就いて見ると何となく發明な賢い子供が多いやうである。しかもその間何となく大陸氣分を受けてゐるところがある。どうしても支那以外の國土に生れた所の子供には受取れない美質特色を備へてゐるやうである。固より見たところの恰好は近來そのあたまの髪のかみかたも洒落たハイカラ風に刈つてゐるのもあり、益々以つて賢さをうに眺められる。ごく最近にはその子供が少年少女の何れであるかモボとモガの見分けがつかず髪を見たゞけでは判定のつかぬ者さへ少なくない。止むなくそこで衣裳の工合などを見てどうやら少女とすれば少女らしい色ものを用ひてゐるわいと之を女兒として察するくらゐである。

支那の子供だちの遊びかたに就ては先づどのやうな事をしてゐるか云ふと春さきになつて試みに田舎へ這入つて見ると云ふと凧揚げに餘念なく遊んでゐる様子を見る。これは誠に無邪氣な風でよろしい。或は都會地では子供が集まり多勢で芝居ごつこなどして遊んでゐるやうなことも見る。北方では冬期流水と云つて氷すべりのスケート遊びは子供たちの最も喜ぶところのものである。北平あたりのアルチヤ二開であるとか白雲山遊園地の標の上であるとか又味の標標あたりに遊ばせて

風俗・趣味



廣東東莞の人家庭に見る守り用の
本日、横濱に之を見ず

るのを見る。又少女だちは人形遊びに粘土遊びと云つたもの、或は色紙や色紙の遊びなど家のうちの遊戯振りを見受けるのである。

次に勉強の方はどうかと云ふと先づ少年少女の文字方面の智識は云ふまでもなく町や村に書房と云つて寺小屋があるのでこれに通ふので大體は覺ゆるわけになつてゐるのであるが、これとても寺小屋に通うて居ない子供の方が遙かに多いのである。

又その寺小屋の敷と云ふものも極めて少ない。寺小屋では規則の上では近來國語と算術の二つは必ず課すべきことにきめられてゐるのであるが然しさう

は行つてゐないのである。寺小屋とは讀んで字の如く寺の内部に設けられてゐるので支那でも寺廟内の一室がそれに充てられてゐるやうである。その寺は佛寺と限らず回々教の寺でも同様である。回々教徒の子弟は回々教の學校に通つて來るものが多い。又伊蘭學校と云ふ回々教系の學校へ通

支那家庭に見る兒女の生ひ立ち

大支那系

學してゐるものなどもある。子供は一般に小學校に這入り規定の課目が課せられるわけであるが、田舎に這入つて見ると課目どころの騒ぎではない。殆んどその校舎らしいものさへも見ない。噂の聲が洩れ聞こえてゐるのは矢張りお寺の境内ぐらゐのものである。しかしさうは云ふものゝお寺の境内に持つて行つて立派な設備をなしちやんとした先生や村夫子然たる髯を生やかしてゐる老先生などのゐる所もある。先生がたは洋服姿ではなく皆在來の支那服姿で教壇に立つてゐるのである。時折その教室内を參觀させてもらつて見ると壁には黒板が掲げられてある外に尙壁といふ壁を持つて行つて博物の繪とか地圖とかその他その組みの生徒の手習ひ清書とかを一面に掲げてゐる。かう云つた調子に壁の空地を何かで埋めて目から訴へて教育すると云ふやり方を見せてゐるのである。とにかくかくかくの如くして兒童の爲めを相當に考へて努力してゐるところが察せられるのである。尙又家庭の方では少年少女だちにいかなる文字訓練が施されてゐるかを見ると、こは色彩の美しい小冊子や又参考用の黒刷り小冊子などが便宜與へられてゐるやうである。例へば

- その一 幼稚識字(二冊もの) 上海商務印書館發行
- その二 看圖識字(上下二冊)

(幼童玩日冊とあるもの)

その三

- 繪圖小學生(六種十二冊帙入)
 - 小遊戲(二冊)
 - 小魔術(二冊)
 - 小唱歌(二冊)
 - 小謎語(二冊)
 - 小戲本(二冊)
 - 小笑話(二冊)
- 上海世界書局發行

など、云ふものが最も興味深く使用せられてゐる。その初めのものを見てみるとこはつまりその兒童が書く字の書きかた、筆の運びかたを教へそれからして、人、又、木刀、手、花、衣、城、帽、鞋、袴、襪、牛、羊、門、窓、書、紙、杯、碗、鶏、鴨、箱、筆、墨、卓、椅、狗、鼠、猫、床、帳、被、樹、枝、葉、河、井、田、斧、鎗、砲、と云つたやうなものを色と形とからその實物を教へ同時に又その文字を練習させると云ふ風に出来てゐるのである。その少年少女の嗜好に投するやうに出来てゐるところに實用向きなところがあつて面白い。又そのあとの分を見るとそのうちに小謎語のところがある。そこには例へば次のやうなのが見當るのである。

五個兄弟

生在一起

有骨有皮

長短不齊

支那家庭に見る兒女の生ひ立ち

風俗・趣味